

う  
さ

# 鳥鷲のユイトラン

前編

無坂  
枝杖

## まず主役が消えた

(一)

老舗旅館風天閣の廊下を、大勢の記者たちが右往左往していた。「馬鹿野郎、探せ！ 探すんだ」

廊下の真ん中に仁王立ちになり、傍若無人に吠えている猛牛のような男は、古谷野忠雄だ。

玄関を入ってすぐの広大なスペースには、磨き抜かれたナラの床板が重厚に敷き詰められ、館内を、まるで鏡面のように克明に映し出していた。風天閣のすべての導線が、ここから始まる。老舗の顔にふさわしい風格を、この濃い鉛色の床が紡ぎ出しているのだ。それは、この宿が永く地道に守り継いできた歴史を象徴するものでもあった。

「おかしい、もう時間がないぞ」

「本当に誰も知らないのか、連絡もないのか」

廊下を走り回る男たちの群れは、そうした伝統の持つ威厳とか格式などというものとは無縁の存在のようだ。

「この馬鹿、なにをしとる。おまえも探しに行かんか！」

古谷野は、地元選出の陣笠議員。中国山地の裾野、瀬戸内県の奥座敷とも呼ばれているここ奥花温泉に、囲碁の白竜位戦第六局を誘致するにあたっての陰の立役者だった。白竜位戦のスポンサーは、インターネットで「桃源市場」と呼ばれる仮想の共同店舗事業を展開して急成長した株式会社桃源。古谷野はここに、派閥のボスの名を借りて強力に働きかけ、晴れて第六戦の開催をもぎ取ったのだ。

白竜位戦というのは、二年前に創設されたばかりで歴史は浅いが、賞金は棋聖戦や名人戦、本因坊戦に並ぶ高額なもので、ファンにも人気の棋戦だ。二日制の対局で七回戦。先に四勝した方がタイトル保持者になる。つまり、もつれば第七局までいくが、勝敗が偏れば四局で決着する可能性だってある。そんな、行われるかどうか不確実な第六局の切符だった。

兵江健作白竜位は、棋戦創設以来タイトルを譲らない実力派

若手棋士だ。今が打ち盛りのタイトル保持者に、重戦車とも呼ばれ厚い攻めが持ち味の、梶原三郎九段が挑む挑戦手合いである。

その本番当日に、兵江白竜位の姿が見えないのだった。

「どうじゃ、まだ連絡はないか」

この大一番のために、散々汗を流し、金も注ぎ込んだ。くわえて勝敗の星運にも恵まれ、やっと実現にこぎつけたのである。こんなことで、せっかく誘致した大一番がむぎむぎ消えてなくなってしまう

るか。古谷野には、執念にも似た思いがあった。

「おまえも行け。なんとしても見つけて、首に縄をつけてでも引張ってこい」

「あ、はい」

怒鳴られて、事務方司令塔役の福島真紀子までが慌てて走りだした。元々は総合病院の看護師だったが、入院してきた古谷野に見込まれ、引き抜かれた。以来、ずっと古谷野のそばにいて、現在は筆頭秘書を務めている。

「困ったことだわね」

小走りに風天閣を飛び出してはみたが、探すあてなどない。棒のように突っ立っていたら怒鳴られるだけだから、とりあえず動いているしかないのだ。

「女将、警察には連絡してくれたか」

寄らば斬るぞの勢いの古谷野に、今度は旅館の女将、鷺尾夕子が返事に詰まる。

「警察って、先生。もうしばらく様子を見てからにされてはいかがですか」

客相手の商売である。出来ることなら警察沙汰にはしたくない。大騒ぎになって困るのは、白竜位戦を主催する棋院だっておなじだ。それだけではない。スポンサーだって、おかしな事件で名前が出るのは望むところではないだろう。

「たしなめられて、古谷野も、そこに思いが至ったようだ。」

「ん、そうか。よし、わかった」

「ここは素直に引き下がった。」

「ありがとうございます。私どもも、従業員を総動員してお探し申し上げます」

「そうしてくれ、頼むぞ」

頭ではしげしげ納得したが、腹の中にはまだ煮えくり返るものがある。相変わらず苦虫を噛み潰したような顔だ。

「おい、聞いたか」

関係者控え室も騒然としていた。

「白竜位が消えた」

「第六局は、どうなる」

「中止か」

「なに、不戦敗？」

立会人高柳九段の胴間声が、対局室から壁を通して廊下まで筒抜けだ。

「定刻に開始を宣言して、遅れた分、白竜位の持ち時間から差し引く？ そんなルールは子供でも知ってる。本当にそれでいいのか」  
棋院の事務方を激しく叱責している。

「馬鹿、だから東京に確認を取れとゆうとるだろう」

自慢の口ひげが激しく震えている様が、目に見えるようだ。

廊下にたむろしていた記者連が、漏れ聞いて顔色を変えた。

「不戦敗ですか」

廊下の空気が凍りつく。

「いつまで待つんだ」

「もし、白竜位が姿を見せなかつたら」

テレビ囲碁番組での、軽妙なトークで人気の記者が、

「やはり、これは不戦敗しかありませんか」

背後の長髪無精髭の中年を振り返った。

「いや、そうと決まったものでもないな」

意味ありげに呟いたのは、新聞解説を依頼され、さっきまで記者

控え室に紛れていた今井九段だ。

「今井先生、ちがうんですか」

「いや、一般的なルールからすればそうなんだが、白竜位戦に関し

ては、遅刻に関する明文の規定はなかったはずだ」

一両対局者は、会場となる旅館に宿泊し、昨夜は地元の名士も交え

て盛大な前夜祭も催された。対局者は、必ず対局会場となる宿に前

泊するのが決まりだ。

つまり、タイトル戦での遅刻など、通常、ありえない事態なのだ

った。少なくとも、白竜位戦に関しては、遅刻は想定外であり、遅

刻に関する文章化された規定も、当然のことながら存在しないとい

うのだ。

みんなが、白竜位に一刻も早く出てきてもらいたいと、そのこと

だけを願っていた。

ただひとりを除いては。

「普通、持ち時間から引きますわな」

挑戦者の梶原三郎九段が、読み上げ係や記録係の若手棋士に声を

かけてきた。

「あ、はい。でも…」

彼らも、うかつな返事は出来ない。

梶原は、ここまで二勝三敗と、わずかに打ち込まれていたが、今

回、ここで不戦勝ともなれば、労せずして一気にタイに持ち込める

のである。

「大手合いルールでは、そのようなことでしたわな」

物言いは鷹揚だが、しかし毅然とした論調で主張してきた。

現在は廃止されているが、永年にわたって棋院の成績評価の根幹

をなしていたのが大手合いであり、そこでのルールが、囲碁ルールの

全国標準として万人が認めるものであったのも厳然たる事実であ

った。

梶原は、タイトル戦そのものに特段の規定がない事項については、大手合いルールに従うべきではないかといっている。

だが、主催者や、立会人にしてみれば、まだそんなことを議論する状況ではないと考えていた。白竜位を探し出すことが、すべてに優先されなければならぬことであった。

「白竜位戦を、スキヤンダルにさらしてはならない」

「まずは、探し出すことだ」

奥花町役場建設課長の立花光太郎は、災害対応に追われていた。

一週間前、この地域に三日間連続で降り続いた豪雨は、町道のあちこちに甚大な被害をもたらしていた。道路だけでなく、農地や農業用施設の被害も少なくないことが、これまでの断片的な報告から明らかになりはじめていた。いま、それらのすべてを洗い出し、詳細をまとめているところだった。

被災箇所の整理が出来たら、個々の状況に応じた復旧計画を立て、復旧工事の設計を業者委託に出す。その上で、見積もられた個別の被害の程度に応じて、国庫補助対象となるものとならないものにと仕分けをしなければならない。

箇所ごとに、あるいは一定区間の工事箇所をまとめて入札をして、業者が決まったら、次には工事の施工管理が待っている。完成したら、それが補助事業であれば関係機関の完成検査を受けて……。

それらはすべて、元々割り当てられている通常の仕事の上に、さらに別枠業務として乗っかかってくる。考えただけで、気が重くなつた。

「ちよつと、現場を見まわってくる。夕方までには戻るつもりじやから」

「課長、またうまいことゆうて。仕事にかこつけて、白竜位戦を覗いてこようという魂胆が見え見えですが」

筆頭主事の秋友京一がジョークを飛ばした。立花がなかなかの打ち手で、地元新聞主催の囲碁大会に、時々出場しているのを知っているのだ。

「馬鹿、それくらいは大目に見てもらわんと、こんな蛸部屋みたいな仕事、やつとれるか」

白竜位戦など覗く気もないのに、立花も軽妙に受けて陽気な笑顔を返した。

「しかし、まいったなあ」

立花は、先ほどの黒畑町長の依頼を思い出していた。町議会の某有力議員個人の農地を、国庫補助対象の災害復旧工事としてやれないかという話だ。町道関連というと傾斜地の途中を横切るように町

道が走っている場合は、道路から見て山側の修復工事費用は、基本的に、山側の土地の持ち主が負担する。それがこの町の基本的なルールだ。道路から見て谷側の修復費用は、道路管理者の負担だ。基本的にはそういうことだが、現実の社会はそんなにシンプルではない。境界線がどこに引かれているかで話は変わってくる。山側の斜面部分が明らかに町有地で、境界が、ある程度その先に食い込んでいけば、その回収費用を個人に負担させようとしても、到底それは理解の得られない話だからだ。

問題の有力議員の農地は、町道から見て山側にある。つまり個人が擁壁工事を行うべきものだが、境界がどう走っているかなどで、実際には折々に異なる対応が取られてきた経緯もあった。うかつに断れば、あのケースがよくて、どうしてこのケースがダメなんだと追求される。その質問に胸を張って答えられるほど、公明正大には運用されてきていないのが現実でもあった。加えて、農地には、一般的な宅地とは異なり複雑な助成制度もある。注意深く法律の海に潜れば、そこには怪奇な救済の洞窟がポツカリと口をあけている。「何とか頼むよ」

「でも、国の補助を申請すると。箇所の審査がありますよ」  
国の担当者が、現地の実地調査に入る。いくら説明しても、見解の相違だと伝家の宝刀を抜かれたら取り付く島がなくなる。

「そんなことはわかっるとる」

「やれといわれたらやりませう。ただ、申請するだけなら出来ませうが、実地調査で落とされますよ」

「だからこそ、君にこうして頭を下げて頼んでるんじゃないか」

そこから先はおまえが知恵を出せとっている。

町長によると、その有力議員本人が直接頼んできたのではなくて、どうも、古谷野が持ち込んだ話のようだった。災害復旧工事の制度の説明はしたが、例によって強引で、断りきれなかったらしい。

「町の単独工事でないなら、何とかなるんですけどねえ」

「国の補助災の認定を受けるためには、一定規模以上の「大きな被災箇所であること」という制限だ。箇所の実地調査もある。それだけ厳しいが、認められると、工事費に補助金が入る。補助裏と違って、工事費から補助金を差し引いた残りは、ほとんどを地方債という長期借入金で充てる。つまり形式的には借金するわけだが、その借金の毎年の償還金についても国の手厚い配慮がある。簡単にいうと、ほぼ町の持ち出しなしで復旧工事が出来る制度になっており、貧乏な自治体にとっては魅力的な話なのだ。」

「単町でやるくらいなら、こうして君に頼んだりしない」

町の単独工事でやると、地方債という借金の制度は使えるものの、借金だから、いずれは返さねばならない。全額を一般財源でまかな

わねばならないのでは困るのだ。貧乏な町に、そんな金はなかった。「そうですか。わかりました」  
小さく会釈して引き下がったが、立花には気の重い宿題ではあった。

大学の研究室で、御茶ノ水陽介は、呆然と立ち尽くしていた。デスクの正面に誇らしげに立たせていた新型ロボットのレプリカが、消えていたのだ。プロトタイプは、身長二メートルの二足歩行型。縮尺十分の一のレプリカは、きっちり二十センチの高さの精巧なものであった。思い違いなどではない。何者かによって持ち去られたのは明らかだった。

ドアは、指紋認証にくわえてICカードも必要なタイプ。それでも、セキュリティは破られてしまう。信用できるものなどないと思わねばならなかった。

「なくなったら、また作ればいいけど」

無理に呟いてはみたが、そういう問題ではないことを誰よりもよく知っているのが陽介でもあった。

「寒い国からもぐり込んで来てる連中の作業かな……」

核兵器に応用されれば、画期的な効果が期待できる電子制御技術。それが、彼の二足歩行型ロボットの中に組み込まれていた。本来の目的ではなく、結果として核兵器への応用も可能な高度な制御技術が生み出された。偶然がもたらした副産物だったが、ゴジラのような副産物。寒い国だけでなく、東西ヨーロッパ列強が彼の技術に注目し、それぞれの手法で御茶ノ水の研究室に接触を試みようとしていた。

都市の雑踏の中にある高層ビルの大学だ。研究室は、その最上階にある。

御茶ノ水は、窓辺に近づいて、はるか足元を行き交う車列に視線を投げる。まだ薄暮ともいえないが、すでにヘッドライトを点灯している車もあった。

「もう、何もこの研究室には置けないな」

思い直したようにデスクに座ると、ノートパソコンのデータをUSBメモリに写し取った。そのあと、USBを引き抜くと、今度はPC初期化用CDをスロットに挿し、瞬時に起動させた。内部のハードディスクドライブに、隙間なくびっしりと1と2の数字を書き込むソフトだ。パソコン内のすべてのプログラムもデータも、これで完全に上書きされて、跡形もなく削除できる。

ノートパソコンが独自に退屈な作業を続けている間、数種類のペーパーをバタバタとデスクに放り出していたが、その作業が一段落

すると、今度はそれらをシュレッダーにかけはじめた。作業は延々と続いた。

「すいませーん、中華の蓬萊軒でーす。ラーメンのどんぶりを取りにあげりました」

突然、ドアの向こうで声がした。

「なに？ 最近出前は頼んでなかったと思うけどな。いつの？」

はじめて聞く声だったことも、気になった理由のひとつだ。

「あれ、そうですか。取りに行けっつていわれてきたんだけど、おかしいなあ」

訪問者は、そういうながらもしきりにドアのノブをガチャガチャやっている。

御茶ノ水の顔がこわばった。

パソコンの画面は、八割がた作業が進んだことを示していた。シュレッダーには、自動給紙のトレイを装着した。

もはや、猶予はなかった。

「あ、わかった、あれかな。ちよつと待っててくれますか？ すぐ出しますから。わざわざ申し訳ないです」

ゆっくりとした語調で、間延びした感じでそういう放つと、足早に窓際の別のドアに急いだ。

「あれ、ここだと思っただけど、ないなあ。じゃ、あっちかな」

足音を消し小走りに向かった先には、隣の研究室に抜ける仕掛けがあるのだった。

隠しドアを抜け隣室に移る。手早く白衣を脱いで廊下に出ると、作業服姿の二人連れが御茶ノ水研究室のドアノブを壊さんばかりに揺さぶっているところだった。もちろん、岡持ちなどはどこにも見当たらない。

「仕方ないな。出来るところまでは、僕は、やった」

廊下の角を回ったら、あとはエレベーターまで一気に走り、そそくさとビルからおさらばした。

沖合いに停滞している前線の影響で、風の強い日だった。街路樹が激しく揺れ、電線が笛のように鳴っている。

サイレンの絶叫が夕暮れを切り裂いて、白バイが走り過ぎていった。

「セキュリティをいくら強化したって、これじゃ意味がないよ」  
気だるい徒労感が、つい愚痴をいわせた。

「それに、生体認証システムにしたところで、絶対じゃない。その気になったらいつか破られるんだもんな。終わりのないいたちごっこに時間をかけるなんてばかばかしい限りだよ。まして今日みたいに、アナログな方法で暴力的に來られたら、ボディーガードでも雇わないとどうしようもない。ボディーガードを雇ったって、相手は



当然それに対応してくるよな。極論すれば、最後の最後は、自分を守るのに軍隊が必要という話になる。笑い話じゃなくて、それが現実なんだから。僕も、現実的な対応を考えないとダメだな」

小さく呟きながら、考えをまとめようとしている。

「さて、今夜はどこで寝るかな」

両手をズボンのポケットに突っ込み、肩をすぼめて、黙々と雑踏に紛れ姿を消した。

棟方隆三は、落ち着かない気分出版社の会議室にいた。友人の小説家、芥川遼が書いた大人向け絵本の、挿絵の打ち合わせだ。大人の絵本といっても、艶っぽい本ではない。大人たちが少年時代に置き去りにしてきた冒険心とか正義感とか、生きるために現実社会と妥協しながら、いつの間にか失い、あるいは色褪せさせてしまった、そんな精神世界へのノスタルジーのようなものを、絵本で表現しようとしている。

「売れませんよ」

若い編集者は、にべもない。

「いや、団塊ジュニアの世代は、買います。心ある団塊ジュニアたちは、みんなそれぞれの人生のなかで後悔を飼いながら生きてきます。わしも芥川も、彼らと心情的に重なるものが多いんですじゃ。彼らが生きるために犠牲にしてきたもの、人間らしい臭いのする部分というもの。いま彼らが静かに過去を振り返ろうとしたとき、この、なんというか、これまで不本意にも目をつむって切り捨ててきた部分に、少なからず悔いる気持ちがあるはずなんです。忘れてきたり、捨ててきたり、そうしたものをわしらは拾い集めて、整理して、彼らの前に少しだけ突きつけてみようと思つとる。凍り付いてしようとする気持ち、少しだけ温め、くすぐってやりたい。買いますよ、買いますとも」

棟方は力説した。

自分にとつても芥川にとつても、これは勝負だという気持ちがある。

「大人用の絵本ということですが、いつてみれば詩集ですよね。あ、失礼。我々がいうところの、詩画集ですかね」

いくら内容が上質でも、そうは部数が出ないジャンルだということを知っている。

「まあいいんです。もう上が決定したこと。出版させていただきますから」

編集者の言い方には棘があった。

実は、背後で、二人の知らない力が動いていたのだ。そんなこと

など、棟方は知るよしもない。

「じゃ、芥川さんの文章グラはこれですから。これにあわせて、絵をお願いします」

そういって、必要な資料をテーブルに重ねて置いた。そのぞんざいな置き方も、棟方には気に入らない。

「おたくが見たこともないような絵を描かせてもらいますよ。期待しとってください」

若い編集者の気のない態度に反発して、自分でも思ってもいかなかった言葉が飛び出していた。

「少なくとも、心ある男たちには共感されるはずですよ」

正対して、背筋を伸ばし、目を見つめた。

このとき、まだ具体的なアイデアがあるわけではなかった。アイデアはなかったが、気持ち伝えたかった。

そんな棟方の気迫に動揺したのか、編集者も、つい言葉遣いをあらためて、

「あ、いや、失礼しました。棟方さんの作品を拝見もしてないのに、無礼なことをいってしまつて。そうですね、楽しみにしてますよ。

頑張ってください」

最後は立ち上がって握手を求めてきたが、だからといって心を入れ替えたわけではなさそうだった。

自分の不用意な発言に気づいただけだ。どう考えても売れそうもない企画なのに、なぜか会社の上層部が発行に向けて動いている。目の前にいる貧相な男は、そういう意味で侮れないと思つたのだ。

無難に対応しておくに越したことはないという、クレバーな判断からだった。こういう器用さは、腹立たしいほど見事に備わっているようだ。

「わかってもらえましたか。ありがとうございます」

朴訥な棟方は、額面どおりに受け取り、感激を満面に表している。

「いい作品にしますよ」

手を強く握り返しながら見つめるまなざしに、中年男の純情が青臭く匂い立った。

(二)

「白竜位戦、大変なことになってるようだけど」

話題を振つたのは、脇坂圭子女史だ。

瀬戸内県知事室副参事というのが、彼女の肩書きだった。

ここは、土曜日昼下がりの碁会所、「ドラゴン」。

並べられた碁盤の七割ほどが客で埋まっている。最も奥まったコーナーにはマネージャー役の老婆が陣取っていて、横には缶コーヒ

一の自販機が数台並んでいる。

「せっかく誘致したのに、このまま兵江白竜位が不戦敗になったら、地元としても捕らぬ狸の皮算用だと騒いでるわよ」

地元としては、白竜位戦と絡んで様々な経済効果を狙っているのだろう。

「そうらしいな」

「あら、どうしたの。ずいぶん冷淡だわね。白竜位とはお友達なんでしょ」

「どうか。古い麻雀仲間だけだな」

気のない返事をしたのは、ドラゴンの席亭、猿渡慎之輔だ。雀荘だったこの店を、猿渡が買い叩いて碁会所に模様替えをした。不定期にだが白竜位が訪れることもあるというので評判を呼び、最近人気上昇中の店だ。

兵江謙作白竜位は、瀬戸内県の副県都とも呼ばれる福川市が地元で、関西棋院に所属している。関西棋院だから大阪が主戦場だが、最近は東京に出ることも多く、ここ福川の碁会所ドラゴンに立ち寄る回数はめっきり少なくなっていた。故郷はどんどん遠くなっていく。

「この碁会所が繁盛してるのだから、兵江白竜位のおかげなんですよに」

「別に、こつちから頼んだ訳じゃないさ。それに、麻雀仲間だった昔ならともかく、奴はもう、碁打ちとしては超一流の仲間入り。ここにもそうは顔を出せなくなってる。兵江のホームグラウンドだといううわさが、勝手に一人歩きしてるだけさ」

ニヒルに応じた彼も、実は元は脇坂女史と同じ瀬戸内県庁マン。自分からは、賭け麻雀が原因で首になったと嘯いている。

「なんで、また県を辞めたんだよ」

夜の街でたまたま顔見知りに出会ったりすると、決まってそう尋ねられるから、

「徹夜麻雀が続いてね。はじめのうちは、風邪だなんだと断りの電話を賭場から入れていたんだが、そのうちに、休むための適当な口実も底をついてね」

それが、夜の街で出会った知人に対する、常用の、軽いあいさつ代わりの言葉になっていた。

口実に使われた徹夜麻雀というのは、場所は、遠く離れた東京だった。東京の雀荘で何日も続けて徹夜麻雀を打ち、その雀荘から、偽りの理由を添えて休暇の電話を入れ続けていたというのだ。五人打ちで、抜け番がわずかな仮眠をとっては再び雀卓に戻る。これの繰り返しだった。当時の対戦相手というのは、学生時代からの古い知り合い。芽の出ない若きプロ棋士兵江謙作をはじめ、駆け出しの

小説家や画家。あと、ロボット研究で有名な、私立安登母<sup>あと</sup>大学工学部の准教授。この研究者の専門は電子制御の分野だが、核弾頭ミサイルの誘導に画期的な精度をもたらす技術として、実は世界から注目されている。とりわけ熱心なのは北半球の寒い国とやらで、具体的な国名は明かさないが、どうも破格の条件で誘われているらしい。共通しているのは、みんな才能には恵まれているが、頑固で、世渡り下手で、貧乏な無頼派という点。根無し草が、風で道端に吹き寄せられるように、自然に集まったメンバーだった。みんな若く、まぶしいほどにキラキラしていて、とにかく青臭かった。

兵江白竜位も、そんな中の一人だったのだ。

「あなたの徹夜麻雀の話は伝説化してるけど、県庁を辞めた本当の理由は、人事に対する不満だったんでしょ？ 私のまわりは、みんなそういつてるわよ」

黒縁メガネのレンズの奥から、女史が鋭い言葉を突き付けてくる。「そんなことはない。しかしまあ、どう思われていようと、いままら俺には関係ないことだよ」

笑って、それ以上は答えない。

「それにしても、ドラゴンなんて、碁会所に似合わない名前ね」「前が雀荘だったからな。店の名前も電話番号も、前の店のものをそのまま使っている」

ついでにいえば、フロアマネージャー役の老婆も雀荘の時代からの古参で、看板と一緒に引き取ったものだった。

名前を綾<sup>あや</sup>小路<sup>こうじ</sup>富子<sup>とみこ</sup>とあって、ドラゴンでは、雀荘時代同様にまるで牢名主のような威厳を持って君臨している。猿渡は「綾さん」と呼ぶことが常だが、彼以外が気安く「綾さん」と呼ぶと、彼女は必ず「綾小路です」と返してくる。

「あら、白竜位と親しいから、ちやつかりドラゴンにしたわけじゃないのね」

「そこまで商売っ気はないさ」

さわやかににはかんで、白い歯を見せたときだった。

「やあ、いたいた」

奇妙な風体の三人組が、不<sup>ぶ</sup>躰<sup>しつ</sup>に碁会所を覗き込んでいる。

「なんだ、やっと来たか」

猿渡は、ゆっくりと入り口に向かい、

「お疲れさま。まずはこちらに」

オーバーな仕草で、旧友たちを招き入れた。

「紹介するよ、こちら、県庁知事室副参事、脇坂圭子女史だ」

猿渡の言葉に、

「どうも」

「はじめまして」

「やあ、よろしく」

遠来の三人にも椅子を勧め、

「まずこっちは、未来の文豪、芥川遼」

「芥川です」

「いまはまだ、駆け出しの小説家で詩人だ。原稿料が安いから、最近詩をアレンジしたような絵本も書いてるらしい」

「絵本を計画するのは事実ですが、私が絵を描いてるわけじゃないし、原稿料が安いこととも関係ないんです。原稿料が安いのは事実なんです」

一応、芥川が訂正する。

「次に、こいつは売れない画家、棟方隆三」

「棟方ですじゃ」

「こいつの場合は芥川と逆で、単価が高いから、注文が来ない」

「わたし、知ってるわ。棟方さんの作品、先月の新鋭画報で話題になってましたよね」

「わ、観ちゃってくれましたか。うれしいなあ」

「専門家は話題に取り上げ、評価が上がれば作品の単価は上がるが、でも、一般受けしない作風だから、売れない」

猿渡が、冷酷にダメを押しした。

悲しい顔の棟方に、脇坂女史が援軍を送る。

「あら、将来の価格上昇を見越して、投資目的で買おうという人たちだっけ出てくるかもしれないよ」

励ましているような、そうでもないような微妙な話に、棟方は複雑な顔で黄ばんだ歯を覗かせた。

「おまえ、それじゃフオローになってないだろう。ヤツのあの顔を見てみる」

芸術家は、ただ売ればうれいわけではない。作品に惚れて買ってもらうのでなければ自尊心が傷つくという、まことに厄介な人種なのであった。

「あら、失礼。そういう意味じゃないの。だって、ほら、わたし、棟方さんの作品、好きだし」

自分でも気づいて、うろたえている。

「ひとりだけまともなのが、安登母<sup>あとうも</sup>工学部の准教授、御茶ノ水陽介先生。ロボット研究の分野では知る人ぞ知る、ちよっとした有名な人だ」

「御茶ノ水です」

ペコリと会釈して、

「有名じゃないですよ。しがない私立大学の研究室の片隅で、ゴキブリのように這いずり回ってる貧乏学者です」

「真に受けるんじゃないぞ。超高層ビルの最上階に研究室を構えて、

飛ぶ鳥を落とす勢いの、世界が目撃している俊英なんだからな」

「あの研究室は引き払ったんです。いまは宿無し」

「なんだ、そりゃ大変だ」

「あら、そうなの。でも、ロボットが専門なんて素敵」

「それも、今をときめく二足歩行型のロボット工学だそうだよ」

「わ、時代の最先端ですわね」

目を輝かした女史の気持ちに、猿渡が水を差すように、

「ところが、研究内容は最先端でも、人間の中身ときたら、明治・大正・昭和と続いた我が国の伝統を忠実に受け継いだ、義理と人情の旧式人間。だもんで、世渡りという二足歩行すら上手にこなせない困り者なんだ。そうだよな」

齒に衣着せぬ紹介だ。

「州庁を飛び出した君から、世渡り下手といわれたくはないな。ま、当たってるには当たってるけど」

プロフィールとしては悪くないと、いささか苦笑いしている。

「一見するとみなさん、タイプはそれぞれ全然違うようだけど、でもさ、なんだか、似た者同士が集まったって感じね」

鋭く区切りの言葉を吐いて、脇坂女史は立ち上がり、珈琲を煎れに向かった。老婆はと見ると、席亭に來客とわかっていても微動だにしない。

小さな対局机を囲んで、男四人が雁首を寄せ合う形になった。

「それで、どうなんですか。兵江さんの消息は」

御茶ノ水が声をひそめた。

「まだわからん」

猿渡も冴えない顔だ。

「自分の身は、自分で守るのが基本でしょうに、兵江さんもぬかりましたね」

「おい、それはどういう意味だ」

事件に巻き込まれたことを前提の話し振りだ。

「だって、白竜位の防衛戦でしょう。自由を奪われてなければ、出てきますよ」

「それはそうだが」

「それとも、もっと大きな危険があつて、自分から身を隠しているということも考えられなくありませんが」

「それなら、俺らに連絡くらいはありそうなものだよな」

「そう思います」

「やはり、アトムのは、診立てどおり、なにか事件に巻き込まれたか」

アトムというのは、御茶ノ水陽介の麻雀仲間時代以来のあだ名だ。ちなみに、芥川遼は、文豪。棟方隆三は、昔は、同じ棟方だけに棟方志巧の「わだばゴッホになる」という言葉からゴッホと呼ばれ

ていたが、作品には棟方志巧のような豪放さはなく、どちらかというところ細かい仕事に観るべきものが多い真面目な作風のため、最近では画伯と呼ばれることが多くなっている。

「普通に考えれば、事件でしょう。ただ、電話も何もない場所に、事情があつて潜んでいるということも、可能性としてはあります」  
「そうだな」

猿渡は素直に応じてはみたが、心の中では、そんな事情や場所がどこにある、と思つていた。事態は、御茶ノ水の分析してみせたとおりだと思ふ。何者かによつて、どうにかされている可能性が高い。

「ねえ、動機はどうなの」  
珈琲をお盆にのせて、いつの間にか、脇坂圭子が戻つてきていた。  
「動機……ですか」

御茶ノ水が、胸の前で腕を組んだ。

猿渡は、左手であごを撫でながら、  
「白竜位戦だけで見たら、得をするのは重戦車、梶原三郎九段だけだが、タイトルを取るために犯罪に手を染めた棋士なんて、聞いたことがないぞ」

「それに、少なくともルール上は、不戦敗と決まっているわけでは  
ありません。動機になりませんね。梶原九段犯人説は、ボツです」  
御茶ノ水が即座に否定した。

「思うんじゃが……」

棟方が、ぼつりと口を開いた。

「白竜位戦というのは、前夜祭があつて、地元の名士もたくさん招待されるんじゃないが、それでも、ここは東京とは違うぞ」

みんな、棟方が何をいおうとしているかが理解できない。わからないからこそ、じつと次の言葉を待っている。

「大体、みんな顔見知りじゃないのかということじゃよ」

「どうやら少しずつ、この朴<sup>ぼく</sup>訥<sup>とつ</sup>な男のいおうとしていことがわかつてきた。

「完全なよそ者がうろろしていたら、誰かが気づいてるはずだというわけだな」

猿渡がうなずきながら呟く。

「関係者の中の、誰か……ですか」

「ですが」

いままで黙っていた芥川が口を開いた。

「地元の人たちは、記者や棋院関係者の顔までは詳しくないでしょう。棋院関係者や記者のみなさんは、地元の人の顔はわからない」

「そうかあ……」

棟方が残念そうな顔をした。

「それはそうだけど、その両方がわかる人だっていないわけじゃな

いわよ」

脇坂女史の言葉に、みんなは眼を見張った。

「ほら、そこにいる人」

小気味よさそうに、猿渡の方をあごでしゃくった。

「おお、そうか」

男たちが色めき立ったが、

「はは。残念だが、俺は前夜祭には招待されていない」

悔しそうに、ボクシングのパンチを出す仕草をしながらいった。

「だが、地元の人たちの顔がわかる関係者というのはいないだろうが、確かに、地元の出席者の中には、棋院関係者や囲碁記者くらい知ってるファンはいたかもしれないな」

「そうじゃな、うん、うん」

画伯は、うれしそうに何回もうなずいていた。

「事前の打ち合わせはこれくらいで切り上げて、そろそろ行くか」

御茶ノ水に視線をふって、芥川が促した。

「行くって、みなさんどちらかへお出かけなの」

「ああ。この三人は、文豪と画伯は暇だが、アトム先生はご多忙なんでね」

時間を無駄に出来ないから、さっそく、白竜位が姿を消した現場、風天閣に出かけるといふ。

「そうか。あ、でも、あとひとり、誰よりもお暇な方がおられますわよね」

笑顔で猿渡を見つめた。

席亭が渋い顔で聞き流すと、横から御茶ノ水が、

「僕が多忙だからというわけでもないんですよ。だけど、一応、この土日にということで計画して来ているものですから。出来る限りの予定はこなしたいと思ひまして」

風天閣で女将や従業員から話を聞いて、今夜はそこに泊まることにしているのだと、話を引き継いだ。

「わたしもついていこうかな。かまわないでしょ」

「俺はいいが：」

「僕らもかまいません。むしろ、心強いくらいです。よろしくお願ひします」

雇い主が客を伴って店を出ていく際にも、綾小路女史は、それが地顔なのか、どう見ても不機嫌そうな面構えのまま微動だにしない。

「わあ、これは見事じゃ」

風天閣に到着すると、棟方が大きな声を上げた。

玄関を入ると広がる、鏡のような床面に圧倒されたようだ。



「おい、あれはなんだ」

見ると、ひとりの男が女将に激しく食い下がっていた。

「鷲尾さん、お願いだ。あの記者の身元を教えてもらわないと困るんです」

女将はうんざりとした顔で、

「だから、そういうことは申し上げられないんです。立花課長さんだって、そんなことご存知のはずでしょう」

「わかっている。わかっているが、今回だけは特別なんだ。あの記者が、どこの社の何という人なのか」

自分は、アマチュアだが熱狂的な碁打ちだ。新聞各紙の観戦記者の顔は、見ればわかる。なのに、白竜位戦の前夜祭で、ひとりだけ知らない顔があった。いまは理由はいえないが、その人間の情報が欲しいといっている。

すかさず御茶ノ水が近付いていった。

「今夜お世話になる、御茶ノ水と芥川、棟方です」

「あら、ようこそいらっしやいました」

女将が係りの者呼んで指示をしている間に、猿渡が男に何やら耳打ちをした。男は一瞬全身をこわばらせたが、すぐに納得した顔になり、小さく会釈をしてその場を去っていった。

「あ、女将さん、兵江白竜位が泊まられた部屋ということでお願いしたはずですが、間違いありませんか」

御茶ノ水が確認する。

「はい、そのように手配してございますから。担当さん、こちらご案内、お願いね」

案内されたのは、廊下の先の突き当りの部屋だ。室内を横切るように窓に向かい、内障子を開けると、苔むした無骨な自然石がいくつも配置された石庭。背後には、不自然に枝を曲げられた松の老木が見える。

「あ、お姉さん、これ」

さりげなく心づけを渡すと、

「旅館も、いまはもう、こういうものは受け取らないんですよ」

そういう時代なんだと微笑んでみせた。

「わかっているんだ。いいから、気にしないで取っておいて」

強引に押し付けると、

「ここは宿帳はどうしてる？」

「はい、カードですけど」

ホテルと同じような、宿泊者カードを出してみせた。

「それだけ？ 宿帳があるよね」

猿渡の追及に、ちよっと困った顔をしたが、

「有名人の方がお泊りになったときは、宣伝の意味もあるからと女

将さんがおっしゃって、昔ながらの宿帳にご記入をお願いしていませんが」

「そうだろ。実はね、こちらの御茶ノ水先生は、お若いけど、ロボットの工学の世界的権威なんだ。無理にとはいわないが、記帳してもらっておくと、女将さんも喜ばれると思うけどなあ」

意味ありげな笑顔で水を向けると、

「わかりました。そういうことでしたら、少々お待ちを」

すぐさま取って返し、高級和紙が分厚く綴じられた、芳名帳スタイルの宿帳と筆ペンを持ってきた。

「ありがとうございます。夕飯までには書いてくよ」

「よろしくお願いします。女将が、名前だけでなく……」

「わかっている、わかっている」

どうやら女将の了解を取って持ってきたらしい。それなら気が楽だ。もっと堂々としていればいい。

「課長さん、もういいよ」

声をかけると、ふすまの向こう側から立花が顔を出した。

「申し訳ありません」

「いやいや、気にすることはないよ。それより、課長さんは、前夜祭に出席しておられたんだって？」

「はい。町長の代理で」

「ほう、そりゃ凄い」

「いえいえ、代理は普通なら助役が務めるんですが、助役はいにく囲碁は門外漢で、少し打つ私にお鉢が回ってきまして」

「よかったじゃないですか。望むところだったでしょう」

「ええ、それは、まあ」

「相当打たれますか」

「いえ、そんな」

「アマの棋戦には？」

「はい、若いころは何回か。当時は、生意気に県代表を目指してたんですが、一度だけベストエイトに残って、それが最高です」

「凄い。なんだ、強豪じゃないですか」

「いえいえ、弱くて」

「そんなことはないですよ。じゃ、ドラゴンにも……」

「はい。奥花町から福川市までは少し離れていますし、雀荘だったころは用事がありませんでしたが、それでも碁会所になってからは何回かお邪魔したことがあります」

「そうでしたか。いやいや、今度来られたときには声をかけてくださいよ。ぜひ一度教えてもらわないと」

「そんな、猿渡さんの名声はよく存じ上げておりますから。昔は県代表にもなられましたよね。こちらこそ教えていただかないと」

「あら、猿渡さん、県代表になったことがおありでしたの」  
脇坂女史が感心した。

「一回だけな。まぐれだよ、まぐれ」  
まんざらでもない顔をした。

そのとき、猿渡の無意味なおしやべりはもうこれ以上は我慢できないと、御茶ノ水が強引に割って入った。

「はい、どうぞ。お願いします」

ドンと、届けられた宿帳を中央に置いて、  
「囲碁界の大冠、白竜位戦です。すべての関係者の署名があると思  
います」

この中から、立花が知らない名前を探し出せばいいと、作業をう  
ながした。

「おいおい、なんだかそれじゃ、俺が無駄口をたたいてたみたい  
な進行だな」

不愉快そうに口を尖らせたが、  
「ありがとうございます」

立花は、素直に宿帳にむしやぶりついた。

最初のうちは勢いよく、そのうちに、ページをめくる指の運びが  
ゆっくりになった。

「ありましたか」

「いえ、まだ」

最後までめくって、また最初から再び調べなおしてゆく。途中で、  
二カ所ほど指が止まった。

「どうですか」

「あ、はい」

複雑な表情になって、三回目に入った。この三回目が、最も時間  
がかかった。時間をかけて、ゆっくりと紙をめくって行って、最後  
に、弱弱しく帳簿を閉じた。

「わかりません」

ぼつりといった。

「わからないって、どういうこと？」

「全員、知ってる人たちばかりだったってこと？」

「知らない人が複数いて決まらないんですか」

口々に問いたしたが、立花は答えない。

「ありがとうございます」

みんなに頭を下げ、腰を上げた。

「え？」

「ちょっと、ちょっと待ってよ」

「みなさんには感謝してます」

「馬鹿、そういうことじゃないでしょ」

「じゃ、すみません」

あっけに取られている面々を残して、さっさと姿を消してしまっ  
た。

「どういうこと」

「間抜け面だけが、ここに雁首をそろえて並んでるってことだよ」  
まさに、放心状態で取り残されたといっつていい。

「三回目のときは、あの人の心は、少なくとも宿帳には向いてな  
かったげに、わしには見えただぞ。うん、何かを考え込んでおる顔だっ  
たぞ」

棟方が断言した。

「僕もそう思いました。二回だけ、手が止まりましたよね。どちら  
かが本命で、どちらかがカムフラージュのためでしょうか」

御茶ノ水も同調した。

「県代表にもなられたらしい、われらが本因坊殿に、そのページを  
見てもらったら、何かヒントがつかめるかもしれないわね」

女史の意見にみんながうなずくと、

「最初が、このページです」

間髪を入れず、芥川が開いてみせた。

凝視する猿渡。

「……」

「どうなんだ」

「文豪、二回目に止まったページは」

「ここだ」

葉がわりにメモを挟んでいた箇所を、すぐさま開いた。

「どうだ」

全員が、息を詰めていた。

「多分……」

「わかったのか」

「ああ」

ふうっと、息を吐いて、

「ほとんどが新聞の囲碁担当記者で、俺でもわかる人間ばかりだ。  
あとは、棋院が発行している月刊誌の関係。そうして消去してい  
くと、これ」

そういった猿渡の指の先には、〃近●●●●社 山県士郎〃とあつ  
た。筆文字で、達筆に崩されていて、●●●●の部分を読み取れない。

「囲碁と関係ない週刊誌や月刊誌でも、コーナーとして囲碁や将棋  
を扱っている。そういうのにまで範囲を広げたら、記者の数は無限  
だ」

お手上げだというポーズをとった。

「いや、山県なら知ってる」

深刻な顔のまま、御茶ノ水が打ち明けた。

「彼には僕も迷惑しているんです。蛇蝸だかつのような男です」

近代科学という月刊誌の記者だという。

「蛇蝸とは穏やかじゃないなあ」

「近代科学という月刊誌自体、怪しい本なんです。月刊誌ということにはなっているけど、毎月発行してるわけでもなく、合併号の連続で。研究者の日常取材という名目でやってきては、強引に、プログラムそのものを出させようとしたり……」

記者というのは表向きの顔で、裏では相当に際どい仕事もやっているらしいという。

「そんなに売れるとは思えない怪しい月刊誌を発行する資金や、彼らの活動費が、どこから出ているのかはつきりしないんだけど、一連の動きを見ていると、どうも寒い国がバックにいるように思えるんです」

「あの課長さん、わかったのかしら」

「だろうな。わからなかったら、あんなにあわてては帰らないさ」

「そうだわね」

「どうする気じやろう。わしゃ、心配になつてきたぞ」

「心配だな」

「しかし、その山県某と、どういう関係なのかな」

「うむ。早めに機会を作つて、俺が聞きただしてみるさ」

「わかった。じゃ、そっちの方向は猿渡に任せるとして、僕たちもそいつにさっさと記帳して、さっきのお姉さんと呼んで渡しませんか」

「おう、そのついでに、白竜位戦のドタバタの様子も聞くわけだな」

「そうです。そのために来たんですから」

「まもなく呼ばれてきたお姉さんに、」

「宿帳、書いておきました」

「ありがとうございます。女将も喜びます」

お義理の礼を述べるお姉さんに、

「ねえねえ、白竜位戦の前夜祭の夜、兵江さんは、誰かと外に出かけませんでしたか」

「お出かけになりましたよ。一時間くらいして、お戻りになりましたけど」

「出かけた？ 誰と？」

「ちよっと散歩だとおっしゃって。玄関でわたし、お見送りしましたから。一緒だった方のお名前までは存じませんが」

「眉毛の濃い、あご髭のある男でしたか」

「たまらず御茶ノ水が口を挟む。」

「あら、こちら、よくご存知で」

「それが山県か」

「うん」

「お姉さん、それで、朝、白竜位の姿が見えないとわかって、すぐに警察は呼んだの？」

「いえ。古谷野先生は呼ぶようにおっしゃいましたが、女将さんが止めて」

「止めた？」

「はい。まだその時点では、事件かどうかもわからないからということ」

「なるほど、冷静だな」

「うむ、冷静といえば冷静だが、何か引つかかるなあ」

「あの、私、仕事がありますから」

「あ、いやごめんよ。悪いが、もう少し聞かせてくれないかな」

腰を浮かしかけたお姉さんを無理に引き止め、

「お客が酔って喧嘩をするとか、大浴場の脱衣場で財布がなくなるとかあると思うけど、そういう時はどうしてるの」

「そんなこと、滅多にございませんけど。それに、喧嘩されたくらいでは……。女将さんが、穩便にとりなしますから。でもお金がなくなったりしたときは、金額にもよりますが、警察を呼ぶことになりますわね」

「そうか。そうだよな」

それから、当夜の白竜位の様子や周辺の関係者の動きについて断片的に話を聞いてはみたが、もうそれ以上は特段興味を引くような成果は得られなかった。

あきらめてお姉さんを返すと、やがて夕食が運ばれてきた。

泊まるのは三人だが、食事は五人分用意してもらった。

「みなさん、遠くから大変でしたわね」

女史が遠来の客たちにビールを注ぐ。

「やあ、これはどうも」

「あ、うれしいなあ」

男たちが相好を崩した。

並んだ料理はありきたりの会席料理膳だったが、ママカリの浅い酢漬けは、オプシヨンの一皿で、猿渡が宿に特に依頼して出させたものだった。

ママカリとはサツパの異称で、おもに瀬戸内海沿岸や有明海沿岸を中心とした西日本で食用にされている。猿渡は、銀座で和食の店の板前をしている知人から「たまには築地にも出ることがあるけど、東京じゃ、ほとんど誰も買わないね」と聞いたことがある。

そのときは、だったらあんたが買えよ、と思ったものだ。安い魚

をさりげない一皿に仕立てて客を驚かせるのも料理人の心意気というものじゃないのかと。人間は、生き物の命をもらって生きている。サツパに報いるためにも、銀座の客たちに食べ方を教えてほしい気がした。

人によって評価が分かれる魚だった。同じ瀬戸内であっても、地域によって天と地ほどに。備後では、疑似餌針で大量に釣れることから、餌代がかからないという意味でモウカリとも呼ばれ、明らかにさげすまれているが、備前では、隣にご飯を借りに行くほど美味しい魚という意味でママカリと呼ばれている。

結論から言うと、要は料理の仕方であった。特長を生かし引き出してやれば、上品な一品に仕立て上げられる。魚自体に罪はなかった。薄い魚体だが、頭と腹を処理し軽く甘酢に浸けてやると、ほのかな旨みが口いっぱい広がる逸品である。

「じゃ、カンパイ」

「乾杯、友情に」

「友情だ？ そんなもの、くそくらえだ」

悪態をついたのは、意外にも芥川だった。

「僕は来たいから来ただけ。友情なんていう亡霊のようなものに縛られて、それでここまで来たわけじゃないんだ」

「なんだ、またこいつ。飲む前からもう酔っ払ったようなことを口走り始めたぞ」

「まあええ。友情だか、友情でないんだか、そんなことはようわからんぞ。わからんが、わしらの思いはひとつじゃ。そうじゃろう」

「画伯が、いま珍しくいいことをいった」

「珍しく？ わしはいつでも、ええことしかいわんぞ」

「そうです。まったくそのとおり」

てんでに勝手なことをいっている。

「お酒が入ると、みなさん、悪くなりそうね」

「怖気づかれましたか」

「まあそういうなよ。口は悪いが、はらわたはないんだから」

誰かが煽れば、誰かがとりなした。

「なんだ、このキャビアみたいでキャビアでない：」

「うん、わしも何かなと思うとった」

小皿を持ち上げて話題にした。

「それを聞いてくれるのを待ってたんだよ」

勝ち誇ったように猿渡が吠えて、

「畑のキャビア、トンブリというんだ」

「みなさん、初めてですか」

「知らなかった」

「食べたことがなかったです」

「これは珍しいものをいただきました」

それぞれが率直な感想を口にするのを、猿渡は上機嫌で聞いていた。聞きながら、白竜位のことを思っていた。

みんなが出会ったころ、兵江という男は、自分はプロとして通用するのだろうかという大きな不安の中にいた。本当は心配で、不安に押しつぶされそうだったと思うが、プライドだけは高くて、意識的に自信家を演じていたと思う。

だが、自分がやらねばならないことは何か、明確に理解している男でもあった。

超一流になるために、何が必要かということもわかっていた。そのためにも、猿渡たちのグループに身を投じ、無頼の生活を始めた。

四十九歳十一月という史上最年長記録で名人位を奪取した将棋の米長邦雄永世棋聖は、将棋指しは将棋だけ勉強していたのではダメだと看破していた。後輩たちにも、もつといろんな世界を経験して、人間としての幅を広げなさいとアドバイスしていたという。

米長の師匠は、将棋指しに学問は不要だと彼の高校進学に猛反対したが、米長は、将棋だけ勉強していたのでは強くなれない。だから先生は一流になれなかったんです。先生の命令を守っていたら、先生を超えることは出来ません。毅然とそう宣言して、あえて師匠に逆らって高校にも行った。

囲碁の故加藤正夫が、殺し屋加藤と異名を取り強豪として恐れられていたころ、彼が強いことは誰もが認めるところだったが、なぜか、あと一歩というところでなかなかタイトルが取れなかった。加藤は悩み、兄弟子の石田芳夫に教えを乞うた。自分に何が足りないのかと。そのとき石田は、「遊べ」とアドバイスしたという。加藤はまじめ人間で、囲碁以外には目をくれないタイプだったのだ。そんな加藤に、もつと遊べと助言した話は囲碁ファンの間では有名だ。それからの加藤は、遊んだ。まじめな加藤は、まじめなだけに、一心不乱に遊んだ。遊べとアドバイスした石田が心配になるほど、狂気のように遊んだという。

かくして、遊んだ効果があつたからかどうか、加藤は、次々とタイトルを獲得していくのである。

囲碁のビッグタイトル棋聖戦を例にとっても、創設から棋聖位を独占し続けた藤沢秀行は、「一年を四勝で過ごすよい男」と謳われた。棋聖位の防衛線は七回戦。四勝すれば、また巨額のタイトル料が転がり込むのだった。その秀行先生もまた、豪放磊落、酒びたりの破天荒な碁打ちとして名高く、無頼の好漢として知られていた。

兵江がどう考え、自らの在りようをどう整理したかは定かでないが、少なくとも結果的には、彼が猿渡たちと過ごした時間が、無形



の大きな精神的財産となっていて、可能性はあるだろう。

「兵江は大丈夫だ。そうだよな」

猿渡は、トンブリに夢中になっている棟方の背中を叩いた。

(三)

友人たちが東京に帰って数日後、猿渡は再び単独で奥花温泉に向かい、風天閣を訪れた。碁会所ドラゴンの怪老綾小路富子の言葉が気になって、どうしても確認しておかねばと思ったからだ。そもそも、彼女には特技があった。ドラゴンの常連客の車をすべて記憶しているのだ。プレートナンバーをいうと、それが誰の車であるか、持ち主の名前がすらすらと出てくる。仕事先や関係の深い電話番号も、頭の中に整理されている。碁会所の牢名主さまは、稀代の記憶マニアだった。

そんな老婆が、ある日、呟いたのだった。

「兵江さん、運命に導かれるように風天閣に来たわね」

ぽつりと、そういったのだ。

「綾さん、それ、どういう意味ですか」

気になって問いたしたが、

「綾小路です」

勝手な略称を、普段は猿渡に限っては聞き流していた。が、このときばかりは凜とした口調で訂正し、おもむろに解説を始めた。

「風天閣の女将さんは、古谷野先生から旅館の大將に口を利いてもらわれたんですよ」

「どういうこと？」

「彼女は、あそこの雇われ女将だということですよ」

「え、宿の娘じゃなかったのか」

「風天閣にお嬢さんはおられませんか」

「なるほど。それで誰か女将を捜していたところに、いい人がいるぞと口を利いたのが、古谷野先生というわけですか」

古谷野は、ああ見えて面倒見がいい。

並外れた強引な性格で、役人たちからは煙たがられているが、世話になり助けられた人間は少なくないのだ。だからこそ、きな臭いスキャンダルに巻き込まれても、いざ選挙となると強い。

「いろいろ事情がありましてね」

解説は、まだまだ続いた。

「女将は、帰化しているんです。ご存じ？」

「いや」

元々は日本人じゃないのだという。

「彼女、趙さんといいました。成人してから、日本国籍を取得され

たんです。幼いころから一家の面倒を見てくれていた鷺尾家の勧めで」

鷺尾のお屋敷の、元々は土蔵だった部分を改築して、そこに趙一家は住まわせてもらっていたという。

「一家といっても、病身のお母さんと彼女と弟さんの三人ですけど」

「鷺尾家というのは？」

「なんで、そこまで面倒を見てたのかと思って尋ねたら、

「資産家の地方棋士」

家柄の説明になった。

「そうですか」

聞きたかったのはそこではなかった。趙一家に、鷺尾家がなにか過去に世話になったことでもあって、そのお返しか。どんな義理があつて、そこまで親身に世話をしたのか。面倒を見た背景にどういうことがあつたのかが気になったのだが、怪老の言葉にはヒントもない。

「彼女の弟さんは、親代わりの鷺尾家が地方棋士だったこともあり、幼いころから碁に馴染んで、ごく自然にプロの碁打ちをめざされたようです」

「それは、それは」

どうして鷺尾家はそこまで趙一家の面倒を見るのか。その質問の答があらぬ方向へと進み始めたので、ついぞんざいな相槌になった。

同じ敷地に住まわせてそこまで世話をするというのは、それなり、何か特別な理由があるのではないかと思う。帰化を勧めたというが、鷺尾の姓まで名乗らせた。当主が、困っている者を見捨てられない性分だったとしても、普通、そこまでするだろうか。

「人の話をそんなふうにしか聞けないなら、もう話しません」

猿渡の、気のない相槌に、綾小路富子はツムジを曲げてしまった。

「ごめん。まじめに聞くよ。悪かった」

「もう知りません」

「いや、悪かった。それで、碁士をめざしてたという女将の弟さんという人は、どうになりましたか」

「自殺されました」

「え、どうして」

「小学生時代から、囲碁が強くて」

思い出すように遠い目をして、

「兵江さんと同様に、関西棋院の院生で、名前は、趙憲治」

「記憶がないな」

「なかなか入段出来なくて。唯一めぐって来たチャンスでは、この一局に勝てば晴れてプロの仲間入りという大事な勝負の相手が兵江

さんで」

関西棋院の院生制度では、十八歳までに入段できないと院生資格を失う。つまり、プロへの道が閉ざされるということだ。

「兵江に負けたのか」

「はい。それも、味の悪い嫌な負け方」

圧倒的に優勢だったという。この一番に勝ったら、念願のプロになれる。その優勢の碁を、二手連打の禁手負けで落とした。

「悪夢のような敗戦だったことでしょうかね」

兵江は、打つとき、石をそつと置く。気合を込めて、ぱしりと激しく盤上に石を叩きつける棋士が多いなか、彼は、そつと置くのが特徴だった。

そのときも、そつと置いた……と思った。

しかし、置いたのではなく、そつと石の位置の乱れを直したただけだった。兵江は、まだ、打つてはいなかったのだ。

だが、勝利を確信し胸高鳴る趙青年は、兵江は石を置いたと思った。その結果の二手連打。

痛恨の錯覚だった。

「悔しさのあまり、彼ははめられたと思われたようです」

必勝の碁だった。それを兵江の卑怯なふるまいによって落としたと。

「入段の目があったのは、そのとき一回きりだったのか」

「もう十八歳直前で、本当に、最後の最後のチャンスだったようです」

悔しい思いを抱いて、自殺したのだという。

「しかし、微妙な話だな。まぐれでプロになっただけかもしれないがなかっただろうに」

「本人は、そうは思わなかったでしょう」

「そう？」

「だって、若いころは目立たなくても、年齢を重ねてから頭角を現す人だって多いでしょうに」

「牢名主さまは、なぜか譲らなかった。」

「大器晩成か、なるほどね」

そういわれれば、猿渡も否定出来ない。元々、囲碁界では、経験を積まないとタイトルは取れないとされてきたものだった。いくら強くても、若いうちは頂点には立てないと。むしろそれが常識とされていた。

「囲碁の世界では、ただ強いだけじゃ熱心なファンは納得しないからなあ」

昔から、超一流といわれた達人たちの碁には、『芸』があった。

強いだけではなく、熾烈な戦いの中に、見る者が思わず息を飲むよ

うな芸がなければ、ファンは尊崇の念は抱かない。盤面を数えてこちらの領地が広いかで勝敗が決する世界ではあるが、そこに至る戦いの過程に、観客を惹きつけるどのような独創の打ちまわしがあったかが問われる。

あつと驚くような一瞬の技、あるいは、うーんとうならせるような重厚な戦略。いずれにしても、観客や解説者が予想もしない鬼神の発想。それが芸といわれるものである。そして、そうした境地に到達するまでには、碁打ちとして、それなりの修行の時間が必要ということだ。

生きのいい新星が囲碁界を席卷するようになったのは、二十四世本因坊の石田芳夫が現れて以降のことだという人もいる。石田は、二十二歳で本因坊になった。棋聖、名人を加えた三大タイトル保持者の、最年少記録を塗り替える快挙だった。若くして頭角を現すことがセンセーショナルなニュースになるほど、若手にとっては容易でない世界。それを知っているだけに、大器晩成ということがあるではないかと主張されれば、強くは反論できない。

かくして、綾小路富子にいわせると、運命に導かれるように、兵江は風天閣にやってきたということらしい。そして、いまた、綾小路女史の呪文に操られるように、猿渡は風天閣の玄関に立っていた。女将の鷺尾夕子から、直接、弟の話聞いておかねばならないと思っただからだ。

「あら、先日は、ご利用ありがとうございました」

玄関を入ると、たまたま客を送りに出ていた女将が気づき、慇懃に腰かがめた。午前十時前。客がチェックアウトして、暇になりそうな時間帯を見計らってやってきたのだった。

「兵江の消息は、まだつかめないようですね」

「そのようですね。みなさん、お友達だそうで、ご心配でしょう」

「女将さんも、兵江とはご縁があるそうですね」

「単刀直入に切り込んだ。」

「え？」

「前夜祭の日、話はされたんでしょ？」

「女将はしばらく黙り込んでいたが、」

「どなたからお聞きになりましたの？」

「あ、いや。風の噂で、はい。弟さんが、兵江と同じ関西棋院の院生でおられたと」

「よくご存知ね」

「観念したように言葉を吐いた。」

「あいさつされたんですか」

「兵江さんの方が気づかれて。弟は元気かとたずねられて……」

「そうでしたか」

「弟のこと、ご存知なんでしょ？」

さぐるように猿渡の目を覗き込む。

「自殺されてますよね」

「やっぱり」

キツと睨んで、

「兵江さんは、弟は碁打をあきらめて田舎に帰ったと思っておられたみたいでした」

「それで、打ち明けられた」

「はい。あの碁のすぐあと、自殺したんです、と」

あの碁のすぐあと、という言葉に、悔しさがにじんでいた。

「でも、お話をしたことで、後悔したんですよ」

「どうしてですか」

「だって、兵江さん、凄く動揺されて」

自分にとっては無理に勝つ必要のない、しかし趙青年にとっては負けられない碁を、後味の悪い碁で勝ってしまった。そのことを気にしていたと。

「勝負の世界に生きる人間は、試合が始まると、没頭してしまうんでしょう。ゲーム以外の世俗的な話は、吹っ飛んでしまうんだと思いますよ」

「兵江さんも、そうおっしゃってました。始まる前までは、何が何でも勝ちたいといった思いはなかったのに、と」

「そうでしょう、そうでしょう」

そうか……と猿渡は思った。あの日ここで、彼は趙の姉と再会し、弟の死を告げられたのだ。そこまではわかった。

だが、それは姿を消した謎を解く鍵にはならない。

「お邪魔でなかったら、お手数ですが、もう一度あの部屋を見せてもらえませんか」

「ええ、いまなら構いませんが」

怪訝な顔を隠さず、それでも前に立って案内してくれた。

「どうぞ」

「おお、この部屋でしたね」

ドアを開けると、入ってすぐの上がり櫃ツボが丁寧テイジヤウに磨き込まれている。

「その後、警察には届け出られたんでしょうか」

「放っておけないと、棋院の方が、手続きをされたと聞いておりますけど」

宿としても少し話は聞かれたが、直接はタッチしてないから詳しくはわからないという。

## 誰もが貝になった

(一)

姿を消した白竜位の所在が明らかになったのは、失踪からほぼ三カ月ほど後のことだった。

棋院の発表によると、右腕骨折で都内の病院に入院しているとのこと。顔面には殴られたあともあったという。白竜位戦の手合い会場から、なぜ姿を消したのか。傷の理由はなにか。本人は、あやまつて転んだとしかいわない。何者かに拉致され、暴力的に腕を折られたものと思われたが、白竜位は否定し、多くを語らない。

とにかく、保護された警察近くの医院で応急処置がほどこされ、その日のうちに東京の病院に移ったということだった。福川市でも大阪でもなく東京というのが不自然に思えないほど、白竜位のタイトルをとってからは生活の中心が東京に移っている。

タイトル戦の扱いについては、まだ結論が出されていなかった。おおかたの意見は、「不戦敗とすべし」だ。一般的なルールでは、遅刻した場合はその分を持ち時間から引かれるというものが多いわけ、その場合は、持ち時間が切れたら負けになるからだ。それが常識的な意見のようにも思える。挑戦者である梶原九段には、歓迎すべき考え方であった。

だが、タイトル戦には様々な背景があり、それほど単純な話にはならない。

まず、バックにスポンサーがいる。さらには、タイトル戦を掲載する新聞もある。むざむざ対局数を減らすのは興行的視点からすれば、いささか愚かな選択だという考え方もあった。

新聞は、再戦を強く主張していた。だが、再戦に持ち込むには、それなりの事情が必要だ。白竜位戦第六局をすっぽかしたことについて、誰もが納得する理由が。

ところが、肝心の白竜位は貝になっている。事態は、依然として流動的だった。

「大丈夫か」

急いで上京した猿渡は、ナース・ステーションで借りた花瓶に、持参のバラの花束を挿しながら声をかけた。

「ああ、失敗したよ」

兵江は残念そうだ。

「だが、もう大丈夫だ」

「そのようだな。安心した」

複雑な笑顔で半分だけ喜んでみせて、何があったのか、正直に話せと迫った。

「いいとも」

君にならと、語り始めた。

「あの前夜祭のあった夜、小生、山県記者に誘われて、散歩に出たんだ」

それは、聞いていた話と符合した。

「宿の仲居もそういつてたよ」

大一番を前にして、余計な緊張感を取り除きたい気分だったし、山県記者が熱心に誘ってくれたこともあったという。

「風天閣の女将、知り合いだったんだってな」

「知ってるのか」

「趙憲治の姉」

「詳しいんだな」

「彼女から、弟が自殺したことを聞かされたんだってな」

「ああ、知らなかった。田舎に帰ったと聞いていたからな」

そのこともあって、気持ちが悪くなかった。

「タイミングよく、山県が散歩に誘ってくれたのか」

「そうだ」

その散歩の途中で、奇妙な光景に出くわしたのだという。

ほとんど無人の田舎道だった。

「川沿いの道でね」

「奇妙なもの？」

「ああ、誰かがショベルカーを動かしていた」

「そのショベルカーの、どこが奇妙なんだ」

「数日前の災害で崩れた石崖を、さらに壊しているように見えた」  
意図的に、被災箇所を規模を広げていたように映ったのだという。

「山県記者が近づいて行って、何をしていますかと、声をかけた」

「なるほど」

「相手は何か答えたようだったが、山県記者は納得せず、一方的に、どんどん問い詰めていったんだ。そのうちに、小生のところからは、記者が男の胸倉を掴んでいるように見えた。相手が答えられないものだから、流れで……。そのまま自然にもみ合いになったのだが、ショベルカーの男と山県では初めから喧嘩にならなかった。くず折れるように倒れた男を、山県が冷ややかに見下ろしていたとき、突然足元が崩れ、彼は川に落ちたんだ。距離があったし薄暗がりではあったが、小生にはそう見えた」

まったくのはずみだったが、長雨の直後で、河川は濁流が渦巻い

ていたという。

「倒れてた男の方は無事だったのか」

「ああ、たまたま岸寄りだったからな」

わずかな違いが、命運を分けたということか。

「驚いたのは、男が動かなかったことだよ。人間が川に落ちたのに、助けようとしななんだ」

「倒れていても、意識はあったわけか」

「すぐに上半身を起こしたからな」

「そうか、わかった。だがそれほどの激流なら、助けようとしたところでどうだったかな」

「それでも小生は、まず落ちた記者を追ったんだ。無意識の行動だった。助けられるかどうかなんて関係ない。人間なら、そうするのが本当だろう」

「それで、どうにかなったのか」

「いや、どうにもならなかった。だが、あの場面では、人の心を持つていたなら……」

兵江は、いまいましそうに主張した。

「さあ、それはどうか」

「おまえなら、そうはしないというのか」

「さあ。ま、俺ならどうしたかなんて関係ない。ただ、人間、気が動転したら、なかなか冷静な行動には移れないものだ。たとえば車の前に突然人が飛び出して、急ブレーキをかけたが間に合わなくて、はねてしまったような場合には、頭の中が一瞬真っ白になって、全身が金縛りになったように動かなくなるとい話がよく聞く。目の前の現実を認めたくなくて、無意識に現場から立ち去ってしまう人だっているらしいじゃないか」

「そんなのは無責任だ。事故を起こしてしまったら、まず被害者を安全な場所に移すなど適切な処置をして、救急車を呼び、警察に連絡する。それが常識じゃないか」

「さすがに勝負の世界に身を置く人間らしい豪胆さだな。だが、みんながみんな、おまえと同じように落ちついていられるわけじゃない」

「小生が特別だというのか」

「そうはいわないが、必ずしも誰もがそんなに冷静でいられるわけではないといってる」

「そんな話、小生が納得すると思うか」

ベッドの上で、大いに憤慨している。

「ま、それは置こう。それで、山県記者のことだが……」

「うむ、残念なことをした」

兵江は唇を噛んだ。



「ところがだ、山県は、翌日に風天閣をチェックアウトしたことになるってんだぞ」

事情があつて、彼のことは少し調べたのだと打ち明けた。すると、今度は兵江が仰天した。

「嘘だ。そんなことは、あり得ないぞ」

思わずベッドから上体を起こして、

「あの激流では、無理だ」

きっぱりと、断言した。

今度は、猿渡が腕を組む番だった。

「本当に無理か」

「無理だ」

「そうか」

ついに、黙り込んでしまった。

そのとき、軽いノックがあつて病室のドアが開いた。

「兵江さん、お熱を測ってください」

体温計を渡すと、

「あとでまた来ますから」

そういつて、すたすたと出ていった。

「いまどきのナースは、計り方が適切かどうかも確認しないで行ってしまふのか。いい加減なもんだな」

猿渡が無然として呟くと、

「表示された温度が不自然だと、もう一回計れというだけだ。表示が平熱だったら、計り方なんてノーチェックだよ。小生も疑問に思つたが、もう慣れたよ」

いまどき、それが普通なのだろうか。

「それで、そのあと、どうなったんだ」

山県が激流に流されたあとの話だ。

「それが、よくわからない。記憶がないんだ」

「なに？ 気でも失つたか」

「わからない。とにかく、記憶はそこで一旦途切れているんだよ」

猿渡は、腕組みをしたままだ。

「気を失つたのかな。小生には、わけがわからない。気がついたときは、小部屋に閉じ込められていた。まわりには見張りもいたから、ああ、こいつらに捕らわれたんだなと思つたんだよ」

「ちよつと待てよ。おまえ、いったんは宿に帰つたんじゃないのか。旅館の仲居からはそう聞いたぞ」

「何をいつてる。帰れるわけがないだろう」

嘘をついているようには見えなかった。

意識が戻ったら小部屋に監禁状態で、以来、ずっと、ほぼ三カ月、そこに閉じ込められていたのだという。

「話が全然違うぞ」  
「そういわれても」

白竜位は、山県とともに宿に帰ったことになっている。それは仲居も見ている。山県は激流に沈み、兵江は監禁されたというのであれば、ありえない話だ。仲居の話が本当なら、誰かがふたりを装って宿に戻ったということになる。

「そうなのか」

猿渡は、思わず身震いした。

「じゃ、とりあえず、宿には帰らなかつたということにしておこう。意識を失った話だが、散歩の間、そのブルドーザー野郎と出会う前だが、山県記者と、喫茶店かどこかに入らなかつたか」

「ん、入ったが、どうして」

「そうか。じゃ、多分、そこで飲み物に睡眠薬でも混ぜられたんだろう」

「こともなげに断じた。」

「山県が小生にか」

「ほかに誰がいる」

「なんだと。はじめから、計画されていたというのか」

「監禁するための部屋も、あらかじめ用意されていたわけだろう」  
冷静に考えてみれば、そのとおりだった。少なくとも、拉致だけは計画されたものでなければ説明が付かないようだ。

「それはそうなんだが」

半信半疑の白竜位に、

「ところで、おまえ、腕はどうした。三角巾で吊ってなくてもいいのか」

「ああ、そんなやり方は古いんだよ。最近の医療では、考え方が変わっててな」

曖昧にいつて、弱々しく笑った。後ろ暗いところがあるときの、それは兵江の昔からの癖だった。

「おまえ……」

少し睨みつけて、

「腕を折られたという話は、嘘っぱちか」

「誰が、腕を折られたって？」

「新聞には、そう書いてあったぞ。棋院が発表したと」

「じゃ、そう書いた記者か棋院に聞いてくれ」

一転、強気に豹変した。

「顔を殴られ、腕を折られていると」

「そう書いていたか？ おかしいな。小生は、転んだとしかいわなかつたはずだが」

「そういわれれば、確かに『本人は転んだと話しているが……』と

断ってあったことを思い出した。

「本当に、転んだ怪我なのか」

「ああ」

「じゃ、なぜ入院している」

「いや、体調全般に問題がないかどうか、検査しておいた方がいいといわれてな」

そういうと、再び、弱々しい笑みを浮かべた。

「しかしおまえ……」

白竜位戦の関係者たちは、兵江が、拉致され、暴力的に腕を折られて帰ってきたということを前提に、第六局の取り扱いを協議しているはずだった。

少なくとも、兵江にとっては有利な展開だ。

「悪い男だな」

「なにがだ」

猿渡には、平然と兵江がとぼけているように見えた。

そのとき、またドアがノックされた。

「失礼します。何度でしたか」

看護師が、体温計を受け取りにやってきた。

平熱でしたと答え、体温計を渡すと、その数字を確認してリセットし、抱えているファイルに記入して帰っていった。

「受け取ったあとは案外丁寧なんだな」

少し見直したようにいうと、

「あいつ、さっきの看護婦さんとは別の人次で」

兵江が、ニヤリと笑った。

「なんだと」

「猿渡先生にも、思い込みがあるということか」

みんな同じような格好だからなというしながら、兵江が気づいた。

「一時間の散歩から宿に戻ったふたり連れも、そういうことか」

「そうだろうな」

猿渡もうなずいた。

「それはそうとして、さっきの、小部屋で目が覚めた話の続きを頼むよ」

先をうながした。

「ああ、そうだな」

思い出すような目をして、

「気がついたときは、小部屋のベッドの上だった。見張りがいた。けど、あまり強そうじゃなかった」

「そういえばおまえ、腕に自信があったよな」

「うん、少林寺拳法には少し覚えがある。己れこそ己れによるべ、不敵な笑みを浮かべて、

「小生は拳禅一如の修養に熱心じゃなくて、正式な段位はないんだが、拳技に限っていえば、練習相手だった武階五段の男には、負けたことがなかったよ」

腕をさすような仕草をしながら答えた。

縛られたりしていたわけではなさそうだ。

「だから恐れるものはなかったんだが」

それでも、白竜位戦はどうなるんだろうかと思っただし、焦りはあつたという。

「それで、三カ月もの間、どうしてた」

「毎日のように、電話が掛かってきていたんだ」

「電話？」

「ああ、電話で、世間話ばかり」

その電話の相手というのが、兵江の拉致を命じた張本人なのか。

「世間話って、おまえ」

世間話をするために、拉致する者はいない。いくら変わり者でも、世間話がしたくて音が外に漏れない小部屋を用意して、見張りまで置く物好きはいないだろう。

「そうなんだが、実際、世間話ばかりしてたんだよ」

わからない話だが、兵江の表情に、嘘をついている兆候はない。

「そうか。じゃ、すまないが、具体的に、どんな話だったか教えてくれよ」

「そういわれてもなあ……」

世間話は世間話だよと、困った様子を見せたが、

「たとえば、白竜位になって、生活がどう変わったかだとか」

「どう変わったんだ」

「タイトル料があるから、たちまち生活の心配はなくなった」

「だが、タイトル料なんて一時金だ。すぐなくなる。明日の生活の補償にはならないだろう」

「クラカミもそうだったよ。あ、電話の相手の名前だ。どうせ偽名だろうが」

「それで？ だから、どう答えたんだよ」

「財界人に知り合いが増えた。小生の人柄を気に入って、囲碁を教えに来てくれと」

社長や会長クラスのレッスンの依頼が増えた。最初のうちは手探りだったが、兵江の豪放磊落な性格や、無遠慮な物言いは、たちまち経済界の実力者たちの多くから気に入られた。

「なるほど」

「それで、じゃ、いついつは、誰の家について教えたんだ、とか聞いて来るんだ」

「そこで、どんな話をしたか……も、だな」

「そうだ。なぜわかる」

「わかるさ。それが、相手の知りたかったことさ」

「なに？」

「山県という記者は、アトムの話によると、寒い国との繋がりがうわさされている男のようなんだ」

「スパイか」

「おそらくは、な」

「スパイが、なんで小生なんかに用事がある」

「わからんから、ここに来た」

「なんだ、見舞いじゃなかったのか」

兵江が口をとんがらせると、

「見舞いもあつたさ。おまえが悪漢に腕を折られたと、まんまと騙されてたからな。俺は正直者だから、騙されやすいんだ」

「人聞きが悪いことを言わないでくれ。だから小生は、はじめから嘘なんかついていないといったぞ」

無責任な新聞が勝手に書いたことまでは責任は取れないと、ここは譲らない。

「それより、クラカミとやらは、小生から何を聞きだそうとしたつて？」

冷静に話題を戻した。

「うん」

猿渡も、話の本線に戻って、

「それはこつちが聞きたいことだが、おまえの話から推察すると、ずばり、財界情報、といったところかな」

「なに？」

「寒い国も、いまは莫大なマネーを抱えている。つまり、ファンドをやってるのさ」

「ヘッジファンドか」

「そうだ」

そこまで聞いて、兵江は考える目になった。クラカミと交わした世間話を、高速で反芻している。すっかり黙り込んでしまった。

「思い当たることあるのか」

猿渡の問いかけに、

「ある」

素直に、断言した。

「IT関係の社長や副社長の話題に、いまから振り返れば、何回か誘導されたような気がする」

「寒い国は、ITの人材引き抜きも熱心だとアトムがいつてた。彼の場合は、研究成果そのものを狙われているわけだがな」

「警察はどうしてるんだ」

「しつかりやってるさ」

「そうは思えないが」

「しつかりやってるんだが、具体的には、何もやっつけてくれない。というより、出来ない意味もあるらしい」

猿渡は、現実の制度のどこかしきを知っている。

「どうしてほしい。身辺警護か。政治家だって陣笠クラスだと、相  
当な理由がないと個人警護まではやってくれないぞ」

「国会議員でも大変なんだったら、小生のような庶民は、到底、無理か」

「事前に何らかの具体的な動きがあつて、その被害状況を証明できたら、動いてもらえる可能性はある」

脅迫する手紙が届いているなら、それが単なる悪戯じゃないことをうかがわせるに十分なだけの回数、繰り返し送られてきているものを証拠としてそろえて、それを警察に持っていくとか、脅迫電話なら、その録音テープを持参するとか、だ。

「手ぬるい」

そんなことで被害者を守れるのかといった顔だ。

「だからといって、事前に予防的に動く、これは社会問題になるぞ」

事件を起こしそうだからといって、安易に誰かを拘束するといったことは出来ないのだ。

「やったら、テレビや新聞が黙っていないか」

「人権を守れ、と大合唱だろうな」

「権力の横暴か」

「そういうことだが、実際には、警察の窓口で担当が誰になるかが、運命の分かれ目になる意味もあるかな。優秀で誠実な警察官に当たったら、その時点で出来る最善の方法を、一緒になって考えてくれることだってあるだろうさ」

「なるほどな」

兵江にも思い当たることがないわけではないようで、

「そういう意味では、役場だって、病院だって、担当が誰になるかによって運命が分かれることって、あるよな」

「病院といえば……」

猿渡は、気になっていたことを切り出すタイミングだと思った。

「誰の紹介でここに入った」

腕を折られたとの発表といい、何かと気になるのだった。本人が否定しているにもかかわらず、実際は折られた模様と新聞が書く以上、病院関係者の関与が疑われた。

「棋院の指示だよ」

兵江は、そっけない。

「そうか」

棋院というが、本音はどうも、白竜位戦の関係者と、棋院の誰かとの思惑が合致した結果ではないかなというような気がした。棋院が、組織的に協議して、兵江をここに入院させるなどというようなことは考えられないからだ。

「それは、正確にいうと棋院としての指示じゃなく、棋院の誰か個人からの指示だった、ということだよな」

棋院そのものの正式な意向ではあるまいと、問いただした。

「まあな」

その結果として、第六局を流した責任は白竜位にはない。そういう空気が醸成されつつあった。

「そもそも、小生は、なにもわからずに拉致されたわけだ。それで負けにされるなら、これから、挑戦者は、拉致すればタイトルが取れるという話になってしまう」

つい、暴論を吐いた。

「タイトル保持者には、護衛をつけてもらわねばならない」

兵江の勢いはとまらない。

「犯罪は犯罪だ。今回の事件で、第六局の扱いをどう決定したところで、おまえのいうような事態を招来するような心配は無用だと思うよ」

罪を犯せばしかるべきところが罰してくれることになっていると笑って、

「気持ちにはわからないわけじゃない。だが、どうやら事態は、白竜位さまに有利な方向に運んでいるらしいし」

だから、もうあまり興奮するなと諭した。

「それにしてもだ……」

「うん？」

「なぜ、いまごろになって開放されたんだ」

「開放されたわけじゃないさ。小生が、自力で逃げた」

兵江の答えは、猿渡には予期しないものだった。

「閉じ込められていたっていったのに、よく逃げられたな」

相手が、怪しい国の秘密組織の人間であれば、当然それなりの訓練も積んでいるはず。兵江は逃げ出したというが、いくら少林寺拳法の使い手といっても、容易ではないはずだと思った。

「ああ、それがな、急に引越すといいだしたんだ」

「引越す？」

「そうさ。後ろ手に縛られた状態で、目隠しをされて連れ出されたんだ。そのとき、小生、階段から落ちた」

多分、人目につかないように、そのマンションにエレベーターはあっても、あえて非常階段のようなものを使ったのではないかとい

う。

「顔の怪我は、そのときのものだ。小生、誰にも嘘はついてない」

「もうわかった。信じるよ」

「そうか」

満足そうにうなずいて、

「それでだ、車が、競技場だか公園だか、歓声が聞こえる施設に近づいたとき、急に便意をもよおした」

「なんだ、臭い話になったな」

「そうなんだ。見張り役の男たちは弱った」

「なるほど」

「弱ったが、小生も譲れない」

「それはそうだ」

「結局、車を園内に乗り入れて、目隠しをはずし、後ろ手に縛られていた腕も自由にくれた」

「それでどうした」

「男たちはふたりだったんだが、ふたりとも付いてきたさ」

「おまえが、少林拳の達人とも知らずに、か」

「そのとおり」

満足そうに胸を張った。

「あとともう、ご想像のとおり。逃げるのなんて、簡単だったよ。さつさとタクシーに飛び乗って地元の警察へ直行」

「わかった」

そうは答えたが、兵江の武勇伝を聞いていると、それでも何か納得できないものを感じていた。

寒い国のマネーは、そもそも、市場情報の収集が目的で拉致まで敢行するだろうか。財界人に囲碁のレッスンをしている碁打ちなら、ほかにもいくらでもいるだろう。顔の広さからすれば長老格の方が知識は多いだろう。逆に、兵江などより経済に詳しい若手棋士だっ  
ていそうなものだ。拉致などという荒っぽい手段に出なくても、情報  
報が欲しいなら親しくなればよい。誰かに紹介してもらって道をつ  
けてもらえば、情報はいくらでも集められるはずだ。

経済の話に明け暮れていたのは、実はおまけで、真の目的は別の  
ところにあつたのではないかと思う。だが、それが何がわからな  
かった。

「まあ、むかし取った杵柄とは、このことだったな」

兵江は、すっかり上機嫌になっている。

「おまえの武勇伝はもういい。それで、警察には話したのか」

「うん。一応、ひととおりのことは話したよ。棋院では、事件を公  
にするかどうか揉めたらしいんだが、風天閣には新聞記者もいたか  
ら隠しとおせるわけもないしな。それよりなにより、これはやはり



ただ事じゃないと決断してくれて、捜索願が出されていたからな」

「なのに、白竜位さまは自力で生還かい」

「警察の顔をつぶしたかな」

少林拳の達人は得意満面だ。

拉致グループを、警察は逮捕できるだろうかと問う兵江に、

「手がかりがないかもな」

そうは答えたが、兵江の協力次第では、さほどむずかしくもないのかなと思いつながら、

「捕えられていた部屋で、何か外部の特徴的な音が聞こえたかとか、逃げた場所までの車での移動時間がわかるかとか、そういうことを、警察では詳細に尋ねられたかい」

「ああ、聞いてくれたよ。だけど、小生の方が、答えられなかった」

小部屋は完全防音だったし、車で移動中のときは、そんな余裕がなかったと、正直な気持ちを吐露した。

「どうやって逃げてやろうかと、ほんと、必死だったんだから」

兵江はそういつて、犯人逮捕は望み薄だと思っているふうだったが、猿渡はそうでもないという感じを持っていた。

完全防音のマンションというキーワードがあるし、監禁に使われた部屋は、さほど上の階ではない。逃げたスポーツ公園もわかっている。丁寧に洗っていけば、犯人にたどり着ける可能性はなくはないだろうと思う。

「わかった。まあ、元気な顔を見ることが出来てよかったよ。第六局、打ち直しになることを願ってるよ」

「ありがたい。そうなってほしいよ」

ベッドの脇に立ち上がって、元気そうに握手を求めてきた。

## (二)

「福川に帰ったら、すぐに奥花の風天閣にいつて兵江たちが散歩から戻ったというときの状況を詳しく聞いてみるつもりだが、ヤツの話のとおりだと、山県は、いまごろは海の底だな」

猿渡は、都内で御茶ノ水と合流し、いまは、新橋のビル一階にあるビアホールにいた。

「落ちたと思われる地点から海まで、途中で井堰などはない。普通に流れに運ばれていけば、とっくに海に到達している」

病院での兵江白竜位の話の報告して、猿渡は自分の推測を口にした。

「一時間ほどで帰ってきたと証言した仲居も、ふたりの顔を見たわけじゃないんだろう」

その点も確認しなければと思いつながら、  
「タイトル戦のときの宿代を、主催者や棋院がどういうふうに負担するルールになっているか知らないが、山県記者の支払いは、まちがいに、誰か別の人間が済ませたんだよ。だって、当人は海の底なんだから」

夕方にはまだ少し早い時間。客は、彼らの他には誰もいない。コーナーの大画面テレビは、ボブ・ディランの思い出話を流していた。

小さなライブの店でディランのバックを務めていたという老人が、切れのいいベースランニングを披露しながら、心が溶けるような笑顔を見せている。

ふたりは、生ビールとソーセージの盛り合わせ、ジャーマンポテトを注文した。

「山県の宿の支払いやチェックアウトや、その辺の真相がどうだったのかはよくわからないけど、ま、風天閣の方はお任せします。ところで、倉上ファンドといえば、この世界では知らない者はいませんよ。オイルマネーから偽造のドル札まで扱う、たちの悪いことでは有名なヘッジファンドですから」

意外にも、クラカミというのが実在するファンドマネージャーだということを知り、さりと告げた。

「失礼します。お待たせいたしました」

まずビールが運ばれてきて、ふたりはジョッキをコチンと合わせた。

「そうなのか。だったら、兵江も、警察にそのことを話したら、動いてもらえるかな」

「でも、証拠はないんですよ」

電話でおしゃべりした相手が倉上ファンドだったとしても、そして仮にそれが証明できたとしても、監禁そのものの首謀者が倉上だということには必ずしもならない。

「倉上に、拉致なんか知らないといわれたらどうしますか」

「なるほどね」

だが、倉上が偽名でないことがわかっただけでも収穫だと思う。その反面、堂々と宣言して行動していることを考えると、それだけ自信にあふれた油断ならない相手だという気もする。事実、兵江の話だけで、具体的な証拠は何もない。

「それに、倉上は性質の悪いヘッジファンドですが、荒事はやりません。裏世界での顔は広いから、連携することはあっても、自分では手は出さないんです」

猿渡とは無縁の世界を解説してくれて、

「ま、念のため、倉上は僕の方で洗ってみますよ。ただ、山県が中

心で動いていたのなら、兵江さんを拉致した連中というのは、多分、倉上のグループではなく、諜報機関の関係だと思っんです。元々、僕に興味を持つてる連中だし。こうなったら、そっちも調べてみるもいいます」

「そうしてもらえばありがたいが、大丈夫なのか」

相手の組織が霞の向こうにぼやけているように思うと、急に心細くなった。

「昔、みんなで麻雀をやったころのことを覚えていますか。僕の、ガードの固かったことを」

御茶ノ水にそういわれて、猿渡の、懐かしい記憶が甦る。

「そうだったよな。元々、みんな勝負の基本は防御だと充分わかっている連中ばかりだったけど、アトムは、誰よりも固かったよな」

「基本は防御だとわかっていても、わかっているくせに、僕にいわせれば、他のみんなは徹底できなくて、あれ？　と思うような勝負に出て行ってましたよ」

「そう見えたか。だが、そうじゃない。危険牌を、どこまで絞り込めるかという話だよ。俺たちの方が、攻撃力が上回っていたということだ。過剰に用心して、いつも安全なところにいたのでは、勝機がそれだけ少なくなるからな」

「つまり、そう考えている人がいる間は、少なくとも、わざわざ僕が先頭を切ってリスクを負担する必要はなかったというだけです。この理屈、わかりますよね」

危険なシーンでは、じっと我慢してひたすら姿を潜めていれば、残りの三人が勝手に切り結び、自分だけは安全だったのだという。

まだお互いが若くて、激しく刃を切り結んでいたころの時間が、懐かしく匂い立つ。

「楽しかったなあ」

「思い出してしまいましたよ」

そんな、好敵手たちの中で、最もガードが固かった御茶ノ水でさえ、勝負に出るときは出る。問題は、そのタイミング、情勢の総合的な読みだ。

「お待たせいたしました。こちら、ソーセージの盛り合わせと、ジャーマンポテトになります」

奇妙な言い回しが気にならない世代でもないと思える熟年の男が、不器用な手つきでテーブルの中央に並べた。

「ご注文の品は、以上でよろしかったでしょうか」

「うん。とりあえずは。また、あとでお願いします」

「それではどうぞごゆっくり」

歩み去る背中が、妙にも悲しい。

「あの男、長年奉公していた会社を、無慈悲にリストラされたとし

か思えないな」

そんな猿渡の趣味の発言は冷たく無視して、

「逃げてばかりで勝てるか、という人は、僕から見たら、逃げ方が下手なんですね。下手だから、逃げるどころな結果にならない。それなら、いっそ、目をつむって、行っちゃえ！ でしょ。それで勝てたら楽だけど、ものごとにはそんなに単純じゃない。まず、防御の勉強をしろといいたいですね」

「そういう意味では、兵江は、異色の麻雀を打ったよな。少林寺拳法の使い手だからかどうか、確率を重視してるとか訳のわからないことをいいながら、一番よく勝負に出ていたかな」

「待ちに仕掛けを作って、いくら河に迷彩を施しても、そうやって苦労して作った待ちの方が、実戦では先に入るんだよ、というのが口癖でしたよね。入念に仕掛けを用意した方の面子が先に完成してしまう。世の中、そうしたもんだよと」

「その理論で実際に戦果を上げるから、こっちも反論できない」

「怖かったですよね」

御茶ノ水は、一番の苦手は兵江だったと告白した。

新しい客が入ってきたのは、そのときだった。

いかにも屈強そうなふたり組。一見して、普通の人とは異なる暴力的な雰囲気漂わせている。

いち早く気づいた御茶ノ水が、猿渡に、「見るな」というサインを送ってきた。

危険な時間帯に入ったということか。

経験のない猿渡は、思わず身震いした。

「僕を追いかけまわしている、顔なじみです」

「どうする？」

「ここはもう、三十六計、逃げるに如かず」

「了解。逃げるのはいいが、ずいぶん時代掛かったいい方だな」

「こういう紋切り型のフレーズは、学校ではできるだけ避けなさいと教えられたのですが、僕は、そういう紋切り型アレギーの考え方こそ定型的で、陳腐に感じるんですよ」

「お、この窮地にあって、落ち着いて、凄いことをいうなあ」

「あたりまえですよ。だって、言葉は文化ですよ。紋切り型を避けるのは勝手だけど、ふさわしい場面では、どんな使えばいいんです。個性的な、独創的な表現は、それが必要なシーンでこそ象徴的に使った方がいい。さらりと流せばいいようなシーンでは、絵で言えば、背景の壁を塗るだけみたいなきは、そんなに苦労して捻ってどうするんだよと、そう思うわけです」

落ち着いている点を称賛したのに、凄いの方に強く反応してきた。「思い出したが、紋切り型をヒステリックに嫌うプレスの連中も、

テレビのニュースでは、時代絵巻風の伝統行事の照会ではみんな、判で押したように『古式ゆかしく繰り広げられました』とやっつるよな。遺体が帰ってきたら、どこの社も約束したように『無言の帰宅』だし」

「それもあります猿渡さん、枕まくら詞ことばってご存知ですよね」

「枕詞かい。ついに紋切り型の決定版を持ち出してきたわけだ」

「だってそうでしょ、あれですよ。枕詞のことを、紋切り型だから陳腐だって主張する文章家っていますか」

話が壺にはまってしまったのか、執拗に食い下がってきた。

「わかった。もうよくわかったから、さっさと逃げる段取りにかからないか」

いいかげんに勘弁してくれよ、と白旗を掲げて、

「出来るだけ手短に、その三十六計というやつを聞かせてくれないか」

「そうですか。では、そろそろ神輿をあげることにしますか」

御茶ノ水は不敵に笑って、

「この店、トイレの窓が、裏の路地に通じています。斜め前がパチンコ屋の裏口。中に入ると店内通路をエル字に右折して、そこがパチンコ屋正面の出入り口になります」

「わかった」

「猿渡さん、トイレの窓から出た経験は？」

「あると思うか」

「僕は何回もありますよ」

「俺は、残念ながら、ない」

「じゃ、簡単に説明しますね。まず、窓を開けます。次に、窓に背中を向けた状態で、両手両足を壁に突っ張って上昇し、足から出るんです」

そうすれば、外側に降りるのが容易になるのだ。

「狭いトイレの中ですから、全身で上昇していくのはそんなに難しくなと思います」

「そうかい。話を聞いただけで緊張してきたよ」

「大丈夫です。で、逃げた後はどうされますか」

「もう長居は無用。東京駅から新幹線に飛び乗るさ」

「そうですか。じゃ、今回は、ここでお別れしましょう」

そういうと、御茶ノ水はバッグをテーブルの上に置いて、中身を、上着のポケットに移しだした。

「猿渡さんはカバンがないから、その上着を置いて行きましょう」

「飲み代の形かたかい。こんなので足りるかなあ」

心細い顔をすると、

「いえ。ここの支払いは、いずれまた僕が、店に連絡して済ませて

おきます。荷物を残して置かないと、僕らが逃げたと奴らに感づかれますからね」

「まだ、帰ったわけじゃないよというサインか。考えたな」

「こんなの、もう慣れっこですよ」

愉快そうに片目をつむってみせた。

「そうかい。じゃ、いくか」

猿渡は、脱いだ上着を丸めてテーブルに置こうとした。

「その方が相手には見えやすいけど、やはり、いすの背に掛けておきましょう。トイレに行くには様子が不自然でしょうから」

「なるほど、わかった」

御茶ノ水はバッグを足元に戻した。足元だが、怪しい奴らの席から死角にはなっていないはずだった。

「あ、一緒には行きませんか。先に出てください。ゆっくり、ふらふらと歩いて。適当なタイミングで、僕も出ます。トイレの個室はふたつ。向かって右側が洋式で、空いてたらそっちの方を使ってください」

「わかった。しかし、いつもこんな調子で追いかけてるのかい」

「以前はそんなこともなかったんですが、最近は、妙に興味を持たれてしまったようで」

「ふーん。ま、それじゃ、グッドラック」

「気をつけて」

さりげなく席を立った猿渡は、意識して気のない足取りでトイレに向かっていたが、途中で気が変わった。トイレで、右側の個室に入り窓を開けると、素早くフロアとトイレとの間の通路まで戻り、目をつけていた観葉植物の群れの陰に身を潜めた。

ほどなく御茶ノ水が通り過ぎる。打ち合わせどおりに足早にトイレに向かった。

さらにその少しあと、

「おい、もしかして」

「そんな、まさか」

男たちが小走りにやってきて、

「やっぱりだ。逃げられた」

「もう、いやだなあ。信じられませんよ」

ふてくされた顔で頬を膨らませた。

「急ぎましょう」

「ああ。もう遅いかもしれんがな」

互いに愚痴りながら、店の入り口の方に向かった。

猿渡は、しばらくそのまましゃがんでいたが、

「もういいかな」

おもむろに立ち上がって、  
「しかし、どうして榊が……」

ふたり組のうちの片方に、見覚えがあったのだ。  
見間違いでなければ、お互いにまだ若かったころ、警察キャリアとして瀬戸内県警に派遣されてきていた榊紳一郎だ。猿渡が知事室にいたころ、何度か一緒に飲んだこともある。

警察庁に戻ってからは、セキュリティポリスの経験もあったはずだ。キャリアとしては異色の人事だった。いくら才能に恵まれているからといって、キャリア組がSPになることはない。よほど、本人が強く希望したに違いなかった。求めて第一線を歩くことを好んだ異能の男だった。

「榊、相変わらずのようだな」  
懐かしい目で呟いた。

「それにしても、アトムのは何を隠しているんだ」  
彼は狙われていたのではなく、おそらくは、国によって陰ながら見守られていたのだろう。それを知っていながら、逃げたものと思われた。

「このままでは、新幹線には乗れないな」  
猿渡は、席に戻ると自分の上着を手に取り、御茶ノ水のバッグは残したまま、悠然とレジに向かったのであった。

その日、棟方と芥川は、新宿エステック情報ビルの地下一階にいた。その丸善を会場に、三十分後には「大人の絵本」のサイン会が行われる予定になっていた。

「この本は、団塊ジュニアの世代には必ず受け入れられるはずですよ」

無礼な若い編集者に向けられた、棟方のこの、いわば血の叫びは、彼自身を追い詰め、結果として彼の才能と感性を鼓舞した。そんな彼の苦勞は、いま厳かに花開いているように思われた。

編集者に大見得を切った時点では、芥川の方は完成していたものの、棟方に明確な構想はまだなかった。あの日から、棟方の自分との戦いが始まった。

朦朧としていた絵本のイメージが、徐々に形になっていくにつれて、棟方は芥川に書きかえを求めたりもした。芥川が拒否すると、棟方は自分の構想を説明する。そこから議論が始まった。反論され、自説を引いたこともあれば、相手が納得するまで説得し続けたこともあった。議論は、夜を徹して続いた。自分たちが表現しようとしている世界が何なのか、そのすり合わせは、いくら時間をかけようと避けては通れない作業だった。

かくして、彼らの作品は「大人の絵本」と銘打って発売されたが、内容は、かなりシュールな詩画集という表現が近いだろう。

芥川は、混乱する時代の中で悩み迷いながらも戦い続けている世代の叫びや眩きを巧みに組み立てて、一編の詩に構築した。そしてそこに、言葉という絵の具で、まるで抽象絵画のように表現してみせている。

苦労したのは棟方だったかもしれない。

シュールな散文詩の世界を、ストリートに二次元のイメージに置き換えるのではなく、詩の精神的な部分だけ共感して、絵は別個の作品として背景に置いたのだ。

それは、ポール・サイモンの歌うスカボロー・フェアーに、アーサー・ガーファンクルがまったく旋律の異なる詠唱を絡め醸し出した世界に似ている。言葉と絵とは、基本的に異質のまま、自我を保った状態で巧妙に絡まりあっていた。

\* \* \*

石の心に 文 芥川 遼 画 棟方隆三

おさみし山から降りてきた雪の精は  
厳めしい冬を彩る

流れる時に遅れまいと

青白いレースのドレスひらひら

凍てつく空の下

人間たちの行列は続く

生き急ぎ踊る姿には笑顔もなく

いつしか心ゆがみ悩み

もはや基本のステップも踏めない

色あせた欲望と挫折だけが

痩せた狼の遠吠えのように

とわに繰り返される街

青白いレースのドレスひらひら

石になった心に

雪の精はささやく

悲しみの夜こそ耳をすまして

優しい音に気付いてほしいと

\* \* \*



「大人の絵本」は、東京では丸の内や新宿を中心に売り上げが伸びていた。

そうした傾向を敏感に察知して、サイン会が計画されたのだった。とはいえ、元々そんなに部数が出るジャンルではない。丸の内や新宿を中心に伸びているといっても、驚くほどの部数ではない。「タレントじゃあるまいし。むしろがサインしたからとゆうて、なにがどれほど変わるう」

出版してもらった恩があるわけで、しぶしぶ企画には応じたものの、まだ納得できないでいる棟方に、

「案外、狙いは別のところにあるのでは」

芥川が、口を開いた。

「ほら、あそこにテレビカメラが来てますよ。あ、そちらにも」

「テレビが来たからどうだって」

不満はおさまらない。

「私が思うに、おそらく、宣伝が目的ですよ」

棟方が、あ、という顔をした。

「そうです。スポットCMを打てば莫大な経費がかかりますが、ニュースで取り上げてもらえば、無料です。以前、猿渡さんから聞いたことがあるのですが……。選挙の投票を呼びかける仕事をされていたときなど、公示日から投票日までの間で、テレビや新聞のニュースをどう利用するか、プレス各社にニュース情報をどう効率的に提供していくか、その工程表のようなものを考えるのだと」

「出版社の腹も、そういうことか」

「私たちの本が売れるように宣伝計画を立てているのだとしたら、それだけ、本気になってくれているということでしょう」

感謝すべきことではないかといった。

「そうか。そうじゃな。わかった。そうとわかれば、むしろ真剣にやらんとな」

朴訥な棟方が、ようやく納得する。

「誠実に、心を込めてサインさせていただきますよ」

出版社の会議室で打ち合わせをした日から、まだ数カ月だった。棟方が絵を入稿すると、急ピッチで制作に入った。出版社が用意したスケジュールに従って、原画の色校正にも深夜まで立会った。

いま思えば、それらはすべて、出版社の熱意の現れだったようにも思える。

「じゃ、いくか」

「心を込めてやりましょう」

ふたりが気持ちよく、用意されたテーブルに向かおうとしていたときだった。

「やあ、うわさをすれば影です」

やってきたのは猿渡だった。

「話題になってきてるそうじゃないか。よかったな」

「そんなことはありません。まだまだですし、これからだと思っています」

「そうか。だが、これでひとつのスタイルが出来たら、これから先、忙しくなるぞ」

わがことのように喜び、煽り立てている。

スタイルを確立するということは、ふたりとも必ずしも好きではなかった。そのスタイルに拘束され、創作する上での自由度を失うからだ。だが、この世界で売ろうと思えば、画商にしても出版社にしても、スタイルを持つということを強く求める現実がある。露骨に求めるわけではなくても、個性的で興味深いスタイルが確立されると歓迎する。売り出す手法も変わってくるのだった。

プロである以上、売れる必要がある。そして、売れるためには、個性が必要になる。一般の人たちは、作品群のほんの一部だけを見て、その芸術家全体を理解した気になりたいたいのだ。だから、そのための個性の確立を求める。そして、自分たちが理解しやすい、特定の、パターン化されたスタイルの作品でないかと許せないし、受け入れない傾向がある。

創作する側の思いは、その対極にある。

同じことの繰り返しには興味はない。評価されたスタイルばかりにとらわれていたのでは、作品はどんどん輝きを失っていくだろう。多様で複雑怪奇な自らの魂の迷路を、いかにして説明し表現していくか、それがすべてなのだ。当然、その表現はきわめて個人的でいつまでも無限に変化を続けるものであり、他人から見れば難解に映る。しかし、どれほど難解に思われようと、そこが芸術家の求め追及している世界であること。これは譲れないのだった。

だからといって、自分だけにしかわからないものを頑なに創り続けることにどれほどの意味があるのか。それは単なるひとりよがりかどうかが違うのか。重い自問と、常に向き合いながら仕事をしているのだった。

では、売れるためには、ある程度は大衆に迎合するのか、それは芸術の世界に生きる人間として、墮落ではないのか。

常に、古くて新しい、永遠の謎が付きまとう。

猿渡はしかし、いまはそのことは話題にしない。

「これ売れたら、しばらくは、これで食べるぞ」

「そうなればいいのですが」

芥川がはにかむと、

「なるさ。どんどん忙しくなる」

きっぱりと断言したあとで、  
「心配することはないさ。こういうスタイルも持っているぞと、才能の一部を披瀝してみせただけのこと。大人の絵本にしがみつくと必要はないんだから」

これから先、どの方向に向かうのも、自由だと付け加えた。  
「ありがとうございます」

本がいくらかでも売れそうな気配をみせたことで、心の裏側に芽吹いていた小さな悩み。それを、いま目の前にいる猿渡が理解してくれている。予期せぬ喜びが、芥川の胸を突き上げていた。

「おめでとう」

横で棟方もうなずいている。

力をあわせて大人の絵本を完成させた。このふたりに共通しているのは、純朴さだ。

「本当におめでとう」

猿渡は、握手した手に思わず力を込めた。

\* \* \*

三

いくら悲しみを胸に刻もうと

文 芥川 遼 画 棟方隆

郊外には稲穂が広がり

高原の道には秋の風が吹く

茂みに分け入れば

アケビの蔓が灌木に絡みつき

パツクリと開いた実もあやしく熟れて

少年のころの冒険の思い出を呼び覚ます

誰にも逃避とはいわせない

これは個人的な儀式だ

残酷な都市は優しいふりをして

若者たちに煌びやかな夢を見せては

いくつもの皮肉なプレゼントを用意していた

人間の弱みにつけ込む巧妙な罠だ

そして そこにこそ僕らの日々の時間もある

いくら悲しみを胸に刻もうと

そこに僕らの日々の時間もあるのだ

いくら悲しみを胸に刻もうと

僕らの人生は続く  
臆病者が再び立ち上がるためには  
時には儀式も必要になる  
幸いにも街には居酒屋があふれ  
本棚にはブランドーの小瓶もある  
君だってこんな時間から  
日だまりの中に座り込みたくはないだろう  
さあ カードを配ってくれ

\*

\*

\*

背景は、深い青の星空だった。海にも似た空を、ピエロや猛獣が泳いでいる。

「ところで棟方、おまえ、アトムと親しかったよな」

「親しいといえば、むしろはみんな親しいじやろう。わしだけが特別に親しいとは思わんがなあ」

自信なさそうに、何を聞きたいのかと、次の言葉を待っている。

「いや、俺から見たら、御茶ノ水は孤高のエリート。俺たちはみんな、はみ出し者で似たようなところがあるから、いつの間にか風に吹き寄せられるように集まったが、俺たちは普通のはみ出し者。あいつだけはエリートの世界からの異端児だからな。少なくともヤツは、俺なんかには腹の中までは見せない」

友達であることに変わりはないし、友情を疑ったこともないが、彼から悩みを打ち明けられたことは一度もないといった。

「あいつはプライベートを見せたがらないが、なぜか棟方にだけは、心を許してる印象があるんだが」

「その意味が、わしにはようわからん」

「そうか」

猿渡は少し考えて、

「じゃあ、おまえのアトリエに逃げ込んできたことはないか」

棟方の顔色が変わった。

「どういうことじゃ」

「あるのか」

「彼はそうはいわないんだが、わしは、そうかなと思うたことはある。そういう雰囲気は感じた」

「最近のことか」

「最近もじゃが、以前から、何回か」

「そうか」

棟方のことだから、身体を張って守ってやったのだろう。時には、自分が出て行って相手の前に立ちはだかったことだってあるだろう。

そういう男だった。

そこで猿渡は、今日の御茶ノ水との行動の一部始終を話したのだ。御茶ノ水を付け狙う胡乱な男たちと思っていたら、彼らは実は警察関係の人間だったことも。

「そういうことなら、わしじゃったら、直接その榊とかいう人に話をぶつけてみるがな」

親しいなら、単刀直入に尋ねてみてはどうかといった。いかにも実直な棟方らしい。

だが、猿渡は消極的だ。

「どうみても、あれは仕事だった。ヤツの職務の内容にかかわることを、いくら昔の知り合いだからといって、簡単に教えてくれると思うか」

仕事に必要なとなれば、状況に応じては合法非合法に関係なく大胆に行動する男ではあったが、同時に、職務とプライベートは、きちんと区別し、厳格にけじめをつける男でもあった。

「らしゅうもない」

猿渡らしくない言葉だと、棟方は一蹴した。やってみなければ分からないだろうと、取り合わない。

「猿渡さん、画伯のいうとおりだと思いますよ。榊さんといわれる方も、話せないことは話せないとおっしゃるものではありませんか。もし話しても差し支えないことなら、教えてもらえるでしょう。考える前に、まず照会されてみてはどうでしょうか」

芥川からも助言され、猿渡が折れた。

携帯を取り出して、まだ榊と親しくやり取りをしていたころに使っていた、警察庁非公開の電話番号をコールした。交換室内の特殊な電話番号であり、当時は、そこから当人にダイレクトに電話を送してもらえるシステムになっていたのだ。

「あ、榊紳一郎さんに緊急に連絡を取りたいことがあるので、転送をお願いします。わたしは友人の猿渡と申します。システム利用のパスワードを聞いておりますのでいまから申し上げます」

手帳の当該ページを開いて読み上げようとしたところ、  
「申し訳ございません」

彼はもう警察庁に籍がないと告げられた。退職したという。

「じゃ、現在の連絡先は？ 勤めてる会社は？ 辞める際に報告を義務付けているはずでしょ。その電話番号はわかりませんか」

矢継ぎ早に質問したが、承知していないという返事だった。

「わからないはずないでしょう。そういう組織じゃないですか。こっちは仕組みを知って尋ねているんですよ」

冷淡にされて、露骨に猿渡が怒りをにじませた。

「退職したからといって、どこで何をしてもいいという職場じゃな

いでしよう。いざというときは、当人に連絡できるようになってるはずだ」

泡を飛ばして詰め寄ったが、どうにもならない。申し訳ありません、わかりません、の一点張りだ。

「うそをつくんじゃない」

激しく怒りをにじませたが、どうなるものでもなかった。

「くそっ」

あきらめて携帯を仕舞った。

「知らないはずはないんだ。だが、教えてもらえなかったよ」

棟方も芥川も、様子ですべてを理解した。

「無礼な交換じゃな」

棟方が一緒に憤慨してくれた。

「こっちは古くからの友人だというのにな」

「うん」

慰められていると思うと、いらだたしきの行き場がなくなる。

「力になれなくて申し訳ありません」

芥川が、小さく頭を下げた。

「すいません。そろそろお願いします」

「おーい、そっち、準備はいいか」

いつの間にか関係者の数も増え、あわただしくなってきた。

テレビカメラも、電源を入れてスタンバイしている。

絵本のPRイベント開始が迫っていた。

「いや、こっちこそ、忙しいところに押しかけて悪かったよ。もし何か思い出したことでもあったら連絡してくれ」

棟方の肩をポンと叩いて、猿渡は丸善をあとにした。

「当分は、東京でホテル住まいだな」

ひとり決意したように呟いて、夕暮れの町並みに紛れていった。

(三)

榊から、猿渡の携帯に電話が入ったのは、その日の深夜だった。

「ハロー、兄弟」

懐かしい声が飛び込んできた。

「なんだ、元氣そうだな榊。警察庁、どうして辞めたんだ」

「辞めたといったか、そうか。所属が複雑になっていてな。そういえば、異動になったとき、辞表のようなものを書かされた気もするな」

謎めいた話で、猿渡には意味がわからない。

「久しぶりにおまえの声を聞けてうれしいが、ところで、どうしてこの電話がわかったんだ」

猿渡は、最近になって携帯の番号を変更していた。

「別にどうってことないさ」

「簡単なことだと笑った。」

「あ、あの交換の女か」

辞めたといっておきながら、交換機に表示された携帯の番号をちやっかりメモし、連絡したなと思った。

「そんなことより兄弟、相変わらずの活躍ぶりだな」

そのひとことで、あのビアホールでは、自分も榊に気づかれていたことを悟った。

「そうか。そういうことか」

電話の向こうで、わずかに微笑んだ気配があつて、

「うん。詳しくは説明できないが、そういうことだ」

「組織図に載らない部署か」

そういうチームがあるといううわさは聞いたことがあつた。表沙汰に出来ない情報収集が中心ということになっているが、実際には、何か特別な事情のある要人の警護が多いという話だったような気がする。

「なんでまた、そんなところに」

「うん。警察庁の先輩に頼まれてな。大恩ある人だったし、なにやり仕事がおもしろそうじゃないか。兄弟はおいらの性格をわかってくれているから、まんざら意外でもないんじゃないか」

そういわれてみれば、彼なら喜んで飛び付きそうな話だと思いはおした。情報収集にしても要人警護にしても、本当はSPをつければいいのだろうが、公式にそれができないといったケースは案外多いのだろう。

「キャリアだということ抜きにしたら、お似合いの仕事のようだな」

「おいらにとつては、キャリアもヘッタクレも関係ないのさ」

「おまえらしいよ」

話しながら、ふたりで飲み歩いた夜の街の思い出がよみがえる。

「仕事の内容を詳しく聞きたい気もするが、どうも、知らないでいた方が無難なようだな」

「ふっ、そのとおり。相変わらず鋭い」

榊は否定しない。

「ということは、今回は御茶ノ水の護衛かい」

御茶ノ水の研究成果流出を防ぐためなら、考えられることだ。

「うん。でもあの先生からの依頼じゃない」

「そのようだな」

「どうも迷惑そうで、ちょっと油断すると今日みたいに逃げられるのさ」

「なるほど」

話しながら、思わず吹き出しそうになった。

「上からの命令は、ひそかに守れというものなんだが、肝心の先生が協力的でないから困るんだよ」

第三者の目に触れないだけでなく、出来るだけ本人にも気づかれないようにしなければ任務が果たせない。

「御茶ノ水は、束縛されることがなにより嫌いな男だからな。ご苦労なことだ」

「兄弟から、もう少し素直になれと叱ってやってくれたらありがたいのに」

「そうになると、仕事が簡単すぎてかえって味気なくなってしまうんじゃないのか」

「なにを馬鹿なことを」

「いやいや、はは……。冗談はともかく、ヤツは異常に警戒心が強い男だからな。警察の人間だって、無条件には信用していないんだよ」

「警察を信用しないのか」

「じゃ、聞くが、警官なら無条件に信用して大丈夫かい？」

「それをおいらに聞くのかい。相変わらず意地が悪いな」

「ヤツはそういう男なんだ」

「そうか。ま、警察にもいろんな人間がいるさ。うかつに信用しない方が正解かもしれない」

どこまで本気かわからない。

榊は、ひとしきり猿渡に御茶ノ水護衛の苦労話を聞かせたあとで、「ところで、兄弟は囲碁の世界は詳しいかい」

猿渡が、現在は碁会所の席亭だと知って尋ねている。

「詳しいかどうかの基準がわからないが、これでも田舎碁会所の経営者だからな」

「兵江白竜位についてはどうだ」

「ちよっと待てよ。どういうことだ、兵江なら友人だが」

「なんだ、そいつは話が早い」

白竜位戦直前の失踪事件のことを調べているのだと打ち明けた。

どうして唐突に兵江白竜位の話になるのかわからなかった。

「あいつは、失踪したんじゃないかと誘拐されてたはずだぞ」

思わず声を荒げた。

「見方によつてはな」

友は、動じる気配もない。

「どういうことだ」

猿渡は、そこからはもう電話では済まない話だと悟った。

「いま、どこだ。出て行くよ」



「そうこなくっちゃ、兄弟！」

「おまえ、もしかして国防がらみの仕事をやってるのか」

友情を確かめるように強く抱き合ったあとで、猿渡は切り出した。「国防は自衛隊だろう。おいらは警察の人間だよ。なんでそんな憶測をする」

さぐるように、婉曲に返してきた。

「いま、御茶ノ水と兵江とに共通するキーワードを考えたとき、俺の知る限りでは、どうも、相手は某国の諜報機関……ということになるんだよ」

そう聞いて、榊は眼を見張った。

「兄弟、相変わらずだな」

「凶星か」

「さあな」

困ったような顔だ。

古い友人の変化を、猿渡は敏感に察知した。

「おまえ、今夜こうして出てきたのは失敗だったな。どうだ」

見透かしたような挑発に、つい、

「そんなことはない。兄弟の姿を見かけたのは確かに仕事中的ことだったが、おいらが会いたいと思った気持ちに偽りはないのさ。元氣そうでなによりだよ。おまけに、相変わらずの切れ者ぶりで、安心したよ」

瞬間的に反発したのか、逆に、率直に本心を吐露したのか。

だが、少なくとも、途端に口が重くなつたのは事実だった。しばらくは、さしさわりのない昔話などで話題を繋いでいたが、

「榊よ。やはり、出てきたことを後悔している顔だな」

「なにを馬鹿な」

「いや、顔に書いてある」

「そんなことはないさ。考えすぎだ。昔から兄弟は、裏の裏を読みすぎる悪い癖がある」

「そうか。それならそういうことにしておいてもいいが」

こだわらない姿勢を見せて、

「兵江については、実は俺も気になることがあるんだ」

ここは、隠しても始まらないと思った。

「だが、彼が拉致されたことだけは事実だぞ。自分から失踪したわけじゃない」

「そこまでいうなら聞かすが、腕を折られたという話が嘘だというのは知っているのか」

「ああ。今日、ヤツを病室に見舞ってきた。ぴんぴんしてたよ」

「では、フアンドのことも？」

「聞いた。しかし、経済情報を取るために誘拐を考える人間はいない。拉致した本当の理由がわからない」

「なんだ、兄弟もわからないのか」

「兵江は、監禁場所を移される途中で逃げたといっていた。その言葉に嘘がないとしたら、新たに連れ込まれようとしていたところこそが、拉致本来の目的の場所ということかなと思うんだ。そこで彼をどういう運命が待ち構えていたのか」

「それはどこなんだ」

「目隠しをされていたし、途中で逃げたから見当がつかないが車で運ばれてたというから、そう遠くじゃないだろうな」

「役に立たない推理だな」

「まあな」

「お返しに、おもしろい話をしようか」

榊が不敵な目をした。

「実は、彼がいた部屋を見張っていた」

「なんだと」

「正確には、目視じゃなくて、計器的にだが」

隠しカメラか、盗聴器の類なのだろうか。

「気になったのは、彼は逃げようという気がないように見えたことなんだよ兄弟」

「まさか」

「それが、おいらには、そうとしか思えなかった。逃げたいと思ったら、そのチャンスはいくらでもあったよ。だけど逃げない。変な男じゃないか」

だとしたら、確かに拉致事件とはいい難いだろう。

「勘ぐり過ぎじゃないのか。実際、自力で逃げ出したわけだし」

「それはそうだが、なぜ逃げなかったのか、なぜ今回、逃げたのか。おいらにはさっぱり得心が行かないのさ」

嘘をついてるとは思えなかった。では、榊の話が本当としたら、

兵江はなぜ逃げなかったのだろう。

「少なくとも、相手を恐れている様子は、まったくなかった」

なぜだと思ふかと、猿渡にヒントを求めている。

確かに兵江は少林拳の使い手ではあり、恐れる気持ちなどなかったことは考えられる。だが、逃げるチャンスがあったのに逃げようとしなかったという話が本当だとすると、これは解せない。

「連中の背後に……。見張り役や、毎日のように電話をかけてくる男の背後に、何か感じるものがあったのかな」

「兄弟もそう思うかい。おいらも、ヤツは犯人に心当たりがあるんじゃないかと感じて仕方なかったんだよ」

榊の声が弾んだ。

「仮にそうだとしても、見当がつかない」

荒涼とした迷路に迷い込んだような気分だ。

猿渡は思い出したように、

「ところで、妙な雑誌の編集者が、海に浮かんだとかいう話は聞いてないか」

思い切って、山県のことを聞いてみた。

「なんだそれ、知らんな」

「本当か」

「身元不明のほとけが海で見つかったという情報があるかどうかなら、調べてみればすぐにわかることだよ」

そういうと、携帯電話を取り出してなにやら操作を始めた。いまどきの携帯にしては少し大きめで、いかついデザインだ。

「うーん……。最近は、そういう報告はないようだな。厳密にいうと、何月何日以降のデータを調べたらいいのかな」

「白竜位戦第六局が予定されていた日、以降だ」

「なんだと」

榊が、低い声でうめく。

「実は、近代科学という月刊誌の記者で、山県という」

かいつまんでいきさつの説明を始めると、途中から訳知り顔で何度かうなずいていたが、あらかた聞き終わったところで、

「その山県なら、死んではないいな」

猿渡に向き直ると、キツパリと断言した。

「知ってるのか」

「おいらの思っている山県なら、正規の訓練を受けた凄腕の作業員だよ。濁流に飲まれたくらいで、ヤツがくたばるものか」

こともなげにいつて、

「生まれは日本。出身は、瀬戸内県だったはずだ」

「本当か」

今度は、猿渡が絶句した。

## 役者は舞台を降りた

(一)

神と久しぶりに会って奇妙な話をした東京滞在から、一週間ほど経った日の夕方のことだった。地元テレビは、ニュースの片隅で、奥花町役場建設課長、立花光太郎の自殺を短く報じた。自宅裏の倉庫で、首をつつたという。ちっぽけな扱いのニュースだった。猿渡は気づいたが、ほとんど誰の目にもとまることなく、人知れず流れて消えたニュースといえた。新聞はというと、夕刊でも、翌日の朝刊の地元コーナーでも、立花の自殺に関しては、何ひとつ伝えてはいなかった。

「いつもこうだ」

猿渡は、朝から不機嫌だ。

町役場の職員がかかわったセンセーショナルなニュースは、当局にしてみれば、できたら派手には扱ってほしくない。さりげなく、少しでも早く収束させたい。ましてや、職員の自殺だ。

その気持ちはわかるが、安易に要請に応じる報道の姿勢について、それでいいのかという思いがある。

もちろん、新聞社もいろいろだ。彼自身、県庁職員時代には、記事にしないで欲しいと頼みに編集部を訪れたことがある。背中にはお役人の威光をちらつかせながらだ。そのときの編集長の対応は、いま思い出しても立派だったと思う。

「記者たちは、いわば猟犬です。その猟犬たちが苦勞して集めてきた記事をゴミ箱に捨てるとは、私はよう命じません」

見事に断られたわけで、自分は結局、子供の使いにしかならなかったが、帰り道の気分はそんなに悪いものでもなかった。だが、そんな侍タイプの編集長ばかりではないのが現実だということも知っている。

立花の部下だった秋友京一が、知事室副参事の脇坂圭子に連れられてドラゴンを訪ねてきたのは、それからまた数日後の昼のことだった。

「はじめまして」

秋友は、最初から深刻そうな顔をしている。

「以前に市町村指導の仕事をしたところ、秋友くんにはお世話になったの。その彼から相談を受けたんだけど、どうもわたしの手には余る話のようだからお連れしたわ。力になってあげて」

「知ってるかい？　そういうのを、丸投げというんだよ」

無遠慮に言葉を吐いてはみたが、傍らの秋友の深刻そうな様子に、

あわてて居住まいを正した。

「そういう相談なら、ここはお門違いじゃないかな。事件のことは警察が本職だろう」

「だって、その警察が自殺だといってるわけだし。警察には相談できないでしょ」

「すいません。誰に聞いてもらえばいいかわからなくて。それで脇坂さんに相談したんですけど……」

秋友は、小さくなって頭を下げた。

「結果的に力になれるかどうかは置いて、まずは、話だけでも聞いてあげたらどうなのよ」

ここまで案内してきた手前、女史も容易には後に引かない。

「わかったよ」

話を聞くだけなら聞いてみて、それから考えればいいかなという気になった。

「いや、失礼。それで、今日はどう……」

聞けば、警察は立花課長のことを自殺と発表したのが、個人的には、どうも釈然としないのだという。

「じゃ、その理由を、もう少し詳しく話してもらえますか」

「はい」

秋友は、立花の役場での仕事ぶりや、立花が雑談の形で彼に時折もらしていたことを、ポツリポツリと語りはじめた。

「実際、仕事をやっていて、悩みがないなんてことはありません。住民の皆さんからの苦情にしても、どうにか対応してあげたいと思っても、聞けるものと聞けないものがあります。出来ないものは出来ません。だからといって、そんなことで悩んで自殺してたら、役場には職員がいなくなってしまう」

立花は、災害復旧工事の箇所決定、実施設計から入札までという複雑で困難な仕事を、通常業務に加えて任されていた。だが、職場では冗談もいい合い、秋友とは白竜位戦の前夜祭の話題でも盛り上がったという。

「トラブルに巻き込まれてもがいていたとか、精神的に追い詰められていたとか、そういったことは感じなかった？」

猿渡の頭の中には、立花と山県との一件があった。立花にしたらず、忘れようとしても忘れることのできない深刻な出来事だったはずだ。

「そこまではわかりません。誰だって、疲れれば、ひとりになりたいうこともありませし、黙り込んでいたときもありますから」

「うーん」

それら断片的な話だけでは、情報が、まるでヤギの糞のようにポロポロと転がるばかりで、一本に繋がらない。これでは、秋友の疑念に答えようがなかった。

「わかったような、わからないうような話だな。もう少し役場での仕事のことや、立花さんの最近の様子が知りたいな。そういうことは、町長に聞け、かな」

「そうですね。了解です。いまからすぐでもいいですか。わかりました。じゃ、アポを取ります」

そういうと、秋友はさっそく自分の携帯を取り出して、町長に直接コンタクトを取っている。

「あ、秋友です。知事室参与の猿渡さんといわれる方が、町長にお話があるそうなんです。いまからお連れしてもいいでしょうか。え、忙しい？ 実は、立花課長の一件で少し込み入った話があるとおっしゃってるんですけど」

逃げを打ちかけた町長を、立花の名を出して強引に引き止めた。

「ええ、そうなんです」

猿渡を振り返って、得意そうに白い歯を見せた。

電話の向こうで当惑している様子が、嫌でも伝わってくる。

「そうです。ですから、もし時間調整できるようでしたら、ええ」重ねて、応じるようにうながしている。

「あ、オーケーですか。わかりました。そう伝えます。それでは、お連れしますから」

不敵に笑って、携帯を切った。

「おいおい、俺はもう役所の人間じゃないし、知事室にいたことはあるが、参与でも参事でもなかったぞ」

「え、僕、元知事室の元副参事っていわなかったですか」

秋友は、決してペースを乱さない。  
「お前なあ、切れる男だということとはわかる。俺は評価するけど、しかし、このまま役場にいても、ろくなことにならないと思うぞ」

親切で心配してやると、

「町長は、そのうちに変わりますから。僕みたいなタイプを気に入ってくれる人が町長になるのを、待てばいいんです。結構、僕は期待しているんです」

「そうか。なるほど。大したヤツだ」

こんなふうな神経を持っていたら、自分も公務員を辞めることはなかったかもしれないと、そう思った。

だが、どっちの道を選んだら自分らしく歩けるか、本当の答えは結局は藪の中だ。

役場に到着すると、玄関まで町長が迎えに出てきていた。

「やあ、どうも、どうも」

秋友からの電話口では渋っていたと思っただが、これはまた、どういう風の吹き回しだろうか。

「お待ちしておりますよ」

懇懃に腰を屈め、自ら町長室まで案内すると、

「まあ、どうぞ」

一同にソファアールを勧めた。

「はじめまして」

脇坂圭子が名刺を出そうとしたので、あわてて町長も懐から名刺入れを取り出した。うやうやしく両手に捧げ持ち、猿渡と脇坂に渡すと、

「まあ、なにですわな」

応接テーブルの下から煎茶セットを出して、道具を並べ始めた。

「優秀な職員じゃったので、期待しとったのですが」

人数分の小さな茶碗と、少し大きい湯ざましに、傍らのポットから湯を注いだ。熱湯を少し落ち着かせるのと同時に、茶碗を温める意味がある。

「このたびの災害で、いろいろ無理もゆうて飛び回ってもろうとりましたが」

茶壺を持って、傾け、回すように転がしながら、竹の仙媒に葉を移した。ほどよい量と確認して、泡瓶ほうびんに入れる。泡瓶というのは、要は急須のようなものだが、注ぎ口があるだけで持ち手はない。茶器の両サイドを、親指と人差し指とで支え持つ。

「自殺といわれても、正直、わっしは信じられない思いがしとるんです」

茶碗の湯を順々に泡瓶に移しながら、ぽつりぽつりと心情を語った。

「警察は、まあ、自殺と発表しましたが、遺書があったわけでもなく」

ひと呼吸おくと、並べた茶碗に、仕上がった茶を、往復させながら注いでゆく。

意外なほどに、量は少ない。

「さ、どうぞ」

「あ、いただきます」

口に含むと、茶独特の香りと不思議な甘みが、口から胸いっぱいに広がった。

町長は、泡瓶に湯ざましの湯を足した。淡々と飲み干し、茶托に置こうとした猿渡の茶碗に、

「どうぞ」

そつなくお代わりを勧める。

「あ、これはどうも」

「まあ、なんと申しますか、残念としかいいようがない」

「そうでしょうとも」

ここは猿渡も話を合わせた。

「しかし、見事なお手前で」

「いやいや、ご冗談を。はじめは先輩から手取り足取り習いましたが、いまはもう、そういうのは馬鹿馬鹿しくて、すっかり我流で」作法は学んだが、楽しんでるうちに、作法にこだわる気持ちは消え失せたのだと笑った。

「町長さん、立花さんの当面の仕事は、やはり、災害関係が中心だった、ということになりますか」

「わかりません。自殺の理由をお尋ねなのであれば、わかりません人間が自らの命を断つという背景には、それなりの理由があると思いますよ。彼には、確かに無理も頼んでおりましたが、役人である以上、越えてもらわねばならんレベルの話だと思っと思っていますし、彼にとっては、それは、さほど難しいこととも考えてはおらなんでしょう」

町長はここで背筋を伸ばし、猿渡を正面から見据えた。

「秋友くんから連絡をもらって、みなさんがこられるまで、まあ、わずかな時間しかなかったわけですが」

訥々とはあるが、しつかりと自分の言葉を繋ぐ。

「わっしも瀬戸内県庁舎の中には気の置けない幼なじみもおったりしますものですから。電話一本で、ある程度の情報は入るようになってるんです」

ここで視線を床に落として、

「失礼じゃが、猿渡さんのことは少し調べさせてもらいました」

「そうですか」

もう、お前の正体は、ばれてるぞといっているのだ。

予期しなかったことではないが、ここは笑うしかない。猿渡は、なんとも複雑な笑いを浮かべて、黒畑の次の言葉を待った。

横で脇坂女史が困った顔をして、無理に微笑んでいる。

「それで、昔の話や、人となりと申しますか、ま、そうしたことを多少、その、なんですわ。ま、世間のうわさですな。そういうものを聞いてみたわけです。それで、猿渡さんを見込んで、これはちょっと踏み込んだお話をさせてもらおうかなと、そういう気になったわけです」

「買い被られても困りますが。でも、町長さんとの面会は私が望んだことですから」

本音の話をすることに、異存などあるはずもなかった。

「実はわっし、立花課長にはちよつと強引な仕事を命じておりました。猿渡さんもお役人時代には経験されたかと思いますが、よくある……」

どうだ、という顔で猿渡を正視した。百戦錬磨の政治家の顔だ。

わしの言葉の真意が読めるか……。



町長は、そんな顔をしている。

「私が経験した？」

予想外の緊張に襲われて、

「うーん、どういうことでしょうか」

猿渡の時代は、地域の課題といえば基盤整備だった。それと、地方の時代を担う職員の資質の向上。このふたつと決まっていた。

「地域のためになるなら、たとえばその事業によって郷土のインフラ整備の遅れが少しでも挽回できるなら、私も、ひとつ間違えればボールと判定されかねないような際どい球を、ギリギリでストライクゾーンに入っているように見せるくらいのも真似なら、何回か、やったかもしれないが……。いや、もう昔のこと。忘れてしまいましたよ」

町長の話は、道路や体育館、用地造成など、様々な公共事業の、その事業申請のことではないかというのが読みで、それを前提にして答えてみたのだった。

国での説明次第で、事業補助が取れるか取れないか、さらには、財源としての地方債の発行が認められるかどうかがわかる。ひとつ間違えると、持参した膨大な申請書類そのものを持って帰れといわれてしまうのだ。無理にでも申請書を置いて帰ることができてはじめて、政治的判断という領域に持ち込める。官僚に書類を受け取らせるためには、必ずしも曲がった話ではないということの説明し、納得させなければならぬ。ギリギリではあるが、少なくともストライクゾーンには入っていますよと、そのところの論理的な説明が必要になる。ここは、子供のお使いでは許されない。

「そうでしょう、そうですね」

町長は、我が意を得たりとばかりにうなずいた。

「ですから」

役場の中には、『町長が立花課長を殺した』という職員もいるが、それは違うと思うといった。

「わっしは、彼を、死なねばならんほど追い詰めたとは思っておりません」

「なるほど。町長さん、私もそう思います」

猿渡の気持ちに偽りは無い。

「災害が起こると、役場はどうしても忙しゅうなります。通常業務の上に、新しい仕事が増えてくるわけですから」

立花の業務量が増えたことは否定しない。

「まったくです。それは我々も同じでしたね」

「いや、役場の場合は、箇所数が比較になりません」

小さな被災箇所が多い。壊れたところ全部には、到底手が回らないと力説した。

「そうになると、ずばり、災害待ち、ですか」  
無遠慮に切り込む。

災害待ちかと問われて、黒畑は絶句した。

町長が立ち往生したふうなので、猿渡は言葉を繋いだ。

「というのも、大蔵省の財務部といっしょに、災害箇所の現地調査に市町村を回ったことがありますから」

そこで、いろんなものを見たのだといった。

黒畑は、意を決したように、

「そこで、その、貧乏役場の災害待ち政策、を見られましたか」

「はい」

にやりと笑った。

「確かに道路が崩れている。崩れてはいるが……」

と、ここでいいよんだ猿渡に、町長は、うんうんと何度もうなずき、どこの自治体でも、考えることは同じだといった。

「貧しい町が、生きていくための知恵です」

黒畑の言葉に、

「私も勉強させていただきましたよ」

うかつに相槌は打てない、きわどい話だった。

「我々は、自分の責任で、ギリギリのところまで勝負しとります」

猿渡の腹の底を探るように、黒畑が、にやりと笑った。

「まあ、基本的には、国と地方とは、互いに信頼関係に基づいて仕事をさせてもらうてますからな」

微妙な言い回しで、真意を悟れといている。

「あの、よくわからないんですが……」

秋友が、おずおずと発言した。

「なんじゃ、ゆうてみなさい」

「はい。災害も、国庫補助事業に採択された場合は、補助金も入るし潤うのはわかるんですが、小規模な、ただ地方債の発行だけが認められる事業では、結局、町が借金を返済するわけで、あまりうまみがないというか、災害待ちまでして対応する意味がないように思うのですが」

率直な疑問を吐露した。

「そうかな」

黒畑はそういって、猿渡を見た。

説明してやってくれますか、という顔をしている。

猿渡は目であなずいて、

「小規模災害復旧事業には、確かに、補助金は交付されない。地方債を起こすことが認められるだけだよな。だけど、この起債の償還金は、交付税に参入されるんだよ」

そこまで聞いたところで、秋友は、あつという顔をした。

「補助金のあと払い、ですか」

「うん。事実上の補助金の、これは分割払いだな」

細かいことをいうと、補助災害の対象になった方が有利なのだが、補助対象にならなくても、災害復旧工事と認定されれば、それはそれで、地方自治体にとってはおいしい制度なのだと説明してやった。猿渡は黒畑に向き直って、

「ま、そういう話は、私にとっては、昔のことです」

行政の、いろんな顔を見せてはもらったが、それらは、いまの自分にとっては関係のないことだった。

「ただ、少なくとも当時は、みんな、どうすれば郷土のためになるか、そういう視点ではものを考えていたような記憶があります」

「そうでしょうとも」

しきりにうなづく黒畑だが、

「しかし猿渡さん、いまはそうじゃない」

キツパリと断言した。

「変わりましたか」

「変わりました。新人もベテランも、頭の中身は若造ばかりで、子供の使いのような仕事しか出来ません」

「そうですね。ま、そういう兆しは、私が役所にいたころから確かにあったかもしれませんね。志、明確な人生観、審美眼的な価値観を持った人間が、議論の場では時代遅れの人間のように扱われ、疎んじられるといった……」

「わっしからいわせれば、職員みんなが、いまは、サラリーマン化しとりますよ。使命感なんかない」

「使命感ですか。それが、時代を分けるキーワードかもしれませんね」

「話が大きくなりますが、戦後日本の復興を支えたのは、申し訳ないが、政治家ではありませんよ。官僚ですよ。彼らが諸外国と実質的に渡り合い、同時に政治家の顔も立て、日本丸の舵を取ってきただんです」

「まさに志。使命感に支えられて、ですか」

「そうですね。その、世界に誇るべき優秀な官僚たちでさえ、いまは腐敗して悪臭を放つとる。みんな、自分の身の回りのことばかり考えとるように見えますよ」

世の中が、すっかり変わってしまったのだという。

ふと気がつけば、黒畑の顔はかなり紅潮していた。

「こんなわっしでも、町の将来のために仕事をしとると思うから、少しくらい危ない橋も渡ります。あ失礼」

「いえ」

ここは、笑って聞き流すしかない。

「ルールがどうあれ、わっし自身は何ら恥じるところはありませんですよ」

「ご自身のルールに照らして恥じない」と

「偉そうにいわせてもらえば、人間としてのルールですな」

災害現地調査の昔話が、いつの間にか、人生論に変わっていた。

「まあ、そんな町長さんの思いは、立花さんくらのキャリアがあれば、痛いほど伝わっていたことでしょう。多少の無理を命じられ、そのときは一時的にまいったなどは思ったとしても、そんなことは、自殺の理由にはなりませんよね」

「そう思いたい」

うなずきながらそういつて、

「ですが、そこから先は、わっしにもわからない」

黒畑は、ふうとため息をついた。

「人は、多少大きなストレスを抱え込んでいても、それだけではなかなか死にたいとは思わないものだが、そんなストレスがいくつかさ重なると、そのときは危ないそうですね」

自分の責任も、まったくくないというわけではないと自覚している。

「問題は、そうした大量の仕事と並行して、彼がどういうトラブルを抱えとったか」

何もなければ、誰も首は括らない。

「そのことについては、町長さん、何か思い当たられることは」

猿渡が核心に触れると、力なく首を横に振り、うつむいてしまった。

「そうですか」

町長の肩越しに、藍染めされた町民憲章の暖簾が、壁にピンで貼られているのが目に入った。

「健康な町を作りましょう」の文字が哀しい。

「秋友くん、交換の山瀬さんと呼んでくれんか」

思いついたように町長が顔を上げた。

「最近、どういう電話が、立花課長にかかってきていたか、聞いてみましょう」

呼ばれた交換手の山瀬美智子は、なれない町長室で戸惑いながらも、

「立花課長さんに繋いだ電話が、どこからかかってくるものかまではわかりませんが、お繋ぎしたとき、課長さん、電話口で、なんとなく困っておられたような印象を受けた電話がありました」

「そうか、その相手、まさか古谷野先生じゃ」

「いえ、もっと若い感じの方でした」

「そうか、わかった。もういいよ。仕事に戻っていい。ありがとう」

少しだけ、ほっとした感じで、ソファ―に全身を沈めた。

「はは、安心しましたよ」

残った茶葉をこぼしに移して、新しい葉を入れようとしている。作法に従いゆっくりと注ぎ落とされた茶葉の香気が、よく焼きしめられた備前焼の建水けんすいから、ほのかに漂い、湯気とともに昇ってゆく。

「気にはされてたんですね」

「もちろんです。確かに、わっしも無理を頼んでおったわけで」

素直に人間味を吐露してみせた。

「わかりました。今日はありがとうございます。まだはつきりとは申せませんが、私に思い当たることがないわけでもないのです」

猿渡は、風天閣での山県記者の一件を脳裏に蘇らせていた。

風天閣で出会った役場の男が、どうやら立花と思われた。

「もう少し調べて、はつきりしたら秋友くんを通じて町長さんにも報告させてもらいますよ」

それで、立花課長の死についても、その真相を明らかにしたいと思ふのだった。

「ひとつだけ、お聞きしておきたいのですが」

立花が、ショベルカーで石崖を崩していた話を、町長にぶつけてみようと思った。

「被災箇所を役場の方が広げるなんてことって、ありませんよね」

「なんですと」

黒畑町長は目をむいて、以後は押し黙ってしまった。

「見たという人がいるんですがね」

自分としては何かの間違いではないかと思うが、見た人間は、見間違いなどではないというのだと。

重ねて問いかけると、

「立花課長が、まさか国の補助をとるために、被害箇所を広げていると？」

低い声でうめいた。

猿渡も、ありえないことではないと疑っている。

「あのう……」

秋友が、遠慮がちに口を挟んだ。

「その現場って、どこでしょうか」

「地名までは聞いてないが、川沿いの大きな倉庫の裏側の……」

ごく大まかに聞いた場所を話すと、  
「ああ、その箇所なら、二次被害防止のための措置だったと思います」

ポケットから手帳を出して調べていたが、やがて、

「間違いありません」  
笑顔でうなずいた。

「そうか」

黒畑はうんうんと自分で納得しながら、ほっとしたような表情になった。

「二次被害、防止、ですか」

まだ怪訝な顔の猿渡だが、

町長は元気を取り戻していた。

「わかった。秋友くん、そうだよな」

そのまま放っておいたら、いつ崩れてくるか知れない危険箇所は、人間の手で崩しておかないと危ないのだった。場合によっては、まだ石が動いてなくても、周囲との関係で、外すべきとの判断が出ることもあるという。

「知らない人間が見たら、どうして崩してるんだろうと不審に思いかもしれませんね」

猿渡がうなずくと、

「変に知識がおありの方は、余計、疑いますわな」

ほっとしたように、町長も応じた。

「わかりました。ま、立花課長さんのことについては、おいおい、明らかにしていくつもりです。はっきりしたら必ず報告すると、お約束しておきます」

猿渡は、丁寧に頭を下げた。

かすかにだが、疑っていたことを申し訳なく思う気持ちもあった。

「そうですか」

仙媒せんばいに付着している緑の粉を袱紗ふくさでぬぐいながら、

「わっし、猿渡さんとはもっとお近づきになりたい。用事がなくても、どうぞまたいらしてください。そうだ。今度の町民文化祭に招待しますよ。秋友くん、覚えておいてくれよ」

最近は、大事なことは必ず誰かに頼んでおかないと、すぐに忘れてしまうのだとこぼした。

町長の言葉尻を掴んで、

「昔は私も、メモをしている人を見ると『メモなんかするから、それで安心して忘れてしまうんだよ』と忠告してやっていたものですが、最近、私自身が、必死でメモをしまくってますよ」

大いに同調すると、

「いやいや、ようわかります」

うれしそうに首を振って、

「わっしなんか、悪筆じゃから、メモはしても、自分が書いた文字が読めん、意味がわからん」

そこまでいって、豪快に笑いながら腰を上げ、猿渡に握手を求め

てきた。

(二)

「町長さんの話は興味深いものがありましたし、立花課長さんにも何やらむずかしい宿題を出されていたようですが、町長さんもおっしゃられていたように、自殺と結びつくほどの問題とも思えない気がしましたね」

有意義ではあったが、実質的には、ほとんど空振りに近いと感じていた。

「そうになると、立花さんの奥さんにも話を聞いておきたいです。秋友くん、段取りをお願いできますか」

数日後、猿渡は秋友を伴い、立花の妻を訪ねたのだった。

「白竜位戦の前夜祭に、ご主人は町長さんの代理で出席されたんですよね」

「はい。光栄なことだと喜んでおりました」

そう答えると、手にしたハンカチを目頭に当てた。

「セレモニーが終わったら、まっすぐにご自宅に帰られたのでしょうか」

「せっかく有名な人たちに会えるんだからと、終わりまで会場にいるつもりだといって出掛けたんですけど、町長さんのあいさつを代読してしばらくしたら、役場から携帯に電話が入ったようでした。あわてて帰ってきて、現場を回らないといけなくなったからといって、作業服に着替えて」

「そうですか。それは残念だったでしょうね」

話はつじつまが合っているなと思う。

「で、それから、ご主人の様子に何か変わったことはありませんでしたか」

そう尋ねると、妻の顔色が変わった。

「その日は帰りが遅くなったようで、わたしは先に休んでいましたのでよくわからないんですが」

翌日の朝は、押し黙ったまま食事をしたという。

「どうかしたのかと聞いても、何もいわないで」

猿渡は、その日、役場ではどうだったのかと秋友を振り返った。

「意識して平静を装っておられたのかどうか、白竜位戦の当日はお互い冗談もいいましたし、特に気づかなかったんです。でも、それから何日か経つと、ふと見ると、課長がじっと一点を凝視して、何か考え事をしておられたりすることがありました。いま、奥様の話を聞いて、そうか…と思いましたよ。立花課長、うーん、やっぱり様子が変だったのかなあ」

いまのままでは自殺だったかどうかまでは判断のしようがないが、仮に自殺だったとしたら、それなりの理由が必要である。

猿渡は、それを探していた。どんなストレスを背負わされると、人は死を選択するのか。

考えられるのは、たとえば、脅迫だ。

「立花さんあての電話で、誰かが死んだ……みたいなやり取りを耳にしたことはない？」

秋友に水を向けると、

「え？ 誰か亡くなっただんですか？ そういうのは聞いたことがありません」

ただ、一度だけ、温厚な立花が電話口で声を荒げたことがあったという。

「あるとき、”わたしも見ましたよ”と、強い口調で話しておられたんです」

居直って、逆襲に出ている感じだったらしい。

「なるほど」

とてもケンカにならない強大な相手に向こうに回して、こっちも白竜位を連れ去るところを見たぞと、螻蛄の斧を振り上げてみせたのか、と思った。

山県は死んではいないな。平然とそう断言した榊の言葉が、あらためてよみがえってきた。だからこそ、他の記者たちと同様に山県も、翌日にはチェックアウトした形をとったのだろうか。そうしておけば、山県は目立たない。消えたのは、白竜位だけということにしておけばいいのだ。

猿渡の脳裏には、電話をかけてきている男の背後で、細かな指示を出している山県の姿が浮かんでいた。

「どうも、亡霊が暗躍しているようだな」

誰にともなく呟いた。

「正直、課長が自殺したと聞いた時、僕は信じられませんでした」

秋友は、まだ立花の自殺は受け入れられないようだ。そんな弱い男ではなかったといっている。

「奥さんはどう思われましたか」

「わかりません。ただ、家では、以前とは別人のように沈み込んでいました。ですから、警察から自殺ですと説明されたら、そうなのかと思います」

「そうですか。いや、ありがとうございました」

立花の家を辞すると、すぐに秋友が話しかけてきた。

「役場では平静で、いつもと変わらないようにふるまっておられたのに、課長、ご自宅では本心を出しておられたということなんですよかね」



「辛かったんだろうな」

「前夜祭の最中に、災害の危険個所の連絡が入ったんでしょね」

「例の、二次災害防止措置の指示か」

「それもあつたでしょうが、そればかりではないと思います。細かい箇所を含めて、いろいろありますから」

町民から通報があれば、役場としては放置してはおけない。

「業者にやらせたらいいんじゃないのか」

シヨベルカーを動かすような作業は、役場の職員にはなじまない仕事のように思えた。

「契約をしないと、業者は動かさせませんから」

箇所を定め、設計書を示して入札し、落札にまで至らないと施工業者は決まらない理屈だ。

「なるほどね」

「昔は、先に仕事をさせて、あとから日付けを遡って契約の書類を作ったりしてましたが、もう、そういうことは許されない時代になりました」

工事は入札によって行うのが原則で、入札によらない随意契約は、簡単には認められない。もちろん、緊急やむを得ない場合は制度上は随契も許されることになってはいるのだが、世の中には政治的な意図を持ってテレビを通じて批判したりする人たちもいることから、一般住民の間に無用の誤解を生まないようにする意味からも、ただ単に、緊急であれば随意契約をすればいいというわけにはいかないのが現実なのであった。

「それで、かえって、間に合わなくなったわけだ」

「だからといって、放置してはおけませんから」

結局、第一線の人間に、何かとしわ寄せが及んできているのだった。

「町長さんや奥さん、それに君の話聞いてみて、いろんなことがわかった。少し、頭の中を整理してみるよ」

山県の一件では、立花はさぞかし悩み苦しんだろうが、途中からは気丈に反撃に出ているのだ。そんな男が、簡単に自殺するだろうか……。

それに、榊がいうように、山県が生きているという前提で考えれば、山県にしてみれば、立花は自分が濁流に流された際にもめていた相手だ。ひとつ間違えれば死んでいた。お門違いとはいえ、湧き上がる怒りもあつたかも知れない。

秋友と別れたあと、これはどうしても警察から話を聞いておく必要があると思った。そうになると、頼りになるのは榊だった。

考えてみれば、頼みごとがあるときにしか連絡をしないなど自嘲の笑みを浮かべながら携帯を操作した。相手はすぐに出た。

「おう、元氣か、俺だ」

さすがに、いきなり用件には入りにくい。

「何だ、兄弟。らしくもない頓珍漢なあいさつなんかして。何の用だ」

榊の方が、わかってくれている。用件だけ、さっさといえと。ありがたい友だ。

「悪いな。すまないが、こっちの県警に口を利いてくれないか」

「何を頼みたいんだよ、兄弟。自首でもするのかい」

「馬鹿をいえ。世界の聖人君子たちから頭を下げられるほどのこの俺が、何で自首なんかするんだ。いや、鑑識に話を聞きたいことがあつてな」

もう、普段のペースに戻っている。

「おっと、聖人の頂点に立つような尊いお方からの依頼なら、罪深いおいらとしては断るわけにはいかないってことかな」

「無理を聞いてもらえるか」

「うまくことが運ぶかどうかは保証しないよ。それでもいいかい」

「ああ、繋いでおいてもらえたら、あとは俺がやる」

「そういうことなら、兄弟と知り合ったと同じころ、親しくしてたのがひとりいるよ。ちよつと変わり者なんだが、鑑識の腕は一級品だ」

榊から紹介された溝曾路みぞろ佐吉という男を猿渡が訪ねたのは、その翌日のことだった。

「あ、溝曾路です。猿渡さんですか。昨日、榊先輩から電話でお伺いしております。どうぞこちらに」

通されたのは、オープンスペースにデスクとロッカーが配置された、広々とした部屋だった。

「お世話になります。いや、鑑識の皆さんというのは、もつと狭いところにおられるのかと思ってましたよ」

「そうですか」

溝曾路は穏やかにうなずきながら、

「でも、猿渡さんの予測は、ほとんど当たってますよ。ここにいるのは着替えるまでですから」

実際の仕事場は狭い証拠保管室だったり、現場に出れば地面や床に這いつくばってばかりだと笑う。

「なるほどね」

言葉を交わしながら、この男のどこが変わり者なのだろうかという気がしていた。常識的な対応も出来る、ごく普通の性格のようで、とても偏屈には思えない。

「さっそくですが……」

猿渡は、立花課長が自殺したとされる現場の鑑識結果について教

えてもらいたいことがあって来たことを告げた。

「あの事件ですか」

わずかに男の表情が曇る。

「立花さんの首に回されていたロープには、ご本人の指紋は付いていたんでしょうね」

「もちろんです。輪の両サイドに、くつきりと」

くつきりと、と吐き捨てるようにというのが気になる。

「足元に倒れていた脚立には？」

「脚立からは、明確な新しい指紋は取れませんでした」

斜め上を見上げ、中空を睨むように答えた。

「それでも、自殺ですか」

「私は鑑識課の人間ですから。判断するのは刑事課の仕事です」

ただ、刑事課でも議論が交わされたようだという。立花が、ためらいつつ時間をかけて準備をしたとしたら、脚立を置いたときには、軍手のようなものはめていたことも考えられる。また、アルミの構造上、負荷がかかる部分には凹凸がつけてあり、指紋が付きにくいということも考慮されたようだという。

「司法解剖にまわせば、はつきりしますよね」

「おっしゃるとおり」

溝曾路のものの言い方が、多少、ぶっきらぼうになってきた。

「で、司法解剖には」

「まわしておりません」

「それはまた、なぜ」

男が眉間に深い皺を刻んだ。

「おたく、日本中に解剖医が何人いるか、ご存知ですか」

「いや」

「一年間で、全国の警察が取り扱う変死体は、データをやり始めた平成十三年は、約一万九千体でしたが、年々増加して、いまや二十万体を超えています」

それに対して、解剖医の数は百数十人。実際に司法解剖にまわされるケースは一割前後だという。解剖医の数も、予算も足りないのだと。

「しかし……」

そんなことは理由にならないだろう。

「大変な実情は理解できますが、何を司法解剖にまわして何をまわさないかという、これは現場サイドの判断の問題ですよ」

現場の状況に、不審な点はなかったのかと問い詰めている。

「先ほどの、首のロープですが、両手の指紋が付いてはいましたが、はつきりし過ぎていました。しかも、指紋の端は、微妙にかすれたような形跡もあった」

自殺を覚悟して、自分で首に掛けるだけなら、指紋は指の膨らんだ部分だけしか付かないのが普通だという。

「まるで、むしろロープを外そうとして掴んだあのような？」

猿渡が水を向けると、

「自分で死のうとして首を吊った場合でも、あまりの苦しさ、外そうとしたとも考えられるんです」

「なるほど」

「ですが……」

溝曾路は開き直ったようであった。

「それに、自宅裏の倉庫に軍手は落ちていましたが、埃をかぶっていました」

「当日、立花さんが使ったとは思えなかったというわけですか」

これでは、不審な点だらけではないか。

「どういふことですか」

男は黙り込む。

「これ、おかしいですよね」

重ねて追求すると、男は、黙ったまま、うなずく。

猿渡の中で、疑問が確信に変わった。

「つまり、自殺じゃなかった。そういうことですよね」

「いや、自殺です」

意外な言葉を返した。

警察としては、あくまでもそれが公式な見解だという意味だろう。

「榊先輩には、溝曾路が無能だから司法解剖にまわさなかったとおっしゃってください」

毅然として言い放ち、

「じゃ、失礼」

とととと去っていく。

「あ、ちよつと待って」

思ってもみない展開になった。

「溝曾路さん！」

しかし、もはや男は振り返ろうともしない。

猿渡は、とっさに気持ち切り替えた。

「いや、参考になりましたよ。ありがとう！」

無言の背中に声をかけると、男は歩みを緩めることもなく、しかし、小さく右手を上げて返した。

「なるほど、変わり者だったな」

猿渡は、溝曾路が組織をかばっていると感じていた。尋ねたかったことについては、男は腹の中まで見せてくれた。それで誠実さは十分に伝わった。だが、組織の中の人間として、自殺と発表したのとまで否定するわけにはいかないのだろう。榊が推薦しただけのこ

とはある、骨太の男の姿がそこにあつた。

兵江白竜位が「ドラゴン」に姿をみせたのは、そんなころだった。扱いが紛糾した白竜位戦は、最終的には再戦となった。場所も、前回同様に風天閣。まさに、振り出しに戻った形だ。ファンの興奮も高まってきた。

不戦敗とされる心配を抱えていた兵江としては、申し分のない裁定結果となった。

「よかつたじゃないか」

「まあ、な」

「なんだ、うれしくないのか」

「いろいろあつたわりには、なんだか、何一つすつきりしてない気がするな」

兵江の声に、いつものような張りが無い。

「強気のおまえが、めずらしい」

少し意外な気がした。

「それはそうと、棟方たちの本はどうかかな。少しは売れてるのか」

猿渡は、彼らの本を出すために陰で兵江が動いたと見ていた。

「そうだな、売れるといいんだが」

しみじみと喋って、

「元々、そう数が出る分野じゃないからな」

淡々と応じた。

白竜位戦のスポンサーは、インターネットで「桃源市場」をオーブンしている新進気鋭の株式会社桃源だ。兵江は、そのルートで出版社に無理をいったのだろうというのが猿渡の読みだった。

「売れるかどうかは宣伝次第、という意味もあるんじゃないのか」

そういう本が出版されたことが世の中に伝わらなければ、つまり、知られなければ買ってもらえない理屈だ。

「それはある。あるが、露骨な宣伝は棟方が嫌うらしい」

その言葉から、兵江も手をこまねているわけではなく、出来る範囲で動いてくれることが感じられた。

「そうか。売れるといいな」

「売れるために、これは内緒だが、アトムが彼らの本を大量に買ってるんだ。部数が伸びて話題になるまでの呼び水にするんだってな」

「そうだったのか。おまえは囲碁でタイトルを取ったし、アトムのヤツはどえらい口ポットを作った。あとは、あの芥川と棟方のふたりが世に出てくれたら、万々歳ということになるからな」

自分のことだけ棚に上げて、猿渡が友人たちの心配をしていると、「そのアトムだが、小生とコンビで、ちよつとした仕事をやっている」

棋院に頼まれて、御茶ノ水陽介と兵江謙作との共同研究で、対戦型囲碁ソフトの最強版を開発している途中だという。

チェスの世界では、IBMが開発したスーパーコンピュータ『ディープ・ブルー』が、人間のチャンピオンを下した。将棋でも、対戦型ソフトの棋力は、一時代前とは比較にならない。ここ数年で飛躍的に進歩し、メーカー側が、棋力はプロ並みのレベルだと豪語しているソフトもある。

これらに対して、囲碁だけは開発が遅れているのだった。というよりも、開発が難しいといったほうが正確だろう。おびただしい数の対戦型ソフトが作られてはいるが、圧倒的に弱いのだ。盤面が十九路×十九路と広すぎることもある。それもあるが、囲碁の場合は戦形も戦略も複雑にして多様。記録が残されている江戸時代以降、同じ棋譜は二枚とないといわれている。盤面は、無限の宇宙とも称されているのだった。

「それで、出来るのか」

「むずかしい。プログラムに石を取ることを教えると、取れる石がある取りにいつてしまう」

「なるほど。取ったら碁を負けにする意味もある世界だからな」

「そうなんだ」

囲碁には、捨石作戦というものがある。全局を有利に運ぶために、あえて相手に石を取らせるのだ。

「強いソフトを作ろうと思うと、囲碁の思想から教えていく必要があるんだ」

御茶ノ水と議論する時間ばかり多くて、なかなか前に進まないが、とりあえず試作版は出来ているという。

「まだ改良するところが多すぎて、現在の段階でプロタイプを出すことには小生は反対したんだが」

スポンサーの方が我慢できなくて、強引に途中成果を求めたため、やむなく、非公開にすることを条件に、試作版として渡したのだといった。

「将棋ソフトの中には、低段のプロとならいい勝負ができるまで豪語しているものもあると聞いた。真偽のほどを確かめたわけじゃないが。まあ、おまえたちのソフトも、それくらいの実力が備われば大したものだと思うが」

「せめて、そのレベルにはしないと、わざわざ小生たちが乗り出した意味がないとは思ってるんだ」

そういって、バッグから高さ二十センチほどのロボットを取り出

した。

「なんだ、これは」

「アトムがヤツが開発した二足歩行型ロボットの、正確な十分の一のレプリカだ。あいつは二体作って、一体を小生にプレゼントしてくれた。しかも小生の方には、共同開発中の囲碁ソフトのプロトタイプが組み込んである。そこがヤツの持っている一体との違いだ。もつとも、ヤツのは盗まれたと聞いたけどな」

「アトムは、そういうことをするのが趣味なのか」

プログラムを妙な場所に隠す癖があるのかと聞いた。

「どうやら、な」

どうも、おもしろがってやっているのか、用心深いのか、よくわかった。ただ、ロボットを渡されたときに、中にソフトが仕込まれていることは説明を受けていたのだった。

「しかし、対戦型囲碁ソフトというのは興味があるな」

「そうだろうと思ったよ」

完成したら、猿渡に真っ先にプレゼントすると約束した。

「それはそれは。楽しみにしておこう」

かつての麻雀仲間が、様々な形で繋がっていることを感じて、猿渡はうれしくなった。

「事件のことは、あまりいいたくないようだから聞かないつもりだったが、ひとつだけ、いいかな」

「話の中身によるな」

「そういうなよ」

苦笑いを浮かべて、

「いまいったように、これは本当は聞きにくいんだが」

猿渡は、核心に迫る話を始めようとしていた。

「趙憲治のことは、知っているよな」

「彼のことなら、はつきりと覚えていて。年齢制限で碁打ちになる道が断たれ、田舎に帰ったと聞いていたんだ」

「姉あての遺書を残して、自殺したんだ」

「うん。白竜位戦の前夜祭の日に、お姉さんの鷺尾さんから聞いたよ」

「そうか」

意外に落ち着いた応じ方に少し安心して、

「おまえのせいじゃない」

もう気にするなといっておきたかった。

「わかってはいるが、いくら悔やんでも、彼が生き返るわけじゃないしな。わかっているが、人がひとり命を落とした。どうしても、気にはなる。だからといって、もしも時間を巻き戻すことができたとしても、小生のやることは同じだと思うんだ。小生は、また同じ行動を

とるに決まっている」

それが戦う自分のスタイルである以上は、なにも変わらないだろうという。

「そうか。余計なことを聞いてしまったようだな」

猿渡は率直に詫びて、

「ところで、今夜の宿は風天閣なのか」

「ああ、そうだが」

「おまえさえよければ、おれのところに泊めてやってもいいぞ。宿はキャンセルして、久しぶりに飲み明かすというのはどうだ」

趙青年のことだけでなく、いま話しておかなければならないことが、たくさんあるような気がした。漠然とした不安だ。

「それはいいアイデアだが、残念ながら今夜は先約がある」

兵江は、宿で古谷野と懇談するという。白竜位戦のスポンサーである桃源を通じて頼まれて、古谷野の招待を受けているのだと打ち明けた。

「いっそ、おまえも同席してくれるか」

「ごめんだね」

猿渡は、にべもない。

「そういうと思ったよ。小生だって、会いたい訳じゃない。これも浮世の義理だ」

「勝負の世界に生きる者でも、浮世の義理などというものがあるのか」

「いくら強くても、土俵がなくては戦えないさ」

「それはそうだ。スポンサーあつてのタレントか」

桃源には、巨額のタイトル料を出してもらっている。聞ける頼みなら聞くのが社会のルールというものだろう。

「連泊したっていいんだが……」

猿渡とは、ゆっくり話したいふうを見せて、

「そうはいつてもなあ、飲むためだけにもう一泊するということも気が利かない。冗談じゃなく、古谷野先生に付き合わないか」

兵江は真顔になって、

「世間ではわがまま放題のように思われているが、話してみると情に厚くて青臭いところがある先生なんだ」

政治の世界では寝業師といわれている古谷野だが、実態は意外と一本気な人間でなので、案外おもしろい話が聞かれるかもしれないぞと粘る。

百戦錬磨の政治家が、初対面の男にきわどい話を軽々しく披露するはずもない。そんなことは百も承知だが、猿渡は、兵江と趙とことがまだ心の片隅に引っかかっていた。このまま兵江をひとりにはしておけない気がしていたのだ。



「わかった、同席しよう」  
自分でも思ってもいなかった言葉が出た。  
「本当か、そうこなくっちゃ」

(三)

平日とあって、久しぶりの風天閣は客もまばらだ。  
時代がかった欄間が目を引き和室。床の間の前に、会席膳が二列に並べられていた。

先に通された兵江と猿渡が、床の間を背に並んで座っている。

「おい、頼むぞ」

招待してくれた人を、怒らすような真似だけは勘弁してくれよな  
といている。

「俺が同席していることが心配だったら、いまから帰ってやってもらいたいんだぜ」

「馬鹿。だから、そういう姿勢のチャンネルを切り替えてくれと頼んでるんじゃないか」

「わかってるよ。何年間公務員をやってきたと思ってるんだ」

実際、こんな席は何度となく経験済みだ。

「どうも、どうも。これは、誘った方が遅れてしまい、申し訳ないことで」

少し時間をずらして入ってきた古谷野は、兵江と向かい合う形で腰をおろした。

「白竜位、無理を聞いてもらってありがとう。地元出身の兵江さんには、わしはどうしても、うまいものを食べてもらいたいとうてな。というのは半分は本当じゃが、要は、一緒に飲みたかった」

兵江にサービスをしたからといって、票になるわけではない。小谷野の言葉に、裏はないのだろう。

「いや、今日は本当によく来てくれましたな」

右手を差し伸べ、しっかりと握り合ったあとで、

「それに、猿渡さん。あんたとはお初じゃが、なんというかな、まんざら知らんわけでもないんじゃない」

うれしそうに握手を求めてきた。初対面というのに、古谷野は遠慮がない。

「猿渡さん、あんたは夜の街では有名人ですな。よう名前を聞く。信じようと信じまいと構わんが、わしはあんたのファンじゃ。いや、この兵江さんは別格としてな。こっちはなんといっても天下の白竜位じゃから」

サービス精神からなのか、持って生まれた性格からなのか、如才がない。

「先生、どうせろくな話ではないでしょう」

やむを得ず、出されたままの右手を猿渡も握り返した。

「どうも、みんなが俺の悪口をいいふらしているらしい。くしゃみがよく出て仕方がないんですよ」

心を計りかねて、冷ややかに応じると、

「そのとおり」

我が意を得たりと古谷野は笑って、

「いや、人間ゆうもんは、好いとする者のことはわざわざ褒めたりせんが、好いとらん者の悪口は、よう口にするものでしてな。それが、自然にわしの耳に入ってくるんですな。あんたに、よほど往生したことがあるんじやろうと見ましたな」

うれしそうに双眸を細め、言葉を続けた。

「じゃが、ごくたまに、若い役人の中に、あんたのことを褒めるのがおる」

「ごくたまに……」

猿渡は、鸚鵡返しに笑い返した。

「うん。ごくたまにな」

不敵に白い歯を見せて、

「めったにおらんから、つい、耳を傾けてしまう。そういうお兄さんは、飲み仲間に、あんたに心酔している理由を具体的に話す。自分の見方を仲間に認めさせたいと思うのか、必死に熱弁を振るうとる。そういうのを聞いたるうちに、わしは会うたこともないのにフアンになってしまった」

語りながら、古谷野は握手の手をなかなか離そうとしない。

「恐縮です。しかし、少数派の意見というのは、文字どおり少数意見。あてにならないものです」

口に出しながら、尻がこそばゆくなってきた。

「そういえば俺の知っている政治家で、握手をしただけでその人間の本心がわかったといった男がいましたが、これ、先生はどう思われますか」

いつまでも手を離そうとしないので、無遠慮に話題を変えた。

「おう、その話ならわしも知っとるよ」

いうが早いのか、握り合った右手に渾身の力を込めてきた。

握られた猿渡が、イテテ……という顔をしたのを確認して、やつと、満足そうに手を離したのだった。

「古典的な、ある意味では有名な心理学の問題じゃな」

ジロリと、猿渡の顔を覗き込む。

握手の仕方から相手の本心がわかると、そういった政治家の理論はこうだ。衷心から応援してくれている支援者は、握手の際、気持ちを含めて相手の手を強く握る。弱々しい握手しかできない支援者は、

うわべだけで心がないというものだ。お愛想でやってるから、気のない握手になるのだと。

「昔はそういう話を真に受けとった単純な政治家もおったよ。というか、犯人は多分、田舎の選挙参謀じゃな」

政治家に、参謀たる自分を売り込むために、様々な魔術を披露する必要があったのだろうという。

「人間の心を読むということは、いつてみればまあ、わしらの最大の関心事ですわな。出来ることなら専門家の力を借りたいと思う」

だから、心理学めいたサゼッションには、引っかけやすい人種なんだと打ち明けた。

「握手の話はご存知でしたか」

少し見直した気分だった。もちろん、本心からでないと強く握れないという人間もいるだろう。だが、誠実で控えめな人間は、支持する政治家との握手でも、そんなに厚かましくは振る舞えない。どうしても、さほど強くは握れなかったりする。逆に、腹黒いタイプは、平気で強く握ってくるに決まっている。人間の心理は、そんなに都合よく単純には出来ていないのだ。

「うーん、犯人は選挙参謀でしたか。有権者の心理を読むというふれ込みですか。なんだか、山師のようですね」

「いや、そうなんだが、握手の話は、実は、そう捨てたもんでもない」

相手がこの伝説的な握手の話を疑わない、いわば握手教の信者というケースだってある。だから、とにかく自分は用心して、握手の際は全力で握ることに決めていると笑った。

「それに、ある程度、確率の意味もありますからな」

未熟で強引な田舎参謀の読みも、半分以上当たっていればそれなりに役に立つと知っている。

「なにより、切れ者の参謀が付けば、わしのような駄馬でも千里の馬に化ける」

「ご冗談を」

思わぬ謙遜に、古谷野の意外な一面を見る思いがした。

「俺のうわさの真偽はあまりあてにはなりません、先生こそ、うわさとは別人のように感じますよ」

「そうですか。うわさとは別人といわれても微妙な気分じゃが、ここはまあ、喜んでおきましょうかな」

まんざらでもない表情で、

「いやいや、今宵は同席を快諾いただいたので、楽しいですぞ。愉快、愉快」

握手の話では、どうやら、概ね意見も合ったようだし、と笑った。「失礼しました」

結果的に、古谷野をテストしたような形になってしまった。

「いや、スナックでの若い衆の熱弁を聞いておりましたから、あんななら、それくらいの話題は振ってくるど覚悟してりましたな。まあ、なんとかこれで、わしも第一関門突破ですかな」

いかつい顔をゆがめ、子供のように喜んでいる。

「今夜は無粋な鎧は脱いで、楽しく美味しい酒が飲めそうです」

ただの傲慢な政治家ではないとわかって、猿渡も、穏やかに微笑んだ。

「まったく、こいつはこういう失礼なヤツなんです」

横に並んだ兵江が、彼も無遠慮に、

「先生、いま合格されたからよかったようなものの、下手な答だとこいつは遠慮なしにさっさと帰ってしまいかねない、そういうヤツですからね」

「まさか。いや、猿渡さんなら、やりかねませんかな。ということとは、しかし、中四国州を豪快に袖にした男に、わしは曲がりなりにも認められたというわけですな。よかった、よかった」

無邪気にはしゃいでいる。

「遅くなりました」

そのとき、筆頭秘書の福島真紀子が入ってきた。

「失礼します」

軽く会釈して、古谷野の横に座った。

「渡してくれたか」

「はい。みなさん喜ばれました」

「そうか、うん、うん」

何度もうなずいて、

「兵江さん、いまお聞きになったとおりですから。申し訳ないが、今宵はわしにゆっくり付き合ってくださいますよ」

「いや、小生たちこそ、ごちそうになります」

その言葉が合図のように、地ビールの小瓶が開けられた。

「これはうっかり話に夢中になって、主役のビールがお預けになってましたな。わしとしたことが、失敗しました」

「さ、どうぞ」

福島女史が酌をして、兵江が受け、猿渡が受けた。兵江が古谷野に注いで、乾杯になった。

「いまの話は？」

小さな疑問を口にした。猿渡には、短い会話の意味が理解できない。

「あ、いや、なんでもないんだ」

そう答えた兵江が、あわてて、

「いや、実は小生にちよつとした予定があったんだが、小生の代わ

りに、その仕事を片付けてもらったというわけだな」

手短かに言い換えたが、具体的には語りたがらないのを感じて、猿渡も、それ以上は追及しない。

「ささ、どうぞ」

「いやいや、先生こそ」

一息に飲み干したグラスに、お互いに新しいビールを注ぎあっている、

「女将に勧められたからこれにしたが、申し訳ないがわしは、地ビールがどうも……でしてな。みなさんはどうですか」

大手有名メーカーの、昔ながらの味の方が好みだという。

「小生は、個性がある分、地ビールは地ビールで美味しいと思いますかね。なあ、猿渡よ」

「ま、味の好みは人それぞれだろう」

兵江から振られた猿渡は、

「元々、各地で作られている地ビールというのは、万人向けの味にはなっていないんだよ」

そう、こともなげにいった。

「ビールは、大手メーカーが開発して試作して……。たとえばひとつの新製品を出すときには、メーカーは百種類くらい試作品を作るらしいんだが、そのときに採用されなかった、ボツになったレシピが地ビールに提供されると聞いたことがある。もちろん、独自の味を開発している地域中にもあるかもしれないけど、ま、ほとんどの地ビール関係者たちは、まずは大手に向いて、その落選した試作品のリストの中から選ぶらしいんだな。味や色を何種類か比べて、みんなで議論して決めて、その試作ビールをノウハウぐるみで買って帰るんだよ」

だから個性的なものが多く、どうしても万人向きのビールにはならない傾向があると解説した。

「ほう、詳しいんですね」

「役人時代、地ビールも作っている酒造会社の社長さんから聞いた話です。冬場には伝統の日本酒を造っている老舗の蔵元で、それが本業なんだが、酒造りが終わると職人を遊ばせることになる。ビール造りは、労働力の有効活用という意味でも、ちようどよかったんだそうです」

「なるほど」

「でも、やはり、地ビールは癖があるんですね。個性があつておもしろいが、大量には売れないだろうと大手が捨てた味ですから」

「うん、うん」

「根強いファンはいるが、そうは量が出ない。だからほとんどの地ビールメーカーが苦戦されているようです」

興味深く聞いていた古谷野が、ポツリと、  
「そうしてみると、地ビールというのは、まるで猿渡さんをビールにしたような存在なんでしょうかな」

「どうだ、と感想を待つ顔で猿渡を見た。」

返事に困っていると、横から兵江が、

「先生、うまいことを。一本とりましたね」

「おう、そう思われますか。そうか、これは愉快ですな」

腹をゆすって馬鹿笑いを始めた。猿渡も、困って苦笑いをしてい  
る。

「ここは俺も喜んでおいた方が無難なようだな」

ゴクゴクと喉を鳴らして、

「うまい」

飲み干すと、すかさず古谷野が新しいビールを勧めてきた。

「もつと売れてくれると、地元としても勢いが出るんじゃないが」

議員としての本音をのぞかせた。

「値段が高いこともあるんじゃないか」

ちっちゃなビンなのに、一丁前の価格だと兵江がいった。

「だからどうしても、こういう席でしか使われませんよ。自宅で愛  
飲しているというのは、相当なこだわりを持っている人だけ」

断言したあとで、そろりと古谷野を見ると、

「ターゲットは観光客、といったところになりますな。ま、わしは、  
さつきもゆうたように、昔の味が好きで。じゃが、家の冷蔵庫には  
地ビールもなんぼか冷やしてある」

「え？」

「いや、もらいものでしてな。それを来客用に置いとる」

「なーんだ、そうでしたか」

だが、地ビールには賞味期限が短いものも少なくない。

「先生、期限が迫ったら、処分は引き受けますから」

東京の時間が増えた兵江が、飲み帰るわけもないが、そんな  
ことは関係なくみんな笑い合った。

座の雰囲気も打ち解けてきたころ、

「せっかく呼んでいただいたので、小生たち、今夜は政治の世界の  
おもしろい裏話が拝聴できるかなと、ひそかに楽しみにしてきましたん  
ですが」

なんとなくオフレコの話でも出そうな気がして、兵江としては、  
先回りして気を利かせたつもりだった。

「ん、そういうどろどろした世界に関心がおありか」

一瞬、まんざらでもない顔をしたが、すぐに表情をあらため、

「いやいや、臭いもののふたを開ければ、これはもう、臭いだけで  
すからな」

兵江のリクエストには直接は答えようとしなくて、  
「ただまあ、いまわしは、地方参政権のことで動いとります」

永く日本に住む外国人に対し、地方参政権に限定してであれば認めてもよいのではないかという議論がある。古谷野としては、その考えには賛成できないのだという。

「むずかしそうな話ですね」

猿渡は困ったように応じた。

「いやいや、むずかしいことなんか、ありませんぞ」

諸外国の多くは、外国人には参政権を与えていない。古谷野は、国内に住む外国人の中にすら、賛否両論あるのを知っている。そうしたこと踏まえたうえで、なぜ自分としては反対なのか、独自の理論を丁寧に展開してみせる。

熱弁はしばらく続いた。

「小生はどうも、お話に単純には賛成できかねますなあ。国政に係がなくても、先生、やはりダメですか」

兵江からすれば、うなずける部分もあれば、疑問に思えるロジックも含まれているように感じたようであった。

「いや、兵江さん、それはですな……」

政治家としては、安易には譲れない話のようであった。

「そもそも世界のどこの国が……」

古谷野の反論が始まったところで、

「<sup>かみしも</sup>袴を着た政治家の話は、俺は苦手だな。好かん」

決然とした口調で、猿渡が遮った。

我に返った古谷野が、

「や、これは退屈させましたかな」

申し訳なさそうに頭をかく。

話の流れで、ついつい深刻な議論に突き進んでしまった兵江も、あえて座の空気を換えようと、

「小生、タイトルをひとつ取ったくらいで慢心していると思われたくないから、これは誰にでも話せないわけですが。いま小生が考えていること、聞いてもらえますか」

「ほう、なんですか」

さっそく古谷野が乗ってきた。話題変更は望むところだといわんばかりだ。

「先生、人間は死んだらどこへ行くのでしょうか。ふと、そんなことを思ったりするようになりました」

真顔になっていた。

猿渡は、兵江の心中を思いやる。自ら命を絶った、趙憲治のことが脳裏から消えないのだろう。

「勝負の世界に身を置いていると、紙一重のところ勝敗が決する

んです。勝負どころで、妙手が閃くか閃かないか」

俗に、囲碁の神様というが、本心から、囲碁の神様というものが存在するのではないかと思うことがあるのだという。話題の本線が、風天閣女将の弟の話ではないことがわかって、猿渡は少しホッとしている。

「そう思うと、何やら、死後の世界というものも、あるような気がして」

「そんなものは、ありませんぞ」

古谷野が即座に否定した。

「精神も心も、すべては脳の働きによるもの。肉体が減れば、すべては無に帰りますわな。科学者たちは、全員が口をそろえてそう断言しとります。なにより、死の先にまた新たな精神世界があったら、わしのような罪深い男は、明日から枕を高うしては眠られん」

「でも、科学者たちも、そのことを誰も証明していませんよね」

兵江が食い下がると、

「ないものをないと証明することは、不可能なんですわな。じゃが、あるものなら、あると証明できるはず。なのに、誰もあると証明しとらんというはですな……」

「先生、わかりました。秘書さんは、どう思われますか」

兵江が矛先を変えた。

「あら、わたしですか。わたしは平凡な人間ですから、神様は普通に信心しているんですよ」

漠然とだが、精神世界はあるように感じていると答えた。

「ご先祖様に対しても、こういう仕事ですから時間の制約もあつてなかなか充分なこととは出来ませんが、気持ちとしては、きちんとしてやらなければいけないと思ってるんです。臨死体験のあるみなさんの報告も、本になってたりしますし」

そこで、猿渡が反応した。

「しかし、臨死体験の本を読むと、光の世界だったり三途の川だったり、それぞれの宗教観によって、見える世界が異なってるようですね」

あの世とやらが、そんなにいくつもあるのだろうかといっている。「やっぱりそうでしょう。それぞれの脳が再生している世界のようにもありますな」

古谷野がうなずくと、

「あら、そんなふうに断言していいんでしょうか」

秘書は不満そうだ。

「だって、脳が見せている世界だとしたら、みんながみんな、申し合わせたようにあの世の夢ばかり見るといふのも妙ですわ。愛する子供の夢とか、恋人とか、そういう大切な人たちが出てきてもよき



「そうなものじゃありませんか」

「脳が再生しているまぼろしの世界なら、人によって、もっと見るものが多様であつてもおかしくないといっている。」

「母親が出てきて、呼び戻されたりしたという話は聞きますよね。人によっては、大切な存在が出てきている」

「猿渡は、見る夢は必ずしも同じじゃないと、穏やかに反論した。どうも、臨死体験否定派のようだ。」

「おまえは、結局、神を信じないんだな」

不満顔の兵江に、

「いや、実はそういうわけでもない。あくまでも可能性をいっている。本当は、俺もよくわかってない」

「いたずらっ子のように笑って、」

「たとえばこんな話がある。アインシュタインが、観測と計算に基づいて、『宇宙は膨張を続けている』という理論を発表したとき、では過去に遡って、宇宙はどういう経過をたどって成長してきたのかと質問した人がいたらしい。そのときアインシュタインは、過去に遡れば、この宇宙はどんどん小さくなっていった、最後の最後は、宇宙の芽にまで戻る、と答えた。そこで質問者は、では、世界が誕生する根源ともいえる宇宙の芽は、一体誰が作ったんですか、と尋ねた。そのときアインシュタインは、『それは神だ』と答えたという話なんだ」

古谷野は目を見張り、兵江はうんうんとうなずいている。

「俺としても、兵江と似たようなものだ。確信は持てないが、しかし、根拠もなく、何かを感じる瞬間というものはあるんだよな」

「おまえ、それは麻雀の話をしてるんじゃないのか」

「凶星だ」

よくわかったなと笑った。

「小生も、麻雀なら、意味もなく手が止まったことが何回かあったぞ。あとから見たら、それが当たり牌だったなんてことは、何度とじて経験したぞ」

「あれは、不思議といえど不思議だったよな」

信じるも信じないも、自分次第だと笑い合っている。

心地よい酔いにまかせて、真剣なようであり、戯言ざれごとのようでもある他愛のない話題は、深夜まで続いた。

いつしか宴も終わる。夜更けて、宿は寝静まっていた。男たちは、それぞれに神輿をあげる。

「やあ、今宵は無理を聞いてもらって、申し訳なかったですな」

「いやいや、愉快的な夜でしたよ」

猿渡は、古谷野と何度目かの握手を交わし宿を辞した。従業員はもうみんな帰ったのか、帳場の方からはまだかすかに物音が聞こえていたが、対応に出てきたのは女将の鷺尾夕子だ。

「兵江さん、いまからお部屋にご案内いたしますね」

「あ、お願いします」

「それじゃ、わしらは……」

古谷野はなにやら女将に耳打ちをして、秘書の福島真紀子を促すと、慣れた調子でさっさと廊下の先に消えていった。

「元気なことだな」

兵江が呟いた。

「福島さんは、秘書ですけど専属の看護師さんも兼ねておられるんですよ。先生は若いころからの糖尿病で、彼女が健康管理をされるという話です」

最初の入院時の担当で、人柄を見込んで秘書になってほしいと口説き落としたという。

「じゃ、男と女の関係じゃないということ？」

「それは存じませんが……」

「男女のことまではわからないよな。ま、いいか、みんな大人なんだし」

余計な詮索をしてしまったと笑いながら、兵江も、女将に案内され部屋に入った。十六畳ほどの広い部屋だ。中央に布団が敷いてあり、脇に碁盤が置いてある。

「えらい広い部屋を用意してくれたもんだな」

彼はバッグからロボットを取り出すと、座卓の上に置いた。しばらく眺めていたが、指をロボットの背後に回し、そこにいくつか並んだボタンを操作すると、まず、眼が光った。やがて光は胸から腰、脚へと流れていく。

それが眠りにつく前のお決まりの儀式なのだろうか、しばらく楽しむようにボタン操作を繰り返していたが、ピッ！ という電子音を区切りに、ロボットを座卓の上に置いたまま、満足そうに横になった。

宴の会話が思い出された。兵江は、心地よい酔いに包まれ、目を閉じる。

風天閣裏の溪流の、遠いかすかな水音が心地よく耳に届いていた。布団入れの襖が音もなく開いたのは、彼が静かな寝息をたてはじめてしばらくしてのことだった。

(四)

「女将さん、部屋のドアが開かないんですけど」

起きてこない白竜位を気遣い、迎えにいった仲居があたふたと戻ってきた。

「どういうこと」

ドアが開かない。少しは動くが、内側から何か邪魔をしていて中に入れないという。

「昨夜は遅くまで飲んでおられたから、お疲れかもね。もう少し、そっとしておいて差し上げましょうか」

騒ぎ立てる仲居をたしなめた。

ドアが開かないのは気になったが、ゆつくり休みたいと思った兵江の悪戯かもしれない。ありそうなことだとも思えた。女将の言葉に、仲居も従った。

昼近くなつて、あらためてお伺いを立てる。

「女将さん、もうそろそろ起こして差し上げた方が……」

「あらやだ、まだ起きてこられてないの？」

さすがに、この時間になれば反対する理由はない。

「一緒にいってみましょう」

仲居を従え、ドアの前までゆく。なるほど、わずか数センチ程度の隙間はあるが、ドアはそれ以上には開かない。これでは、指こそ入るが、それではどうしようもない。

「兵江さん？」

声をかけてみた。

室内からは、応答の気配もなかった。

「兵江さん！」

ドアを、どんどんと数回叩いてみた。が、やはり反応はない。

「兵江さん、兵江さん、大丈夫ですか！」

しばらくガチャガチャやっていたが、

「だめね。これは窓からじゃないと」

そういつて庭に回ると、窓には内障子があつて部屋の中までは見ることができない。

「仕方ないわ。窓を切りましょう」

宿の男衆にガラス切りを持ってこさせ、ロックに近い部分を切り抜かせた。窓を開けると、頭にハチマキをした料理長が、飛び上がるようにして窓枠を乗り越える。

内障子を抜けて、料理長の姿が室内に消えた。

しばらくして、

「うわあああ」

すぐに悲鳴が上がった。

ただ事ではない。

ほかの男衆も、二人三人と窓から中に入った。

「こ、これは……」

「どうしたの」

女将が外から声をかけた。

「みんな、どこにもさわるな。外に出ろ。女将さん、警察に電話してください」

気を取り直して、料理長が指示している。

「兵江白竜位が亡くなっています。現場には、むやみに踏み込まない方がいいと思います」

「え……」

女将はすぐに脚立を持ってこさせ、窓から中に入った。

「こ、こんな」

たちまち、絶句して立ち尽くした。

むくろ

骸は浴衣の胸元がはだけ、あちこちに黒ずんだ痣ができていた。

口元から血を垂らし、首が不自然に大きく傾いている。明らかに何者かと戦った証しだ。

壮絶な死であった。

猿渡と古谷野が異変を知らされたのは、その日の午後二時。

警察は、まず現場を保存するように指示を出し、鑑識を動員した。旅館の従業員たちから昨夜の様子を聴取して、宴のメンバーとして名前が上がった時点で、やっと猿渡らに連絡がいったのだ。

「これは……」

猿渡は凍りついた。

警官の制止を振り切って、強引に部屋に押し入ったのだ。

「あの、困ります」

当惑する若い制服にうしろから肩をつかまれたまま、猿渡は惨劇の現場に立ち尽くしていた。

鑑識は、室内で細かい作業を続けている。

数人が、畳の上にクモのように這いつくばっていた。

傍らに、古い友が倒れていた。

「兵江よ……」

絞り出すようにうめいた。

全身から、気力が失われていくように思った。骨が、粉々に砕けたような気分だ。もはや、ひとりでは、立ってはおられない。

ぐらりと傾いた体を、背後の警官が支えてくれた。

「大丈夫ですか」

「ああ、すまない」

幽鬼のような顔で答えた。

「どうぞ」

振り返ると、見覚えのある顔が、コップに入った水を差し出して

いた。

「あんたか」

それは、鑑識の溝曾路佐吉だった。

「この人はいいんだ。君は配置に戻れ」

溝曾路は、若い警官に指示して、猿渡に水を勧めた。

「ありがとう」

「大丈夫ですか」

「しばらく、魂が抜けていたような気分だ」

弱々しくいつて、白い歯をみせた。

「お友達だそうですね」

「うん。家族以上の付き合いだったよ」

グイと飲み干して、自らに気合を入れなおす。

「そうでしたか」

うんうんと首を振って、

「お友達なら、仇打ち、されないとね」

溝曾路の、このさりげない一言で猿渡は覚醒した。

「ありがとう。おかげで、目が覚めたよ」

「それはよかった。もう復活されましたか」

「そういうわけにはいかないよ。兵江のあの姿を見たら、当分、普段の自分ではいられない気がする」

「そうですか、わかります。ですけど……」

「うん。悲しんでいても、どうしようもないよな」

歯を食いしばって、

「容易には受け入れられないけど、現実には現実だ」

「そうですよ。問題は、これからのこと」

そんな話をしているところに、初老の刑事が来て、

「やあ、どうも。古谷野先生も来られてから昨夜のお話はお伺いしますが、とりあえず、被害者の所持品を確認していただけますか」

兵江の持ち物で、無くなっている物はないか見てほしいという。

「それはいいけど、細かいものまではわからないと思いますよ」

「そうですね。気がつかれたものがあれば、ということで結構ですから」

「わかりました」

刑事に協力して、しばらく兵江の所持品をチェックしているうちに、猿渡の腹は固まってきた。気持ちが決まると、思考力も戻ってくる。

無くなっていると気づいたのは、昨日、ドラゴンで見せられたロボットだ。御茶ノ水と共同開発中の、対戦型囲碁ソフトのプロトタイプが組み込まれているという、あのロボットがどこにもなかった。「お世話になりました。大体わかりました。じゃ、古谷野先生が来

られたらお呼びしますから、そのときはまたよろしくお願いします」

刑事から開放されて廊下に出た猿渡は、すぐに東京の榊に連絡を入れた。

昨夜から今日までのことを、手短かに説明すると、

「証拠も何もないが、すぐに山県を押しえられないか」

無理を承知で叫んでいた。

「ほかには考えられない。山県が激流に飲まれたくらいでくたばるはずがないといったよな。あのとき、ヤツが元気で活動していることを、おまえ、知ってたんだろう」

兵江は、ああ見えて実は武闘派。めったな相手には遅れはとらない。兵江を倒したのは、戦闘の特殊訓練を受けている山県しか考えられないとして、ロボットが消えたことも付け加えた。

「だから、山県に決まってるんだ」

猿渡は吠えた。

「落ち着け、兄弟」

榊はたしなめにかかる。

「証拠がなければ、令状だつて取れないぞ」

そんなことまで自分にいわせるのかと、語調に怒りが交じる。

「そんな綺麗事は、いっておられないんだ」

猿渡も荒ぶる。

「兵江が殺された部屋は密室になっていた。ドアと部屋への上がりかまち框との間の狭いスペースに毛布が置かれ、そこに碁盤がピツタリと挟まった状態でドアが開くのを邪魔していたんだよ。そのため事件の発見が遅れた。つまり、密室は犯人側の時間稼ぎの意味があると考えられるんだ。だからこそ、別件でもなんでもいい。一刻も早く、山県の身柄を押さえる。いいか、ヤツに時間を与えるな」

いままでの、手持ちの資料を適当に組み合わせ、別件で令状を取ればいいじゃないかと一気に捲くし立てた。

電話の向こうは、しばらく沈黙した。

「わかってくれ。ヤツに時間を与えたくないんだ」

強引なプッシュに、返事はない。

「このままでは、逃げられるぞ」

たまりかねて、さらに声を荒げる。

結局、榊は折れた。

「わかった。兄弟のいうとおりにするよ。ヤツのアジトは調べてある。大丈夫だ、責任はおいらがとる。また連絡するよ」

「すまない。よろしく頼む」

榊に無理をいった直後、風天閣に古谷野と秘書の福島真紀子が到着した。

三人そろったところで、地元警察から事情聴取を受けた。形式的なものだった。昨夜の様子を話すといっても、宴会が終わってからのはわからぬ。宴会でどうした、何を話したといったところで、捜査の参考になるとは思えなかった。

事情聴取から解放された後、古谷野が、  
「警察にはいわなかったが、気になることがある」

青白い顔をして話しかけてきた。

「実は、部屋を替えてもらった」

「え……」

「わしは、飲んだ後はトイレが近くなるんじやよ。それでわしらは、元々は兵江白竜位の泊まる予定だった方の部屋に入ったんじや」

沈痛な顔をしていた。

「もしかしたら、犯人は相手を間違えたよ」

「その可能性はあるわな」

まるで古谷野は、狙われる心当たりがあるような口ぶりだった。

「なるほど。でも、兵江は戦ってますよ。彼の死にかぎっていえば、先生のせいではありませんよ」

それに、ロボットだって持ち去られている。

「だから、先生のせいではないんです」

「そうでしょうか」

「そうですよ」

古谷野の顔に、わずかに救われたような色が浮かんだ。

「兵江を殺したヤツには心当たりがあるんです。最初は部屋を間違えたとしても、戦う前には、互いに相手が誰だか認識していたはず。先生が悩まれるようなことはありません。先生が自分のせいだと思われたら、死んだ兵江だって迷惑でしょう」

言葉を尽くして、気に病むことはないと言った。

「首の骨を折られているということじゃったな」

まだ、古谷野の表情は暗い。

「あいつは酔っていたとはいえ、少林寺拳法の使い手です。普通の相手には容易には遅れは取りません」

猿渡の脳裏には、山県のシルエットが浮かんでいた。

「相手が悪かった」

いくら兵江が強いといっても、山県はプロだ。しかも、飛び切りの戦闘員だ。それに対し、格闘技では、兵江は強いといってもアマチュアであった。それに飲んでいる。

「アマの方がプロにハンデを渡しては、勝負になるわけがない」

戦わねばよかったとも思う。戦わねば、単なる人違いだ。ロボットだって、欲しいというなら喜んでくれてやっただらいい。そうしていたら、命までは取られることはなかっただろう。だが、兵江とい

う男が、そんな計算を潔しとしない男だということも、嫌というほどわかつている。

「この落とし前だけは、きっちり付けさせてもらいますよ」  
猿渡は、暗い眼をして毒々しくうめいた。

午後四時。榊は、公安に応援を頼んで、車四台に分乗し山県のアジトをめざしていた。目的地は、新宿歌舞伎町のビルの地下事務所だ。秘密を守るためには自分と部下だけでやりたかったが、一味を一網打尽にするには、五、六人の部下だけでは心もとなかった。

上を説得するためには、最低限の時間も必要だった。大きな組織だけに小回りは利かない。すぐには動けなかったが、どうしても人数は必要だった。

だからこそ、決行のタイミングはギリギリまで伏せた。あくまでも、急襲でなければならぬ。

「いいか、ひとりたりとも逃がすな」

ビルから少し離れたところに車を止めて、四方から包囲し、投網を絞るように事務所所に迫っていく。

大通りに設置されている防犯カメラの映像から、ある程度の動きは把握できていた。だが、ビルの中まではわからない。

「よし、いくぞ」

榊の合図で、いっせいに建物に入った。

「警察だ！ 全員、動くな！」

踏み込んだとき、埃にまみれた部屋は意外なほど閑散としていた。留守番役の男たちと、白衣を着た学者風の数人の男たちがいただけ。たちまち全員を拘束した。

「これは……」

捕らえた連中の顔を眺め、暗澹たる気分になった。

いくつか問いただしてみたが、返事は一向に要領を得ない。

「山県どころか、いたのは雑魚ばかりだ。これじゃ猿渡に顔向けできない」

ガックリとつぶやいた。

主役は消えていたが、せめてもの救いは、そこに、ロボットのレプリカが残されていたこと。

失敗したと痛感し、榊は猿渡に報告の電話を入れた。

「すまない、兄弟。山県はいなかった」

率直に詫びた。

「捕まえた連中に尋問してはいるが、どうも、雇われ学者ばかりのようなんだよ」

成果は何もない。



「そうか」

猿渡は唇を噛んだ。

「しょうがないよ。無理を聞いてもらって、こっちこそ申し訳なかつたな」

「いや、おいらのミスだ。本当にすまない」

榊は意気消沈していた。

「何人か雑魚はいたが、主だった連中は全員が出払っていた。ということは、うちから捜査情報が漏れた可能性がある。用心はしてたんだが、結果的には、もぬけの殻を襲っちまった」

一番心配していたことが現実になった。動員をかけたことで、情報が漏れたとしか思えない。

だが、救いもあった。ロボットが残されていた。アジトにいたのは、このロボットを解析するために集められていた電子工学の専門家たちだった。

榊は何度も謝った。

「わかった、もういな」

終わったことは仕方がない。

「で、そのロボットは、兵江の持っていたやつか」  
重要なのは、そこだった。

「それが、捕まえた連中によると曖昧なんだ。自分たちは、ロボット自体の解析を依頼され集められただけで、何も知らないというんだ。実際どうも、雇われ研究者ばかりみたいだな」

「上等だよ。調べてみれば簡単にわかる」  
「なんだって？ どうすればいい」

猿渡は、兵江がプレゼントされた方には、対戦型囲碁ソフトのプログラムが組み込まれていることを告げた。

「ロボットの背中にはボタンがあるはずだ。そいつを作った男にすぐにかせる。いま、おまえはどこにいる。アトムをどこに行かせたらいいんだ。俺から連絡をするよ」

山県たちは、御茶ノ水がロボットにプログラムを仕込む習癖があることは先刻承知だ。倒れた兵江の傍らに見覚えのあるロボットがあれば、その中に探しているものが隠されているのではないかと思う。気付いて持ち去ったのはよいが、それが動かぬ証拠になりそうな心配だ。

「そいつは助かる」

御茶ノ水が調べて、そのロボットが兵江に渡した方だということ  
が明らかになれば、動かぬ証拠になる。もしそうだとしたら、東京  
まで夜通し車を走らせたのだろうか。移動スピードの速さには舌を  
巻く思いだ。

だが、山県は、どこだ。東京に戻り仲間とともに潜伏しているの

か。それとも、まだ福川市周辺に残り、どこかに身を潜めているのか。

「わかった。アトムには、くれぐれも逃げるなど、よく話をしておくよ」

「そいつはありがたい」

ジョーク交じりの猿渡の言葉に、榊は少し安心したようだ。旧友が、自分を取り戻しつつあることを感じたのだろう。

「兄弟、よろしく頼むよ」

辛いだろが、くじけるなよと、電話口で祈っていた。

午後五時。このままでは風天閣から帰れないと思っていた。猿渡は、女将を問い詰めた。

「山県とは、本当は、どういう関係なんですか」

単刀直入に切り込んだ。

「古くからの、お知り合いなんですよ」

女将はしばらく無言のままだったが、

「中学の同級生です。わたしや弟が近所の子にいじめられてたら、彼がいつも助けてくれて」

ぼつりと打ち明けた。

「兵江の拉致を依頼しましたよね」

猿渡は、追求の手をゆるめない。

「大体のことはわかってるつもりです。しかし、あなたの口から聞きたい」

彼女のことは、根っからの悪人ではないと思っているのだ。

「弟は自殺したのに、彼だけが華やかなスポットライトの中にいることが、どうしても許せなかったわ」

キツと唇を噛んだ。

「でも、あなたは彼を殺そうとまで思った訳じゃない」

「もちろんです。不戦敗になって、白竜位の地位から転がり落ちたらそれでよかった」

「不戦敗になったとしても、まだ三勝三敗ですよ」

「ええ。でも、それで充分だと思いました。いくらか気が清々すると思ったんです。それでよかった」

彼女は、自分の気持ちに区切りをつけたかったのだと告白した。

「だけど、再戦が決まった」

「わたし、それを聞いて、正直、ほっとしてたんです」

「どうして？」

「弟が自殺したことを、前夜祭の日に話したとき、兵江さんは本当にびっくりされて、あれは後味の悪い結末で、ずっと気になってた

んだと、そうおっしゃってましたから」

その言葉に、変な計算は感じられなかった。

「兵江のヤツは、拉致の背後に女将さんがいることを、実は察していたようなんです」

「え？ そんな、うそだわ」

「逃げようと思えばいつでも逃げられそうな、武闘派の兵江からしたら隙だらけの監禁状況だったそうです。でも、彼は、まったく逃げようというそぶりを見せなかったらしい」

猿渡は、それは兵江の心の中に罪滅ぼしの気持ちがあふれていた証ではないかとみていた。誰が悪いというのではなく、一つの錯覚が引き起こした悲劇ではあったが。

「信じられませんか。ヤツには、そういうところがあるんです」

思い出すようにいって、涙ぐんだ。

「昔から、そういう男だったんです」

「そうでしたか。兵江さんて……：：：そうだったんですか」

猿渡の話をもそのままに受け止めて、自らを悔やんでいる様子が見てとれる。

「でも、今回のことは、誓ってわたしは関係してませんから」

キツパリと断言した。

「信じますよ。安心しました。もしそうでなかったら、兵江が救われなと思うっていったんだ」

淡々と応じて、

「しかし、山県とは、最近もお会いになってますよね」

後ろめたい思いを隠して、ここはカマをかけてみた。

「会ってあらたまって何かを話したというわけではありませんが、おっしゃるように、姿は見かけました」

予想が半分外れた。

確かに拉致を依頼した。だが、兵江に逃げられ、いっさいの顛末の報告を受けて以来、山県と特別に話をしたことはないという。

「姿を見かけたというのは？」

「はい、この近くの通りで。声をかけようとしたのですが、向こうから姿を隠した感じで。でもそのときは、わたしに気づかなかったのかなと思っただけですよ」

「気づかなかったのかもしれないね。で、それは、いつのことですか」

「昨日の、午前十時ごろだったと思います」

惨劇があったのは、その日の深夜だ。

「そうでしたか」

やはり山県は、この温泉街に来ていたということになる。

「この旅館は、その日の宿泊予定はどうされてるんですか」

客に行き届いたサービスを提供しようと思えば、スタッフの全員が、一日の予定を把握しておく必要があるのではないか。その方法を聞いている。

「はい。それは、帳場のホワイトボードに書いております」

「いま、そのホワイトボードの場所に行っても構いませんか」

「ええ」

帳場に足を運ぶと、ボードは昨日の予定のまま消されていない。

兵江と古谷野の部屋は、交換する前の室名のままだ。

「これは、廊下側からなら誰でも見ることが出来るわけですよ」

庭からでも、双眼鏡を使えば外の通りからでも、自由に覗くことができる位置にあった。庭木は、完全な目隠しにはなっていない。

「はい。朝みんなで一緒に確認しますが、途中で忘れることもあります。勘違いしても困りますから、いつでも見えるようにします。ます」

もつともなことだ。

「それで、今日の予約客は？」

「みなさんに事情をお話しさせていただいて、他の旅館に受け入れていただくように手配したんです。お客様にとっても、その方がよいと判断しまして。番頭さん、予約のお客様には、全部もう連絡は終わりましたか」

「あと二組さんが、どうしても連絡がつかないんです。仕方ないんです、こちらにこられた時点で、事情を説明してお詫びして、宿を移つてもらおうようにいたします」

「そう、お願いね」

一応、警察の実況見分は終わっていた。事件があった部屋だけはそのままに現場を保存しておくようにとの指示を受けているが、宿は広く部屋数も多い。やろうと思えば営業は可能な状態であった。

「なるほど、老舗旅館の良心ですか」

「そんな大袈裟な意味はありません。客商売ですから、当然のことだと思つてますわ」

確かに、事件のことを隠して客をとつても、すぐにあとでニュースでわかることだ。その方が信用を失う意味があるだろう。まずは宿の方が率先して別の旅館を手配した方が、予約客としても気持ちがいいに決まっている。客の方が、どうしても風天閣に泊まりたいれば、用意された宿を断ればいいだけの話だ。

「それにしても、兵江に死なねばならない理由はなかった」

山県のことを、許せないという思いが溢れた。

「ごめんなさい。わたしが悪いんです。わたしが兵江さんを殺したようなものです」

女将が、突如、泣き崩れた。

「深夜、何か物音のようなものは？」

問いかげに、女将は激しくかぶりを振った。

通いの者は別として、女将と他の数人は宿の建物内に住み込んでいるが、誰も異変に気付いた者はいないとのことであった。

「わたしが山県に余計なことを頼んだばかりに……」

しゃがんで右手を床についた、その肩が小刻みに震えていた。

「わたしが、わたしが……」

小さく繰り返した。

事の起こりはそうかもしれない。だが今回のことは、彼女が山県に拉致を依頼したことは直接は関係ないことだった。原因を探せば、兵江と古谷野が泊まる部屋を交換していたことだ。もともと、部屋を交換していなければ、また別の事件が起こっていたことが予想されるのだが。

とにかく、事態はシナリオとは異なる展開となり、山県と兵江は流れて戦った。互いに、相手から自分と同じ野獣のにおいを感じ取り、まるでこうなることが宿命であったかのように、拳をあわせたのだろう。女将のせいでないことは明らかだった。

猿渡の脳裏に、闘志を秘めたふたつの影が投影されていた。影は静かに構えを取り、ゆったりとした動きは、共に、ゆるぎない自信に満ち溢れている。

猿渡は、たまらず、激しく双眸を閉じた。

敗れた兵江としては無念だったろうが、彼にしても、女将を恨んで死んでいったわけではないだろう。

「今日は、色々と嫌なことも聞いてしまいました。正直に、誠実に話していただいてありがとうございます」

猿渡は、泣き崩れたままの女将を残して風天閣を辞した。

(五)

午後六時半。暮会所ドラゴンに戻ると、綾小路富子がブランデーのロックを盆に載せて運んできてくれた。脇にボトルを挟んでいる。

「大変でしたわね」

「綾さんがこんなことをしてくれるなんて、どういう風の吹き回しかな」

「お疲れでしょうと思いましたが」

雇い主にサービスしながらも、牢名主さま然とした威厳は崩さない。

「ありがとう」

ドラゴンの席は、まだ半分ほどは埋まっていた。大体は、見覚えのある常連だ。

片隅の席で、ボトルとアイスペールを並べてひとりで飲んでいると、珍しく親しく話しかけてきた。

「本当に驚きましたわ」

「ああ、兵江のヤツ、死んじまったよ」

ふう、と息を吐いた。

「また、どうして兵江さんが。犯人はわかってるんですか」

「警察が調べている」

「そうなんですか」

「ただ、俺には見当がついている。兵江を殺したのは、山県という男だ」

「山県……」

「知ってるのか」

「鷺尾夕子の幼馴染」

「綾さん、何でも知ってるんだな」

「長く生きてるだけです」

怪老は、不敵に口元から金歯をのぞかせた。

「ずいぶん以前から姿を見かけなくなっていたんですけど、最近になって、また……」

「寒い国で、訓練を受けていたらしい」

「訓練って、何の？」

「特殊作業員。飛び切りの腕前らしい。表向きは、科学雑誌の記者だよ」

「でも、何で兵江さんが、その山県に？ まさか鷺尾夕子が、弟の恨みを晴らしてくれと頼んだ？」

「いや。そう思うのはもつともだが、どうも、事件は、はずみで起こった。本当のターゲットは、多分、代議士の古谷野先生だったんじゃないかな」

「え？」

「先生のごことは、虎の意を借るキツネ。吹けば飛ぶような腰巾着くらしいにしか思ってたんだが、昨夜、一緒に飲んで、意外な面を見た。まず物事をよく見ている。洞察力だけでなく、行動力もある。やるときはぐいぐいと、多少強引でも、やる。表舞台でもそれなりのご活躍だが、裏では、その何倍も活発に動いているんだろうな。そうやって、政治の世界で自分の思いを実現してきたんだ。やり手だよ」

「よくわかりませんわ」

「そんな男だから、当然、彼のことを極めて邪魔な人物として快く思っていない勢力だってあるさ」

「邪魔者だったんですか」

「野党の一部からは、寝業師と呼ばれて嫌がられているらしい。そ

れだけ実力があるということだろう」

「それも、裏工作で」

「あと一步のところまでいって、土壇場で彼が動いてポシヤった法案は少なくないらしい」

恨んでいる人間がいても不思議はないのだった。

「どうでも政治の舞台から抹殺したかった？」

「ああ、多分」

「でも、命まで取る必要があったのですか」

「さあ、どうか」

「要は、消えてほしかったということ？」

政治の世界から消えてもらえばそれで済む話だったが、それが難しいのなら、この世から消えてもらうのもやぶさかでない、というわけだったのでだろう。

「山県たちにとつて、悲願ともいえる法案の問題が横たわっているからな」

「それって、もしかして、例の、選挙権の話ですか」

ぽつりという。

「綾さん、詳しいんだな」

曖昧に笑った。

「猿渡さんも？」

「いや、俺は政治には興味がない。専門的な知識もないし、意見なんかはないよ」

するりと逃げられて、牢名主様は不満そうな顔をした。

「おや、綾さんは推進派なのかい」

それは猿渡の動物的勘だった。

富子のこめかみが、ピクリと震えた。

空気が固まった。

たまらず猿渡は席をはずし、奥から新しいグラスを持って戻ってきた。

「どう、一杯」

飲まないかと、女を誘う。

「いいんですか？」

まだ仕事中だ。

「構うもんか。俺の店だよ」

「あら。じゃ、少しだけ」

女も腰を下ろした。

対局中の客たちは、盤上の世界に夢中だ。

グラスを手にした女は、

「兵江さんの魂に」

「そうだな。今夜だけは特別だ」

そつと杯を掲げて、友を思い、口元に運んだ。

「まあ、餅は餅屋だよ。先生方にも、両方の意見があるようだし。しつかり時間をかけて議論して、適切な答を導き出してもらったらいいさ」

「まだその話を？」

「いや、こだわってるわけじゃない」

むしろ富子の気持ちを考えてのことだった。

荒々しい無数の棘に包まれていた心も、何杯目かのブランデーを空けたころには、少しは丸くなり、柔らかさを取り戻しつつあった。あらかた、客も神輿をあげていた。

「あら、役場の若い衆ですわ」

目で合図をされて店の入り口を見ると、立花の部下だった秋友が立っている。

「じゃ、私はこれで」

そそくさと、奥にさがっていく。

「ありがとう。おかげで、気持ち少し落ち着いたよ」

女の背中に声を投げた。

秋友は、ためらいながら猿渡のいる隅の席にやってきて、

「構いませんか」

「碁の相手ならごめんこうむるが、何か俺に話があるのなら、構わんよ」

秋友はほっとしたような顔で、

「ありがとうございます。じゃ……」

さつきまで別の主がいた席に腰を下ろした。

「突然、失礼します」

夕方六時のニュースで事件の速報を見て、町長から、何でもいからいってこいと命令されたのだという。

「そういうわけか」

白竜位戦前夜祭の夜からのことを、一度冷静に整理しておくのもいいかなという気になっていた。

「どうぞ、インスタントですけど」

牢名主様が珈琲を運んできて、そのまま背後に立った。

「兵江さんの吊い合戦、なさらないとね」

猿渡の心を見透かしたように煽り立てる。

「そうだな」

素直に応じて、

「秋友くんも、何か持って帰らないと困るだろうし」

手にしていたグラスを脇に置いて腕を組んだ。思い出すような目をして、解説を始めた。

「まず、前夜祭の日の夜、兵江は山県に誘われて散歩に出たわけだ



が……」

それは、山県たちが兵江を拉致するためのシナリオの始まりだった。シナリオに書かれてなかったのは、あの時間に、立花課長がシヨベルカーを使って作業していたこと。

「壊れてないところの擁壁の石まで外してるところを見せられたら、普通なら、誰だって怪しむわけで。山県が聞いただけしたのはごく自然な流れだったろうよ」

「そうですね」

うなずきながら、話の先に気持ちいが飛んで、息をのむ秋友。

「現場で揉めて、山県が濁流の中に落ちたのは単なる事故だった。だが、立花課長は気が動転した。突き落としたわけじゃないが、自分を失って、どうしていいかわからず立ち尽くしていた。おろおろしている、同行の兵江が、少し走って流れる山県を追ったあと、突然しゃがみこんで動かなくなっただな。シナリオどおりに、彼が飲んだ珈琲には、強い睡眠薬が入られてたんだから」

「睡眠薬ですか」

「兵江の話だと、山県が激流に落ちて、立花課長が助けを呼ぶ気配がなかったところまでは覚えていますが、そのあとの記憶がないということだった」

「そうなんですか」

「課長さんは、自分が山県を殺したと疑われることを心配したかもしれない。そして、ここにはいけないと考えたんじゃないかな。だから、無意識にその場を離れた。離れたが、考えてみれば兵江は倒れたままだ。これはやっぱり放置しておけないと、思い直して戻ろうとした。そのとき、兵江が拉致されるところを見たんだろう」

立花は、どこからともなく現れた男たちが、倒れた兵江を運び去るところを物陰から見ている。そうしたら、翌日に失踪のニュースだ。警察にすべてを話さねばという思いはあったろうが、自分の目の前で濁流にのまれた山県のことを思うと、結果的に、彼はそうはしなかった。

「そのうちに、何者ともわからぬ相手から役場に電話が入ったんだな。あの夜のことを公にしてもいいか、と」

突き落としたわけじゃないが、それならなぜ黙ってた、という話になる。

「よく立花さんだと、連中にわかりましたわね」

怪老の疑問に、

「うん。作業着には役場のマークが入っている。それに、ちょっと前まで、課長は山県と前夜祭会場と一緒にだった。役場の人間で前夜祭に出ていたのは彼だけだからな」

山県が女将の鷲尾夕子に尋ねれば、それが立花だということくらい、すぐにわかったはずだ。

「でも、山県は濁流に飲まれたんじゃないんですか。それに、どうして彼が女将さんに……」

秋友の問いに、女将が帰化していること、山県とは中学の同級生だということ、山県はしばらく国外で訓練を受け、筋金入りの工作員として戻ってきたことなどを説明し、

「川に落ちたくらいでくたばるような男じゃないらしい」

だが、山県が無事だったことを立花は知らない。連中から、どういふ要求が突きつけられていたかはわからないが、はじめは立花が脅迫されていたのだ。

「山県にしてみれば、恨みがあったわけじゃない」

利用できるものは利用してやれと、そんな軽い気持ちで電話をかけていたのだろう。

「だが、そのうちに、攻守と場所を変えた」

「こっちだって、あんたらが白竜位を拉致したところを見たぞ、と  
いったのね」

怪老も興味津々だ。

「そのとおり。多分ね」

立花は、相手が寒い国の怪しい組織とは知らずに、逆に攻勢に転じた。

「その電話の相手が、あの山県とも知らないでね」

そういう仕事は、おそらく山県は自分でやったはずだと思う。

「だったら、課長はなぜ自殺を」

秋友の当然の質問に対して、

「だから、自殺じゃないと思うんだ。課長さんは、連中を追い詰めすぎた」

自殺ではなく殺人だと、自信ありげに断言した。

「そのことの確証を得るために、警察にいったんだ」

猿渡は、鑑識の溝曾路とのやりとりをかいつまんで説明した。

「いまはまだ、俺の勝手な推測だが、いずれはつきりさせるつもりだよ」

「そうですか、よろしく願います」

ドラゴンの電話が鳴ったのはそのときだった。

「古谷野先生からです」

定位置に戻った牢名主さまが呼んだ。

「わかった」

駆け寄って受話器を受け取る。

「はい、猿渡です。いえ、こちらには、はい。そうでしたか」  
短い応答の末、

「風天閣の女将がいなくなったらしい。こっちに来てないかという話だった」

「どうして古谷野先生が」

「先生は、女将の身元保証人になってる。その関係で、知らないかと風天閣から照会がいったらしい」

「いなくなつたつて、どういうことかしらね」

「こっちが綾さんに聞きたいよ」

「おや、そうですか」

不敵に金歯をのぞかせて、

「今度の事件には、夕子さんは関係してないということでしたわよね」

「多分ね」

「ということなら、女将は、逃げる必要はないわけですわ。だとしたら……」

「だとしたら？」

そう応じた直後、猿渡が、アッ！ という顔になった。

「彼女は、追いかけてる？」

「誰かを、ね」

牢名主の顔に戻って、にやりと笑った。

「どういうことですか」

秋友は、何が何だかわからない。

「悪い。説明はあとだ」

猿渡は、急いで携帯を取り出す。通話ボタンを押して、まだコールが始まる前から耳にあてて出るのを待っている。

「おう、榊か。山県のヤツ、どうなった」

あいさつ抜きで要件を切り出した。

「なに、わからない」

チツと舌打ちをして、

「国外に脱出しようとしているんじゃないのか。どうだ」

電話口の向こうで、何を根拠に、という気配。

「風天閣の女将がいなくなつた。彼女は、兵江の死に責任を感じている。自分が殺したようなものだといって泣いたんだ。馬鹿、自殺なんかするもんか。山県の動静を知っていて、追つた可能性があると思わないか」

ちよつと待てという榊。

「鳥取の海岸が怪しいわね」

富子の言葉に、受話器のこっちと向こうとが同時に反応した。

「行ってみる価値はあるぞ」

電話の向こうも、考えている。

「行くか」

榊も決断した。

賭けだった。

「よし、それなら現地でおおう」

携帯を閉じたあと、猿渡は悔しそうに唇を噛む。

「だまされた」

絞り出すようにいって、中空を睨みつけた。

「彼女は、山県とは最近はお話をして話をしたことはないといった。俺は単純だから、その言葉をまんまと真に受けた」

だが実際には、鷲尾夕子は山県と会っていた。山県がどこにいて、この先どう動くつもりでいるかも知っていたのだろうと思う。

「だまされたよ」

悔しそうにうめいた。

失敗を取り戻すためにも、いまは鳥取に急ぐしかない。

とはいえ、先ほどから飲んでいられる。鳥取までの足をどうしようかと考えていたとき、ドラゴンにまた新たな来客があった。

「女将の赤のフェアレディーZがない」

入り口で仁王立ちになっていたのは古谷野だ。中に入る気はない。

「白竜位の仇討ちには、ぜひわたしも参加したいんじゃないか」

「先生も、女将は山県を追ったとお考えですか」

「あの女の性格は、あんたよりは知ってるつもりじゃ。自責の思いがどんどん膨らんで、いたたまれなくなつたに決まってる」

そして、その思いは自分もまた同じだと、顔に書いてある。自分が兵江に部屋を申し出ていなければと、古谷野の後悔は深い。

「女将はどっちに行つた。猿渡さん、表にわしの車を待たせとる。」

いっしょに行つてもらえんか」

「もちろん。乗せてください、お願いします」

呆然とする秋友に、話は帰ってからだと断つて、古谷野とともに外に飛び出した。

## 追跡

(一)

午後七時半。クラウン・アスリートの運転席には秘書の福島真紀子がいた。エンジンはかけたままだった。

「じゃ、すぐに山陰に向かいますよ」

心なしか、古谷野も緊張しているようだ。

「お願いします」

「聞いたとおりだ、たのむ」

「はい」

男勝りにアクセルを踏んだ。車が急発進すると、猿渡はすぐに携帯を取り出す。

「おう、俺だ。いまから車で、鳥取砂丘に向かうぞ。あそこが一番接触の可能性が高いと思う。相手が潜水艦にしても、船にしてもだ。そうなると、どうしても海上保安庁の手助けがいる」

「あいかわらず強引な注文だなあ、兄弟」

榊の困った声もれてくる。

「どこまで要請に応じてもらえるか分からないぞ。まあ、不審船の追尾くらいはやってくれるだろうよ。だが、相手が潜水艦だったらやっかいだな」

言葉が重い。

「船や潜水艦を臨検してくれとは頼んでない。海上保安庁の船には、海上にいてもらうだけでいい。それだけで、山県は身動きできないはずだ。連中の動きを止めておいてもらえれば充分だ」

威光を拝借するだけだ。それくらいの要請に、何をためらうことがある、といっている。

「なるほど兄弟、了解した。直接逮捕するのは、おいらたちの仕事というわけだ」

「なんだ、わかってくれてるじゃないか」

これからの仕事のイメージのすり合わせをしながら、猿渡は、さらに榊に新たな仕事を頼もうとしている。

「高速や幹線道路に設置されてる、通行車両のナンバープレートを自動的に読み取る装置があるよな」

「ああ、Nシステムのことか」

「それだ。それで、風天閣女将の赤いフェアレディーズを探してほしい。彼女を追えば、正確な場所に案内してもらえる」

そういって、フェアレディーズのナンバーを伝えた。

「なるほど、そっちはお安い御用だ。すぐに手配しよう。東京での

おいらの仕事はそれだけかい」

「ああ。で、おまえは、どうやって来るのかな」

「部下を連れて、ヘリポートに向かっている。ジェットヘリを手配した。こつちを八時に出たとして、時速三百キロメートルということだから、到着は夜の十一時くらいかな。兄弟よりは少し遅れると思うが、最大限、急いでもらうよ。あ、そうそう。報告が遅れたが、兄弟のおかげでおいらに対する御茶ノ水先生の誤解が解けて、ずいぶん協力的になってくれたよ。むやみに警察は信用できないというあの先生の流儀については、おいらも実は同意見なんだ。いろんな人間が、内部のどこに紛れ込んでいても不思議じゃない、大きな組織だからな。警察の人間だからといって、無条件に信用するのは危険なんだ。ま、今回協力してもらって、すっかり意気投合したよ」

「それはよかったが、それで、結果はどうだったんだ」

「うん。やはり白竜位に渡した方のロボットだったそうだ。おかげで、殺人で山県の令状も取れたよ」

「そうか、了解だ。俺たちの見込みどおり、ヤツが国外脱出を目論んでいるとしたら、まちがいに今夜が勝負になる。じゃ、現地で会おう」

携帯を仕舞うと、猿渡は古谷野に向かって、これまで調べたことの要約をかいつまんで説明した。鳥取は、綾小路富子のサゼツションによるもので、猿渡も柗も有力と判断はしたが、賭けであることも話した。

「わかりました。大丈夫、当たってますよ」

そうは応じたが、言葉とは裏腹に、古谷野は不安に満ちた顔をしていた。

福島真紀子が、

「先生、わたしのバッグに、山陰の地図があります」

どこへ向かえばいいか、大まかな場所を指示してほしいといっている。

「そうだな。猿渡さん、これ、見ていただけますか」

地図を手渡す。

「普通に考えると、砂丘の端なんだよな。身を隠せる場所があって、波打ち際に近いところ、かな」

考えを口にしながら、地図を広げた。

「とりあえずは、白兔海岸に向かってください」

「白兔海岸ですか。山県とやらの化けの皮をひん剥いて、丸裸にしてやるにはふさわしい場所ですか」

本居宣長は『古事記伝』で、因幡の白兔のことを裸兔と記している。古事記には素兔と記されており、素をシロと読むことから後に因幡の白兔として伝承されるようになったものの本にある。ウサ

ギは和邇を欺き海を渡ろうとしたが、渡りきる直前で気づかれ着物を剥ぎ取られた。そこへ大國主神の兄である八十神たちがやってきた。兎が彼らの教えに従って潮に浴し風に吹かれると身の皮が裂け丸裸になったが、最後は、大國主神によって助けられるという伝説だ。素兎の素とは、色の白ではなく、裸の意なのであった。「いや、白兎は多分、通過点。通るのは念のためです。何もなければ、そのまま海岸沿いに東に向かって、山県を丸裸にするのは鳥取砂丘になるはず」

男たちの会話を聞いて、

「わかりました。それでしたら、あとしばらくは大丈夫ですから、山陰が近づくまで、少しお休みになられてはいかがですか」

福島女史が、遠慮げみに提案した。

「おう、そうじゃな。どうですか猿渡さん」

「じゃ、福島さんには申し訳ないけど、そうさせてもらいましょうか」

猿渡は、胸の前で腕組みをすると双眸を閉じた。ドラゴンで飲んだブランドーが、じんわりとした酔いを運んできてくれてもいた。考えねばならないことは少なくはない。中には、考えても仕方がないこともある。何が大切なことか、しっかりと整理する必要がある。だが、いまは少しだけ眠りたい気分だった。

携帯が鳴ったのは、それから三十分ほど経ってからのことだった。瞬時に、目が覚めた。

「おう、榊か、すまない。そっちは大丈夫か。こんな時間だが、ジェットヘリは夜には強いのか」

「オーケーだ。まだ、夕暮れの明るさがあるよ。それに、暗くなったらサーチライトも装備してある」

「そいつはよかった。で、ナンバー読み取り装置の方は暗くなっても平気かい」

「Nシステムは赤外線を使っている。大丈夫だとも。それに、優秀なスタッフがデータを解析してくれている。すぐに見つけてくれたよ」

「さすがだな」

予想を越える早さだった。

「上等だよ。それでいま、Zは？」

「ああ、蒜山から大山を通過したところまでは確認できた。どうやら兄弟の見込みどおりのようだな」

賭けの答が出た。

横で古谷野が、うんうんとうなずいている。

ハンドルを握る福島女史も、口元をゆるめた。

「そうか、了解だ」

「東京では一味を取り逃がしたんだ。これくらいはさせてもらわないと、兄弟に許してもらえないだろうと思っただろ」

おそらく山県は、仲間といっしょには東京に戻らなかった。だから榊が取り逃がしたことはないのだが、猿渡は、友の気持ちをおまじりながら受け止めた。

山県は、兵江との戦いで、肋骨くらいは何本か折られていたのかもしれない。そんな気がしていた。兵江にしても、ただ手をこまねいて五体を攻撃にさらしていたわけではあるまい。激しく反撃もしたはずだ。であれば、あるいは山県も相当のダメージを受け、そのことが彼を、仲間と別れて直接山陰に向かわせた理由のひとつかなとも思う。

「Nシステムの管理スタッフには、このまま追跡を続けてもらう。情報が入り次第、また連絡するよ」

「よろしく頼む」

カチツと携帯を閉じると、ふうくと、細く長い息を吐いた。自信はあったが、まずはホッと胸をなでおろした。とはいえ、本当の勝負はこれからだ。

「猿渡さんは、しかし、えらいところにまで人脈をお持ちなんですか」

「ええ。俺はたいしたことなくても、まわりの優秀な連中に助けられて、ありがたいことだと思ってますよ」

率直に、感謝の気持ち<sup>かたき</sup>を吐露した。

「おかげで、着実に<sup>かたき</sup>を追い詰めてる」

古谷野が、自らの言葉をしみじみと噛みしめた。明らかに、胸にこみ上げてくるものがあるようだ。

「俺はね、先生。いま、腹が立って仕方がないんです」

「わかります、わかります。猿渡さんは、大切な友人を殺されたわけですから」

「いや、そういう意味じゃなくて。山県のことじゃないんです」

これは自分に対する怒りなんだといった。

「ほう……」

どういうことかな、という顔を向けた。

「この国には、大きな戦争がありましたよ。俺が生まれる前の話で、俺たちには何の責任もないはずなんです。戦争が終わって、もうずいぶんの年月が経ちましたが、その傷跡は、まだ完全には癒えていないということなんです」

「お言葉だが……」

古谷野が遮った。

「いま責任という言葉を使われたが、申し訳ないが、わたしには少し反論がありますよ。戦後教育の中では、勝者の論理で、敗者につい



て様々に解説され啓蒙もされてきましたが、あれは、我が国が追い詰められ、世界から孤立させられて、生き残るためには仕方のない戦争だったというのが我々の立場です」

古谷野は、ここは譲れないという厳然たる態度をみせた。

「知ってます。財界のパーテイーで、何度となく、そういうお考えの社長さんたちの議論は耳にしたことがありますから」

あの大戦が、独善に基づく侵略戦争だったのか、アジア経済圏全体を守るための大義の戦争だったのか、いま自分は、その問題を議論しようとしているわけではないんだと断って、

「俺はね先生、子供のころ、近所の悪童たちと一緒にあって、ひとりの女の子をいじめてましたよ。みんなでその子を取り囲み、逃げ道をふさぎ、汚い言葉で歌うように、大声で、はやしたて……」

それは、当時の大人たちの口真似だった。いまにして思えば、軽率といえば軽率だが、子供にはそんな分別はない。

「何もわかってなかった。姿を見るたびにいじめてましたよ。地域全体が差別を助長していた。俺たちが、憎しみを育てたんです」唇を噛んだ。

差別される側の思いなど、考えたこともなかったのだった。

「山県のような男を生み出したのは、俺たちなんですよ、先生」

そんな自分に、無性に腹を立てているのだといった。

「なんと……」

思いあたることがある顔をして、

「そういわれると、言葉もありませんな」

自分の方が、何倍も何倍も罪が重いだらうと認めた。

「じゃが、それとこれとは別ですぞ」

きっぱりと断言した。

「わしらが追っかけとる相手は、鬼畜。人間ではないんじや」

猿渡は、静かに首を振る。

「同じ人間ですよ、先生。もちろん。山県を許そうなんて気持ちも毛頭もうとうありませんよ。そんな気はさらさらないが、でも、俺たちが作り出した敵なんだぞという反省は、やっぱり頭のどこかにある。あのシオニズムだって、無から生まれたわけじゃないでしょう。ヨーロッパ社会の、ユダヤ人に対する差別や偏見が、シオニズム誕生の負のエネルギーになっているんだと思うんですよ」

だから、ムラムラと湧き上がる怒りは、抑えようもない激しいものなのに、どこにぶつけたらいいのかわからない、もどかしい怒りなんだと、噛みしめるように述懐した。

「社会を、そういう時代に導いていった神の責任なのか、やはり、俺たちが悪いのか」

やるせない思いを抱いたまま、腕を組み、双眸を閉じた。

「あんた、むずかしゆう考えすぎとる」

古谷野も瞑目した。

「あんたには、ついていけん」

突き放すように言葉を吐き出した。

そんな男たちの思いとは無関係に、クラウン・アスリートは夜の闇を切り裂いて疾走する。

「そういえば……」

ついていけないと断じたばかりの古谷野が、思いなおしたように口を開いた。

「国会議員になって、東京で過ごす時間が増えて、先輩議員に連れられて食事に行った先で、よく、『あたしはちやきちやきの江戸っ子でね』という言葉を目にしたよ。そういう、江戸っ子を誇っとる人らにいわせると、江戸に三代続けて住んでおらんと、江戸っ子じゃないらしい」

その言葉の裏側に、心の貧しさを感じたのだという。

「ちやきちやきの……というときのちやきは、嫡男の嫡がなまったものだといわれてますよね。ということは、単純に三代続いたというだけではダメで、三代続いた家の長男の、そのまた長男でないと当てはまらない理屈です。厳密にいうと、所在地も下町でない」と猿渡も、自然に話に乗ってきた。

「なるほど、そうでしたか。ま、そんなことで、わしもなんとなく棘を感じたわけですわ。自分たちは生粋の江戸っ子だという自己紹介の裏側で、おまえたちは住所は東京でも、気の毒だが江戸っ子じゃないぞ、と。そういって、悦に入ってるんですな。わしなんか、救いようのない生粋の田舎の芋代議士と思われておったんでしょな。ま、そのとおりではありますな」

思い出すようにいって、冷笑している。

「次元こそ違え、どちらも、ゆがんだ選民意識が根底にありそうですね」

猿渡もうなずいて、

「山県たちをいじめていたのも、考えてみれば、まったく根拠のない恥ずべき選民意識からですよ」

「そうじゃな」

古谷野も同意したが、

「じゃが、たとえそうであったとしても、許せん」  
きつぱりといった。

「あんただって、山県とやらを許せん思いはわしと同じじゃ。そうじゃろうが」

激しく激昂している。

「おっしゃるとおり」

もちろん、この期に及んで、許すつもりなど微塵もなかった。

「あなたの欠点は、余計なことまで考えすぎることじゃ。人間、抜きんでた長所がその人の欠点にもなるというが、まさにその実例じやな」

今夜はもう、むずかしい話はやめて、単純に、山県を捕まえることだけ考えようと提案し、グイと右手を出してきた。

猿渡は、その手を無言で握り返す。

男たちは、今夜はじめての握手を交わした。

力を込めて握りながら古谷野の表情を窺うと、我が意を得たりという面持ちで口元をゆるめている。

つられるように、猿渡も白い歯をみせた。

しばらくは、静かなドライブが続いた。

「すまんが、この先のサービエリアで……」

古谷野がトイレ休憩を提案した。

「はい、わかりました」

まもなく車は本線から外れて、木々に囲まれた長距離トラックの群れの中に並んでエンジンを止めた。

古谷野が小走りに出ていくあとから、シートベルトを外しながら猿渡が、

「こういうところに隠れていたら、いつまでだって無理なく潜んでいられる気がしてしまうなあ」

「そうですね」

福島女史がうなずく。

「しかし、男っぽい運転をされますねえ」

率直に感想をいうと、

「若いころはナナハンを転がしてたんですよ」

恥ずかしそうに微笑んだ。

「え、ナースをされてたころの話ですか」

「ご存知でしたか。そうです。病院の職員駐車場には似つかわしくない、モンスタースタイクが一台、いつも停まっていたというわけですよ」

悪戯っぽく、白い歯を見せた。

「この車も、先生がクラウンを買い換えるとおっしゃったとき、わたしが勝手にアスリートを注文したんですよ」

「人は見かけによらないもんだ」

猿渡は、好ましい笑顔を向けながら、背中ドアを開めた。ナナハンにまたがっていたというのは意外だったが、元々、彼女には芯の強さを感じていた。案外、お似合いだったかもしれないと思う。

最後に降りた女史が、

「ついでに何か飲み物を買ってきますが、ご希望のものがありません」

たら」

ドアをロックしながら問いかける。

「じゃ、珈琲のホット、ブラックを」

「わかりました」

うなずくなり、小走りに売店の方向に向かった。古谷野を待たせないようにとの配慮だろう。いつからナナハンを降りたのか知らないが、いまはもう完全に代議士秘書だ。

「間に合うだろうか……」

暮れはじめた空を仰いだ猿渡の脳裏には、これまで何度となく訪れたことのある鳥取砂丘の風景が浮かんでいた。その絵にかぶさるように、兵江の思い出が甦ってくる。彼とは一度だけ、大山から山陰へと旅をしたことがあった。浜村温泉の民宿で、夕食から朝食まで新鮮な蟹責めにあいながら、描ききれない未来について語り合った。

何としても山県を捕まえねばならない。

(二)

午後十一時。アスリートは、鳥取砂丘にいた。

日本海の荒波と向き合うこの地には、砂の波に沿うように、延々と松林が続いている。これは、古くからここに暮らす人々が、防砂林目的で営々として植林を続けてきたものだ。砂丘は貴重な観光資源ではあっても、風に乗って運ばれてくる砂は、暮らしには無用のものだった。

鉛色の海と、砂金のようなきらめきを放つ砂、深い闇に沈む漆色の松林が、クラウンのヘッドライトに照らし出されていた。海と砂と松林の横長の帯が、照明によって縦に切り取られ、独特のコントラストを見せている。

いま停車している地点は、砂丘の東のはずれ。松林が、最も海岸線近くまで迫っているところだった。白兔海岸を過ぎ、ここを目標に走ってきた。

「結局、フェアレディーズとは出会いませんでしたね」

福島女史が申し訳なさそうにひとりごちた。

もちろん、彼女のせいではない。

「柵によると、米子ジャンクションから山陰道の名和インター方面に、海沿いに走っているとところまでは確認できたとのことだった。だから、この近くに来ていることはまちがいないんです。案外、すぐそばにいるのかもしれない」

猿渡は、闇に目をやった。

鷺尾夕子は、自分たちにとっての案内役に過ぎない。彼女は、山

県にたどり着くための手段だ。しかし、仮にいま山県を発見しても、うかつには動けないと思っっている。相手は、少林寺拳法の達人だった兵江を倒した男だ。

発見したとしても、柵たちを待つしかない。

「いまのうちに、隠れている場所だけでも見つけておけたらいいんだが」

あらためて、地図を広げて調べてみる。

「こっちな」

しばらく凝視していたが、

「もう少し東に、ゆっくり走ってみてもらえますか」

地図によると、海岸からは少し離れるが、松林の深そうな場所がある。砂丘周辺は、砂地を利用したラッキョウや長芋の栽培が盛んなのだが、目を付けたその場所は、近くに畑もない。人目につきにくい待機場所としては、考えられなくも無いと思った。

「わかりました」

車は、ごく低速で動きだした。

しばらく進んで、

「このあたりでいいでしょうか」

地図の場所に近づいたようだ。ここまでくると、道路沿いでも明かりはめっきりと少なくなる。

「もう少し。通り過ぎて、また戻ってくる感じをお願いします」

「わかりました」

ゆっくりとクラウンが動く。通りには、ほかに通行車両は見当たらない。

「身震いしますなあ」

古谷野がたまらず緊張を吐露した。

「正直、わしは怖い」

「俺だって、同じですよ」

追っている相手は、只者ではない。

「そうですか。猿渡さんも、同じ思いですか。それを聞いて少し安心しましたよ」

「あたりまえですよ」

福島女史は、車をじわじわと進めていく。

しばらく行くと、

「あ、ここがいい。停まってください」

ヘッドライトも消させた。

「このまま、待っていますよ」

「猿渡さん、どうしてここで」

問いかける古谷野に対し、

「あれです」

指差した先には、沖合に光の固まりがあった。

「海上保安庁の巡視船だと思っんです。あれが停泊しているということは、きつと、近くの海に何かいますよ。不審船が沖合いにいるとしたら、巡視船の位置が岸に近すぎる。この様子だとお迎えは潜水艦かな」

せつかく迎えが来ていても、目の前に巡視艇がいては、潜水艦も浮上するわけにはいかないだろう。山県も動くに動けまい。それが猿渡の狙いだ。

「どこかにフェアレディーズがいてくれたら、絶対なんだがな」

注意深く周囲の様子を伺っているが、暗くてわかりにくい。

「もしかして、あれ、車じゃないかしら」

女史の視線を追うと、松林の中、薄闇の向こうに、かすかな光の反射のようなものが認められた。

「どうも、そのようですね」

「ふむ」

男たちも目を凝らした。

「虫が鳴き止みましたわ」

ハンドルを握ったまま、ささやく。

「あ、ドアが開いたぞ」

その瞬間、ルームライトが点いた。

「やっぱりだ」

車体の色は赤い。

ところが、すぐには降りる気配がない。

カチャカチャと、かすかな物音だけがしている。

やがて、ザクツと砂を踏む音だ。

「誰か外に出た」

ボタンとドアが閉じられ、辺りは再び闇に包まれた。

「鷲尾夕子かな」

猿渡が呟くと、

「男性ですわ」

なるほど、ザクザクと砂を踏む音が、男の歩き方だと教えてくれている。

「海の方に歩いているようだな」

それが山県であることは、容易に想像できた。

ところが、その歩き方がおかしい。時折、不自然にリズムが崩れるのだった。

「女将はどうしているんだろう」

「それより、ここにはわしらの車があとから来た。気づかれていますんじやないか」

古谷野が不安げな顔をあげた。

「ここに車が停まっていることは、もちろんわかっているでしょうが、俺たちが乗っていることまでは知らないでしょう。車のシルエットから、恋人同士か何かだろうくらいにしか思っていないはず」  
「なるほどな」

ほっとしたようにいって、女史が買ってくれた缶珈琲をグビリと口に含んだ。

「榊たちが来るまでは、動かない方がいい。ここにじっとして、しばらく様子を見ていきましょう」

もっともな判断だった。

「でも、移動しないでしようか」

女史が、心配を口にした。

「目の前に海上保安庁の船が出張っているのは、彼だってわかっているはずですわ。もし乗船をあきらめて、予定を変更したら……」

そのことは、猿渡も考えていた。考えてはいたが、相手の力量を思えば、動けないのだった。自慢ではないが、腕には覚えはない。

「どうしたものかな」

これだという手も、思いつかない。

その時だった。

「あ、何か聞こえませんか」

遠くで、かすかに、確かに音がしていた。

「ジェットヘリだ」

猿渡は携帯を取った。

「もしもし、榊か」

「お待ちせしたな、兄弟」

「あいさつはいい。まっすぐ、海上保安庁の巡視船の方向に向かってくれ。砂浜に降りられるか」

かすかなエンジン音が夜の闇を震わせているが、ジェットヘリの姿はまだどこにもない。

「足場の状態によってはヘリでは着陸は無理かもな。機体が倒れる可能性がある」

「そのときは、飛び降りてくれるんだろうな」

「そのつもりだよ」

榊の苦笑いが伝わってくる。

「おう、あれか！」

クラウンのリアウインドウに張り付くようにして、古谷野が叫んだ。遠くに小さな光が現れ、強い照明が、斜め下の方向に向けられていた。

「先生」

そのとき福島女史は、男が、海岸線から急いで戻って来ている足音を聞いていた。

強く砂を踏む、ザッ、ザッ、という音だ。

「どうしましょう」

その問いには答えず、古谷野はもう外に飛び出していた。

「あ、先生！」

うろたえる女史。

「あなたはこのにいてください」

叫ぶと、猿渡も走りだしていた。まもなく古谷野に追いついた。

相手が逃げようとしていることを、ふたりとも明確に察知していた。

「止めんでください」

ここは身命を賭してでも、絶対に山県を逃がすわけにはいかない。その思いは猿渡にも伝わっていた。

「わかってます」

ふたりはそのまま走り続けて、フェアレディZにたどり着いた。海から戻る影の前に、毅然として立ちふさがって、

「おまえ、山県だな」

古谷野が叫んだ。

「なに！」

影が硬直する。

薄闇に透かして見ると、影は、松葉杖のようなものを脇に抱えていた。それで、歩行のリズムが崩れていた理由がわかった。兵江も、むぎむぎと一方的に倒されたわけではなかったことを知る。

「わしは古谷野忠雄だ。わしに用事があったんじゃないのか」

明らかに時間稼ぎをしようという意図で、挑発している。

「先生」

猿渡は逆に、車の中を示した。

「なに」

そこには、鷺尾夕子の無残な姿があった。運転席に座っているが、首だけが不自然に大きく傾いている。

「山県、おまえ、なぜこんなことを」

古谷野の声が震えた。

影は何も答えない。無言のまま、ゆつくりと、威圧するように砂浜を近づいてくる。

「その脚はどうした！」

とっさに言葉が出た。

男が立ち止まる。

おまえは誰だ、という顔をした。

「兵江にやられたのか！」

時間稼ぎのつもりだった。

影はゆつくりとうなずく。



「油断した。手ごわい相手だった」

おかげでこのざまだと、ぺっとつばを吐いて、

「古谷野先生、見上げた覚悟だが、それが命取りだ」

怒気を漂わせ、一歩前に踏み出す。

「危ない、逃げましょう」

猿渡がささやいた。

「いや、ここは逃げられん」

断固たる調子で宣言した。

「殺されますよ」

「構わん」

そういわれては、猿渡も、逃げるわけにはいかなかった。

「山県、何もかもわかつている。もう観念するんだ」

声高に叫んで、古谷野が影の前に立ちふさがった。

猿渡も声を上げる。

「立花課長を殺したのは、おまえだな！」

「それがどうした！」

影が、不敵に応じる。

「そして、兵江白竜位まで」

「うるさい！」

荒々しい仕草で砂を蹴った。

「まさかあの部屋に白竜位が寝ていようとは！」

その言葉で、古谷野が唇を噛んだ。

「仕掛けてきたのは白竜位の方だった。仕方なく戦った」

山県も大きなダメージを受け、本来の目的を果たすことなく立ち去ったのであった。猿渡が思ったとおりだった。結果的に古谷野は命拾いをしたのだ。兵江が古谷野を守った形になった。

「仕方がなかった」

山県も、いまいましそうだ。

この期に及んで、嘘とは思えない。

「うぬ……」

古谷野がうめいた。

腕に覚えがあったことが、兵江には災いしたことになる。

「それにしても、今夜は、幼馴染みの夕子さんまで。それでも人間か！」

猿渡が叫んだとき、影が動きを止めた。

「自首するよういわれた。断ったら、力づくでも出頭させるとま  
で！ 彼女のためにも思って、これまでも、なんだって願いを聞いて  
やってきた。それなのに、自首しろだと」

鬼神の形相で睨みつける。

「許せなかった」

遠くに見えていた小さな光は、いま、ぐんぐん大きな照明になって近づいてきていた。

山県が空を見上げ、異変に気付いた。

「まさか！」

猿渡を睨みつける。

「道をあける！」

男が叫んだ。

もはや、一刻の猶予もないことを悟った。

「……」

狂気の気迫に、思わずひるむ猿渡。

「いや、逃がさんぞ」

身を賭して、古谷野が言葉を振り絞った。

「逃げるなら、このわしを殺してから逃げるがいい」

毅然として立ちふさがる。

「先生、ダメです」

猿渡が叫んだ。

「邪魔するな。これはわしの仕事じゃ」

決断し、何者にも動じない男がそこにいた。

「上等だ」

影が、一歩前に出た。

そのとき、男の顔が、投光機が投げた光の世界の中でくつきりと浮かび上がった。太い眉に黒々としたあごひげ。

「くそっ」

目を射られて、山県がたじろいだ。

「もう逃げられん。観念しろ」

古谷野は一步も引かない。

「おまえ、夕子さんは幼馴染みだったのに！」

重ねて絶叫した。

そのとき、激しく砂粒が舞い上がった。

ジェットヘリの到着だ。たちまち、あたり一面が砂のトルネードに包まれた。

「うわっ」

猿渡が砂を噛む。

ヘリは、おびただしい量の砂つぶてをまき散らしながら、中空で巧みなホバリングに入っている。

「くそ」

山県がうめく。

「おお！」

古谷野の声と同時に、すぐにパラパラと人が降ってきた。中の一人が、猿渡めがけて真っ直ぐに走ってくる。

「すまなかつたな、兄弟。どうにか間にあつたようだな」  
降ってきた男たちは、すぐさま、砂浜の影を取り囲んだ。

「おのれ」

山県が、鬼になった。

「そうか。命の惜しくないのから来い」

悠然と、杖を投げた。

「あがいても無駄だ！ かかれ！」

榊の指示が飛んだ。

「くるか！」

取り囲む男たちの中心で、腰を低く身構えた男が戦闘の構えをとる。

と、次の瞬間、男の顔が苦痛にゆがんだ。

兵江の仕業だ。

猿渡が思わず奥歯を噛み締めた。

「油断するんじゃないぞ！」

榊が、部下たちに注意を促す。

相手の苦痛の顔で、隙が生じることを戒めたのだ。

百戦錬磨の猛将の姿が、そこにあつた。

「むうっ」

投光機から照射される強烈な光線が、男に突き刺さつた。

「おのれ！」

ゆがんだ顔は、脚の痛みなのか、悔しさなのか。

影が硬直した。

「もうこれまでだ、観念しろ！」

榊が懐から逮捕状を出して示したあと、高々と右手を上げて部下に次の指示を出そうとした瞬間だった。

「あ！」

猿渡が叫んだ。

光の輪の中で、男がくずおれていった。

「何かを噛んだぞ」

食いしばつた口元から、わずかに血が垂れている。

「馬鹿野郎！」

飛び込んだ猿渡が、山県の口の中に強引に指を突っ込んだ。

「やめておけ、兄弟」

「そうじゃ、その方がいい」

榊が遮り、古谷野も同調した。

「歯に何か、カプセルのようなもの……。毒じゃないのか！ 毒を噛んだんじゃないのか」

「うん。わかっている」

わかつたうえで、あえて、このまま死なせてやれと知っている。

榊は、逮捕したあとの処理の難しさを思っていた。古谷野も、問題が複雑にこじれる面倒を避けようとの、とっさの判断だ。

「あんなたちは……」

やりきれない気持ちで、猿渡は立ち尽くしていた。

(三)

兵江白竜位のお別れ会を主催したい人間は、複数いた。白竜位のスポンサーである株式会社桃源は、東京での開催を強く主張していた。関西棋院は、当然大阪でやりたいという意向だ。古谷野は、郷里であり白竜位戦第六戦の舞台となるはずだった風天閣がふさわしいとあって譲らない。

桃源は、では東京と郷里と両方で開催してはどうかと提案してきた。折衷案だ。

「そういうわけにはいかない」

古谷野は譲らなかった。政治家も調整に動いた。こうなると、古谷野が強引に自分の土俵に引きずり込んだも同然だ。結局、棋院と桃源が折れる形になった。

会場は、結婚式にも使われる風天閣大広間が充てられることと決まった。

その日、午後一時からの兵江白竜位お別れ会までには、まだ少し時間があった。報道のテレビカメラが四台入っていた。三台は、入り口近くの台の上に並んでいた。どっしりとした三脚を組んで、レンズを祭壇に向けて狙っている。ほかに、肩に担ぐタイプのカメラが一台。式場横のフロアには大型のモニターも置かれ、白竜位を慕う熱心なファンが集まっている。そんなざわつく会場の片隅に、猿渡はいた。仕事で遅れるという榊以外、棟方や芥川、御茶ノ水も並んで腰を下ろしていた。

「本の売れ行きはどうなんだ」

芥川に声をかけた。

「ああ……」

返事は、さほどかんばしくない。

「これは兵江とも話したことなんだが」

猿渡は、ゆっくりと言葉を選びながら続ける。

「そもそも俺たちなんて、同世代では少数派だったじゃないか」

同級生たちはみんなお行儀よくて、命じられたことを素直に聞いて。

「小説家や絵描きを目指してたヤツなんて、そんなにはいなかったからな」

棟方がうなづく。

「俺たちが影響を受けた、ボブ・ディランやウッディー・ガスリーだって、ほかの同級生の誰が知ってた？」

名前を聞いたことがあるというヤツくらいはいただろうが、誰も、曲までは聴いたことがないだろうと思われた。

「おまえのいうとおりだ」

相槌は打ったが、猿渡の言葉の真意まではつかみかねている。

「つまり、兵江がいつてたのは、こういうことなんだ。俺たちの精神世界に共感出来る人間というのは、この国には、少ない」

「さみしい話だな」

「そうだ。だが、現実だ。だから、おまえたちも売りたいのなら、売れるような創作に方向転換する必要があるんだよ」

「そんなことをするくらいなら、やめるよ」

芥川が、敢然と口を尖らせた。

「そういうだろうと、兵江もいつてた」

うんうんとうなずいて、猿渡は話を続ける。

「あくまでも自分たちの世界にこだわるなら、そういうスタイルを受け入れてくれる人たちが相手にするんだよ。演歌や歌謡曲のような、子供のころから馴染んだ歌詞が心地よい人たちもいる。それが現実なんだ」

「意味がわからん」

「だから、日本じゃダメだ。ディランの国で売るんだよ」

にやりと笑った。

「棟方は絵だから、いまのままでもいい。が、芥川は、ダメだ。英語で書くんだけ」

驚くべき話だった。

「もう、兵江はいない。この話は、だから、兵江の遺言だと思って聞いてくれ」

論ずように続ける。

「アメリカやイギリスなら、わかり合える人間の数は多いぞ。向こうで評価されれば、それからこっちに逆輸入させればいい。そうなれば、マーケットの事情は全く違ってくる。ビートルズの何たるかも知らないのに、話題になれば猫も杓子もビートルズのCDを手にする国民性だ。そうなって、凱旋帰国の形をとれば、演歌の国でも遅ればせながら伝わるものだってあるだろうよ」

「どうだ、と二人の顔を交互に見た。」

「そんな本、仮りに作ったとしても、どこが出してくれるというんだ」

世界を相手にするといっても、受けてもらえるのか。流通ルートだってわからないじゃないかと、棟方は首を振る。

「そういえば」

芥川は別の反応を示した。

「いまの担当者から、この詩を英語に出来ないかと打診されたことがある。あれは、そういうことだったのか」

はっとしたように、中空に視線を泳がせた。

「本当か」

棟方が、目を輝かす。

「やるかい？」

猿渡が畳み掛けると、

「そう簡単にいわないでくれ」

芥川は冷静だ。

「だが、考えてみるよ」

答えた芥川の横で、棟方がうれしそうだ。

「ああ、そうしてくれ」

売れないものは、陰で少しくらい友情買したところで、トータルではそうは売り上げは伸びない。しかし、市場を世界に移したら、話は別だ。

デイランの『風に吹かれて』は、何歳になってもBOYと呼ばれ、差別され続ける黒人たちの心境を、"どれほど遠くまで歩いてゆけば、MANと呼んで、一人前に扱ってくれるのだろうか"と歌う。

そんな歌詞の曲が爆発的に売れる国なら、彼らの精神世界に対する理解度も、少なくとも、この国よりは深いはずだと思う。

「本気で考えてみるからだ」

兵江の遺言でもあるのだからと、重ねて付け加えた。

「ああ、わかったよ」

芥川の横で、棟方もしきりにうなずいている。

「おい、あの子供たちはなんだよ」

御茶ノ水の視線の先には、十人ほどの子供たちの姿があった。

「さあ、どこの子かな」

中には、車椅子の子供もまじっている。

やがて棋士仲間が席に着き、白竜位と親交のあった財界関係者も並んだ。

司会は、福島真紀子だ。

「ただいまから、兵江白竜位、お別れの会を始めさせていただきます」

しめやかに宣言して、全員で黙祷を捧げた。

棋院理事長から、白竜位の略歴が紹介され、輝かしい戦績が称えられると、古谷野が祭壇中央のマイクの前に進み出た。

「僭越ですが、お別れの言葉を申し上げます」

緊張した面持ちで、弔辞を読み始めた。

「兵江先生、わたしには、先生から誰にも言わないでくれと頼まれ

ていたことがありますね。その約束を、今日は破ります」  
そういつて、じつと遺影を見上げた。

「それは、備後白竜園の子供たちと、先生との友情のエピソードであります。交流は、一通のファンレターから始まったといえます。障害を持ちながら、懸命に頑張っている子供たち。そんな中のひとりから送られた、『同じ白竜の名を持つ仲間として、先生、頑張ってください。僕も応援しています』という手紙です。その子は車椅子が離せない少年ですが、囲碁が趣味で、将来は囲碁棋士になりたいという夢を持っていて、勉強していると書いてあったそうです。先生はそのファンレターを、いつも財布に入れ、肌身離さず持っているんだと、自慢げにわたしに見せてくれましたね」

初めて聞く話だった。

「ファンレターのお返しに、先生は、帰郷のたびに白竜園を訪れておられました。対戦過多になって、少し帰る機会が遠のくと、無理にでもこちらでの用事を作っては帰郷し、施設を訪問されました。その度に、手土産は焼きたてのサツマイモです。大量の焼き芋を持って訪れては、みんなと輪になって、一緒に美味しく食べるのがお決まりの行事だと聞きました。先生は、子供たちからは、焼き芋のおじさんと呼ばれておられたそうですね」

子供たちの間で、鼻をすする音がした。すすり泣きは、風天閣のフロア係の女性から、参列している大人たちへと伝染していく。

司会マイクの前で、福島女史が鼻を押さえていた。

「先生は、ご自分が読まれた本を、すべて子供たちに寄付されました。友人の芥川さんにも協力を依頼され、ご自身、折にふれ買いたしとして、施設には、立派な兵江文庫が完成していますよね。わたしが、あなたを無理に飲み会に誘ったとき、あなたは、今日はどうしても都合が悪いなだと固辞されました。わたしは、みなさんご承知のように頑固なわがままおやじですから、勘弁して欲しいと懇願するあなたに対し、いくら先約があっても、どうしてもこつちを優先してくれと、強引に無理を通しました。そのとき、実は焼き芋を届けないといけないんだと、あなたから打ち明けられたのでしたね」

そうか、それがあの夜の宴会のときの話か、と思った。

「大切な友情の証の焼き芋は、いま司会を担当しております秘書に届けさせましたが、わたしは、あなたと子供たちとの、最後の時間まで奪ってしまいました」

子供たちの中には、声を抑えられず泣いている者もいる。

「先生はまた……」

古谷野の弔辞は続いた。

猿渡も、棟方も泣いていた。飾らない、シンプルで聞くものの胸を打つ弔辞だった。

「人間は、二回死ぬと申します。最初は、命が絶えたときです。二回目は、人々の記憶から消えたときだそうです。この言葉を聞いたのは数年前で、そのときは、なるほどそうですねと胸を打たれましたが、まさか自分が、こんなに早く使うことになるとは思ってもいませんでした。しかし、いま、あえて使わせていただきたいと思います。兵江白竜位は永遠の碁打ちとして、わたしたちの記憶から消えることはありません」

激しく大きな拍手が長く続いて、古谷野代議士は降壇した。

次には、御茶ノ水が、見覚えのあるロボットを抱いて祭壇前に立った。

「これは、兵江にプレゼントした二足歩行型ロボットのレプリカです。彼と共同開発していた対戦型囲碁ソフトを組み込んでいます。今日は、彼を忍んで、ご当地の碁会所ドラゴン席亭の猿渡さんと、対局させて見ようと思います。みなさん、いかがですか」

突然の宣言に、会場が沸いた。

「おいおい、聞いてないぞ」

顔の前で、手のひらを何度か横に振り辞退の意思を示したが、拍手は一向に止む気配がない。

「さあ、猿渡さん、観念してください」

司会の福島女史が煽ると、会場の拍手が一段と大きく鳴り響いた。「悪いヤツだなあ」

渋々、前に出ると、御茶ノ水が、ロボットを操作して、淡いピンクの壁に碁盤を大きく投影した。

「申し訳ありませんが、囲碁ソフトの先番とさせていただきます」はじめから、十六の四に黒石が表示されている。

「わかったよ。どうにでもしてくれ」

猿渡は、祭壇前で、用意された椅子に腰を下ろした。

「じゃ、十六の十六だ」

宣言すると、ロボットを操作して、その場所に御茶ノ水が白石を置く。こうして、兵江白竜位追悼対局は始まった。

しばらく対局が進むと、笑いながら見ていた棋院関係者の顔色が変わった。

「どうなんですか」

問いかける人へ、

「白熱しとります。おもしろい」

「なかなかのソフトですな」

それぞれの率直な感想を口にした。

一般的な対戦型ソフトの力量というものは、囲碁関係者ならそれなりの知識がある。将棋ソフトほどは強くないのだ。それが、このロボットは違った。



「もしかすると、もしかしますぞ」  
みんなの関心は高まった。

「やりますなあ」

「おもしろいことになってきました」

人々はいつの間にか、兵江と猿渡が対局しているような気分になつていた。もちろん、兵江側を応援しているのだ。人々は、夢中で、膝に置いたこぶしを強く握り締めていた。

しかし、八十数手目になって、会場が少しざわつき始めた。どうやら形勢が動いたようなのだ。

「これは……」

古谷野が呟く。

「くやしいが、白が、若干厚いですかな」

「いや、まだわかりませんぞ」

横の男が異論を唱えた。

あちこちで、ひそひそと、言葉が交わされるようになった。

猿渡は、と見ると、どうやら優勢を意識して、表情にはかすかに笑みすら浮かべている。

「さて、これはどうなるんでしょうかな」

いつの間にか司会席の脇まで進み出て、古谷野がマイクを手にしていた。形勢が傾いたのを見て、助け舟を出そうとしている。

「さて、どうされますか」

持っていたマイクを猿渡に渡す。

預けられて、猿渡も古谷野の気持ちを感じた。

「わかりました。俺だけが楽しんでいては申し訳ない。このあたりで、打ち掛けにしましょうか。御茶ノ水先生、いかがですか」

爽やかな笑顔を向けた。

「最後まで見届けたい気もしますが、こういう席ですから、やむを得ませんね」

快く応じると、会場が大きな拍手に包まれた。

ホールが、優しく暖かい気に満ちていく。

弔電が披露されたあと、全員が次々に献花をして、しめやかな中にも、どこかなごやかな雰囲気を漂わせ、お別れの会は幕を閉じた。

(四)

夕方近くなっていた。公開のお別れ会は終わったが、兵江白竜位とごく親しかった人間だけの、プライベートな別れの会は、部屋を移して予定されていた。

参加者には、友人たちに加えて、古谷野と秘書の福島女史、瀬戸内県知事室副参事の脇坂圭子と、立花の部下の秋友京一。それに、

綾小路富子がいた。彼らは、兵江が亡くなった、あの惨劇の部屋に集まっていた。

それではと、まず、立花の事件について説明をしようと猿渡が立ち上がったところに、東京から榊が駆けつけた。

「やあ兄弟、ぎりぎり間に合ったかな」

申し訳なさそうに、首の汗をふいている。

「よく来てくれたな」

握手をし、肩を抱き合う。この男がいてくれなければ、山県には逃げられていたに違いなかった。

「散々無理ばかり頼んだが、おかげで無事に幕が引けたよ」

「なんのなんの、といたいたいところだが、正直、おいらも大変だったよ。あんな苦労は、もう二度とごめんだね」

「すまなかつたな」

「だけど、解決できて本当によかった」

そう応じられて、あれで本当に解決できたといえるのだろうかという思いが湧いた。

「迷惑をかけて、すまなかつた」

あらためて衷心から榊の労苦をねぎらうと、おもむろに、立花課長の死について説明を始めた。

「実は、警察の鑑識の人に確認したのですが……」

首にまわされたロープには、明確に立花本人の指紋が残っていたが、足元に転がっていたアルミの脚立には、はっきりした指紋は誰のものも検出されなかったことを、まず報告した。

「脚立に立花さんの指紋が残っていなかったことについては、事件直後は、あまり考慮されませんでした。自殺としか考えにくかったことと、脚立がアルミ素材のため、その構造上、強度を増すために凹凸が付けられており、指紋がつきにくいと考えられたためです。しかし、本人のものに限らず、脚立に、いっさい新しい指紋がないというのは不自然だと思いました」

そこで、鑑識の溝曾路とのやりとりの要約を話し、いまのところは警察としての公式見解は自殺であり変わってはいないとしながらも、鳥取砂丘に山県を追い詰めた際の山県自身の言葉から、実際には殺人であったことが明らかになったこと、そのため、早晚、事件は山県による殺人として見解が変更されると思われることなどを説明し、それには古谷野や猿渡自身の警察での証言が大きな意味を持つだろうといった。

「実行役が間違いなく山県であったとまでは実証できないとしても、少なくとも、山県の一味による犯行であることだけは、これで明らかになったと思います」

秋友が、一言も聞き漏らすまいと、肩に力が入っているのがわか

る。

「そういうことになるよ……」

猿渡はここで、その秋友に向かつて、

「立花さんの奥さんには、犯罪被害者に対する国の救済制度を受ける資格があるということになります。榊よ、その秋友くんは、申請の仕方など、あとで丁寧に教えてあげておいてほしい。秋友くん、榊に君の名刺を渡しておいてくれるかな」

言葉が終わるのを待たず、秋友はトコトコと走り出て名刺を手渡し、ぺこりとお辞儀をした。

「わかった。必ず連絡するよ」

榊も気持ちよく応じる。

「次に、密室の件ですが……」

宿の仲居に頼んで、当日朝の状況を再現してもらった。

「そんなに難解な謎じゃないんです。だって、現場を密室にすることが目的ではなかった。発見を遅らせたかっただけですから。それが、結果的に密室になった」

若干照れ気味に、猿渡が説明を続ける。

「ここに、部屋の様子を記録した鑑識の写真を、コピーさせてもらったものがあります」

そこには、はだけた胸の白竜位が写っていた。

ドアと上がり框の間には毛布が畳んで敷かれていて、そこにすっぽりと碁盤がはまった形になっている。

死体役は、棟方だ。

「あまり気持ちのいいもんじゃないな」

そういいながら、部屋の中央に、仰向けにバツタリと横になった。

「全体的には、発見時の状況はこういうことでした。じゃ、いまから、密室を再現してみましよう」

猿渡は、碁盤を上がり框のすぐ近くまで引きずっていった。

「ちよつと待ってください」

芥川が手を上げた。

「答を聞く前に、少し考えさせてくれますか」

そういうと、押入れを開け、天井と床を調べ始めた。

「なるほど」

死体役で横になったままの棟方が、そうか、という顔をした。

それに意を強くした芥川は、ひとりではばらくゴソゴソやっていたが、

「おかしいなあ」

首を撫でながら、

「ドラマや映画だと、天井板を押し上げて、よくそこから出入りするんだがなあ」

残念そうにいつて、ついにギブアップを宣言した。

「理論的には、そういう方法も可能なんだろうけど、そのためには、あらかじめ天井裏や床下の下調べが必要だし、一刻を争うような場面では、もたもたしたことはやってられないはずなんです」

芥川が戻ってくるのを待って、  
「じゃ、いいですか」

そういつて、自分のポケットから一本の浴衣の紐を取り出した。  
「簡単なことなんです」

紐を碁盤の足に絡ませ、まわして、二本の足に均等に力がかかるように結ぶと、その両端を持ったままドアを開けて部屋の外に出た。  
「いいですか、こうしたんです」

浴衣の紐の両端を持って、碁盤の足をドアの外から引っ張る。ゴトンと、大きな音がして、碁盤は上がり框から落ち、ドアとの間の隙間にすっぽりと納まった。紐の一方を離し片方だけを持って引っ張ると、碁盤の足からするとほどけた。

「あの日、この部屋には浴衣が二組用意されていました。残っていた方の浴衣の紐が、事件後になくなっていたことも確認しています。要するに、しばらくの間、ドアが開けられないようにしておくことが目的でした。朝はゆっくりさせて欲しいという兵江の、ちよつとした悪戯心だと思われるように。先ほども申しましたが、あくまでも、事件の発見を遅らせるための時間稼ぎです。難解な密室を出現させて捜査を混乱させようとか、そういうことではありませんでした」

山県にとつても予期していなかった事態だったことを説明して、  
「とつさに思いついた工作だったんだと思います」  
「なるほど、じゃな」

むっくり起き上がった棟方がうなずいた。

「ちなみに、前夜祭の夜、散歩に出た兵江は拉致されたのに、宿に戻ったことになっていたのは、山県の仲間が兵江の浴衣を着て戻ったから。横を向いて通れば、誰も顔まで確認はしませんから」

ただし、翌朝の山県のチェックアウトは、おそらく女将がやったのではないかといった。白竜位と山県の役で宿に帰った男たちは、化けの皮がはがれないように、夜のうちに早々に姿を消したはずだからと。

猿渡の謎解きが終わると、一同は、古谷野に案内されて、再び部屋を移った。

通されたのは、古谷野に招待されて猿渡も白竜位と宴の夜を共にした部屋だ。床の間の前には、今宵は和テーブルが用意されていた。

その上に、兵江健作と鷺尾夕子の遺影が並んで置かれている。その遺影をコの字の形に囲むように、みんなが席に着いた。プライベートルな、別れの会の始まりだった。

簡単な食事と、飲み物が用意されていた。

「ではみなさん、ともに白竜位を忍びましょう」

もう、あいさつは抜きで、古谷野がグラスを高々と掲げた。

乾杯！

おう、乾杯！

「悲しいことだけど、湿っぽいのはやめましょう」

猿渡が提案した。

「うん、賛成だね」

参加者たちは、酒を交わしながらそれぞれの思い出に浸っているふうであった。

芥川の詩に兵江がメロディーを付けた曲が、音量を絞って繰り返して流されていた。兵江自身がギターを弾きながら歌った、ローリング・ボーイという歌だ。

いいじゃないかもっと飲もう　もう少し話そう

歌いたけりや歌えばいいさ　夜はまだ長い

通り過ぎた時代肴に　まだまだ飲やろうぜ

悔やんでいたらきりがないさ　いまが大事なんだ

本当は自信なんかないけど

風に吹かれて転がってゆく

季節は頑なに姿を変えるけど

厳しい冬は本当に必ず春になるのか

空に浮かぶ鳥も　流れる雲も

そしらぬ顔して　答えてはくれない

いいじゃないかもっと飲もう　もう少し話そう

歌いたけりや歌えばいいさ　夜はまだ長い

通り過ぎた時代肴に　まだまだ飲やろうぜ

悔やんでいたらきりがないさ　いまが大事なんだ

本当は何もわかつちやいないけど

風に吹かれて転がってゆく

時はおごそかにこの世を導くけど

厳しい冬は本当に必ず春になるのか

空に浮かぶ鳥も　流れる雲も

そしらぬ顔して　答えてはくれない

いいじゃないかもっと飲もう　もう少し話そう

歌いたけりや歌えばいいさ 夜はまだ長い

素敵な曲ね。

脇坂女史が、御茶ノ水に話しかけている。

「この歌の心、わかりますか」

「わかるわよ」

兵江の遺影に目をやり、手にしたワイングラスに口をつけた。

「僕らみんなの、そのままの気持ちなんです。歌っている、妙にせつなくなる歌なんですよね」

御茶ノ水は、ウイスキーの水割りだ。

「確かに、せつないといえはそうだけど、男らしい逞しさを感じるわ」

うっとりというのと、

「ようわかっつとられますなあ」

唐突に、棟方が横から口を挟んできた。

猿渡は、綾小路富子と並んで腰を下ろしていた。

「今回は、役に立てませんでした」

小さくいつて、

「申し訳ありません」

富子の前に、深々と頭を下げた。言葉遣いも、彼にしては特別丁寧だ。

「あら、何のことですか」

当惑する老女に、

「もう少し早ければ、夕子さんまで死なせることはなかった」

いまいましように、言葉を繋ぐ。

「えっ」

富子が目を見張った。大きく目を見開いたまま、しばらく何もいわない。硬直したように、猿渡を見つめたままだ。

黙って、ただ、見つめている。

「綾さん、全然似てないけど、鷲尾夕子さんのお母様ですよ」

意外な言葉を発した。

怪老、綾小路富子は、しばらく無言のままだったが、ついに決心したように、

「全然似てない、は余計。夕子は夫に似たのよ」

辛うじて、牢名主の威風を誇示しながら、猿渡の言葉を肯定した。「でも、どうしてわかりましたの？」

隠していたものが突然に表面に出てきたことで、張り詰めていたものがゆるんだのだろうか。彼女の頬を、一筋の涙が伝った。

猿渡は、ポケットからハンカチを出して渡し、

「本当に、お役に立てなくて、申し訳ない」

絞りだすようにいった。

「鷺尾家が、なぜ親子三人の面倒を見ていたのか、ずっと気になっていました。それと、綾さんは、夕子さんと弟の憲治くんのご事情は詳細に話したけど、母親のことにはほとんど触れなかった」

それで、母親がどういう人だったのか、調べたのだと打ち明けた。「若いころは院生の経験もある鷺尾家当主ですが、綾さんは、その当主の囲碁の師匠をされておられたんですね。地方棋士の当主もかなわないほどの打ち手だった。母親がそうだから、息子の憲治くんも、当然のように囲碁の道に進んだ」

老女の表情が、少しずつやわらいでいった。

「憲治は、勝負事には向いてない子でした。それがわかっていながら、私は、無理にやらせた。院生になるのも、はじめは嫌がったの」

唇を噛んで、

「私があの子を殺したんです」

自殺に追い込んだ責任は、本当は自分にあると。

「鷺尾は、囲碁では勝負にならないと悟ると、私とは、お酒を飲む時間の方が多くなっていたんです」

ポツと顔を赤らめて、

「それが、あの子には耐えられなくて、家にいたくなかったんですよ。ある日、急に院生になることを受け入れたんです」

そうだったのかと、思った。

「いや、男はそんなことで人生の方向を決めたりはしないものです。お母様にはわからなくても、彼なりに勝負師としての血が騒いだに決まっていますよ」

「そうかしら。本当にそう思いますか？」

「あたりまえですよ」

「そう……」

さみしそうに、少し微笑んだ。

「憲治くんを失われて、今回はまた、夕子さんと山県との交際を、ハラハラしながら見ておられたのでしょうかね」

「彼とは付き合っただけでほしくなかった。職員になっただけは知っていたし、心配でしょうがなかったわ。でもね、小さいころから、彼には何度となく助けてもらっていたの。恩があった。だから、黙って見てるしかなかった」

「それで、俺を動かした」

「よくやってくださったわ」

「いや、ダメだった」

猿渡の後悔は深い。

「せっかくな頼りにされたのに、俺というヤツは……」

悔やんでも悔やみきれなかった。力になれなかった。

「わたし、どうにかして、山県と手を切らせたかったんです。最近の彼は危険すぎました。でも、夕子はもう、私の意見には耳を貸さなかった」

だから、猿渡を動かそうと思った。

「俺は、その期待に応えられなかった」

「いえ、感謝していただけますわ。今回の追跡だって、みなさん、最善を尽くしてください。結果ですから」

「いや、風天閣から帰って、しばらく、俺はのんきに飲んでいた」

「私がお勧めしました。お疲れのようでしたから」

「すぐに出ていたら、間に合って、助けられたかもしれない」

「どうやって?」

女将が姿を消したという情報が入ってからは、ほとんど時間的なロスはなく出発したとっていい。

「それは……」

猿渡が口ごもると、

「秘書の福島さんから、現地でのお話をうかがいましたわ。少しばかり早く砂丘に着いていたとしても、相手は山県です。警察のヘリが到着するまでは、誰も、なにもできなかつたと思います。むしろ、あやうく取り逃がすところだったのを、おふたりが危険を顧みず飛び出されて」

それで、時間を稼いで、遂には山県を追い詰めることができた。

「お礼を申し上げます」

「いや、功績があつたのは古谷野先生です。先生が飛び出されたから、俺は、あとからつられるように出ただけで」

顔から火が出る思いだった。誉められるようなことをしたとは思っていない。恥ずかしい限りだ。

気まずい思っている、

「やあ、勇敢な男がこんなところにいたぞ」

突然、榊が横に来た。

「名探偵どの、今回は大活躍でしたな」

「馬鹿、だから、俺は何もやっちゃいないんだ」

不愉快な顔で、旧友を睨みつけた。

そして、すぐその直後に、

「あ、いや、すまん」

あわてて、遠来の友に詫びた。

「榊のお陰で、なんとか事件の幕引ができた。いろいろと無理を聞いてもらって申し訳なかったな」

珍しく狼狽する猿渡の様子と、隣の綾小路富子の特別な存在に気付いた榊は、



「これは、初めまして。お話し中に礼儀をわきまえず乱入してしまい申し訳ありません。この男とは、その昔に兄弟の盃を交わしたところのある、わたくし、榊と申します」

内輪の会であり、榊も少し酔っている。

「これはご丁寧に。猿渡さんと、ご兄弟の盃を。そうなんですか」  
老女も、慣れた様子で大人の対応をする。

「綾さん、こいつは勝手に兄弟などといってるけど、単なる飲み友達だったという意味ですから」

あわてて言葉を補い、大活躍だった旧友に向かっては、

「こちら、綾小路富子さんだ。碁会所ドラゴンの面倒を見てくださっている」

怪老のことを紹介したが、鷲尾夕子の母親だということまでは触れない。

「綾さん、この男がジェットヘリや海上保安庁の船を手配してくれて、山県を追い詰めてくれた立役者です。古谷野先生と、この榊が、今回の功労者なんです」

「そうでしたか。お世話になりました」

「あ、いえいえ。元々、それがおいらの仕事ですから」

お世話になりました、の意味もわからないまま、榊は話を合わせている。

「わたし、今夜は不思議な気分ですわ」

鷲尾夕子の母親だということを隠していたのに、猿渡に見破られてしまつて、老女は緊張の糸がぷつぷつと切れたようにも思えた。

「悲しいのに、本当に悲しいのに、でも、少しだけ、ほっとしたような気持ちもあつて」

中心に置かれた遺影を見つめ、思わず知らず、涙が頬をつたう。

「そういつてもらえると、俺、少し救われた気分です」

双眸を閉じ、天井を仰いだ。うつむくと、こらえられないものがあつた。

「この話、終わりにしてくださいませんか」

もうやめようと、静かに猿渡の手の上に自らの手を置いた。

繰り返し流れていたローリング・ボーイを、誰かが、流れる兵江の声にあわせて口ずさみ始めた。

♪ いいじゃないかもっと飲もう もう少し話そう

歌いたけりや歌えばいいさ 夜はまだ長い

通り過ぎた時代肴に まだまだ飲ろうぜ

悔やんでいたらきりがいいさ いまが大事なんだ

本当は自信なんかないけど

風に吹かれて転がってゆく

季節は頑なに姿を変えるけど  
厳しい冬は本当に必ず春になるのか  
空に浮かぶ鳥も 流れる雲も  
そしらぬ顔して 答えてはくれない

「僕らの歌だ」

御茶ノ水が叫んだ。

「兵江の書いた曲もいいが、わしは歌詞がたまらんぞ」  
棟方が応じた。

「ありがとう」

芥川が笑った。

「お別れの会にふさわしいわね」

脇坂圭子が、猿渡の肩に手を置いた。

「ああ、そうだな」

歯を食いしばって答えて、手の甲でまぶたを押さえた。

♪

いいじゃないかもっと飲もう もう少し話そう  
歌いたけりや歌えばいいさ 夜はまだ長い……

芥川も、棟方も歌っていた。

おいらは初めて聴いたが、この歌は、まったくおいらの気持ちに  
ぴったりだよ。これはおいらの歌だ」

榊は芥川を振り返った。作詞者に対しグラスを掲げて敬意を表し、  
感無量の顔で飲み干した。

「共感することができれば、誰だってそういう気持ちになるだろう  
な」

猿渡が、応じた。

「おいらだって、真っすぐ何かに向かおうとする気持ちと、戸惑い  
迷う気持ちは、いっだって持っていたんだよ兄弟」

榊も、うなずく。

「わしも不安で一杯だったが、こいつらと出会えて、おかげで、こ  
こまで来ることができた」

しみじみという棟方。

「みんな、不安だったよ」

御茶ノ水が乾いた声でいって、

「そんな中でも、兵江は見事だったな」

「うん、見事だった」

「彼に学ぼう」

あとは、口々に兵江をたたえた。

「僕たちも、同じところに立ち止まってはもらえないよ」

「ああ、これからも、風に吹かれて転がってゆくさ」

♪ 空に浮かぶ鳥も

流れる雲も

素知らぬ顔して

答えてはくれない

口ずさむ面々に、遺影が静かに微笑みかけていた。